小松市古府遺跡

県営ほ場整備事業小松東部地区関係
埋蔵文化財調査報告書

1987

石川県立埋蔵文化財センター

小松市古府遺跡

県営ほ場整備事業小松東部地区関係
埋蔵文化財調査報告書

1987

石川県立埋蔵文化財センター

序　　文

小松市古府町は市街地の東方、梯川の中流右岸に所在する。古府の町名は、明治８年から現れる能美郡古府村を引き継いだもので、比較的新しい町の名といえる。古府村は、もともと古浜・国府両村が合併して成立したものであり、両村名の一字づつをとって新村名としたものであった。『日本地名辞典－石川県－』（角川書店：1981刊）によるかぎり、古浜と国府の地名は古代・中世にまで遡るものでない。古浜の浜は舟着場の意味であり、梯川に鍋谷川が合流する地点がかつて舟の発着に適した所だったからという。村名としては、藩政時代にみえるという。一方、加賀の国衛所在地を思わせる国府の名の由来については触れられておらず、しかも、藩政期にもこの名を付した村名は無かったとしている。『能美郡名蹟誌』や『加賀志徴』では、国府村の地を加賀国府の旧地と推測しているが、とくに確固たる根拠を挙げている訳ではない。

現在、加賀国府の所在地については、代表的なものとして小松市古府町説と金沢市古府町説がある。一時期の国府が能美郡内（手取川以西）に置かれたという点は動かし難たいが、後に北加賀の金沢平野へ移されたとの考え方や金沢平野から能美郡内へ移ったとする考え方も、今は有力な見方の一つとなっている。いうまでもなく、古代に関する文献学的記録は限られており、この問題に確たる答えを出すことは、極めて至難なことといえる。加賀国府の所在をめぐる今後の研究には、考古学的な諸データーの蓄積と解釈が欠かせないものと考える。本報告書で紹介する古府遺跡は、古府町一帯に広がる古代遺跡であるが、発掘調査の対象としたのは旧古浜村域に属する小面積に過ぎない。したがって、上記の問題に回答しうるような内容では決してない。ただ、可能性を秘めた土地周辺での考古学データーは、それなりに重視されるべきであり、また周辺部での今後の調査が重要性をもつことはいうまでもない。

調査の結果、当遺跡は弥生時代や奈良時代の遺物も伴うが、中心となるのは９世紀後半と12世紀代にピークをもつ平安時代遺構群であり、13～15世紀代の中世遺構も遺している。平安時代遺物でとくに注目されるのは、14点出土している瓦片（布目瓦）であろう。いうまでもなく古代においては、瓦をふく建造物は官衛や寺院にほぼ限られるとみられる。当遺跡出土の瓦は、９世紀末から10世紀前半ごろの製品だとされ、１点の変形唐草文で飾る軒平瓦は、その特徴から小松市戸津古窯で焼かれたものという。この遺跡のどこかで、能美郡内産出の瓦を用いた建造物が、存在した可能性は極めて高いものと考えられる。加賀国は９世紀前半に立国しており、当遺跡での所見は、当地に加賀国衛が所在するとみる説になんら矛盾するものでなかった。ただ、調査面積が極めて狭く、可能性を認めながらも、積極的に発言できる根拠を欠く段階とすべきであろう。

現地調査と報告書刊行にいたる過程には、多くの方々のご協力をえている。心からお礼を申し上げたい。とくに原稿執筆で多くの労を供された米沢義光氏に感謝申し上げる。

所長　橋本澄夫

例　　言

1．本書は、石川県小松市古府町地内に所在する古府遺跡の発掘調査報告書である。

2．本遺跡の発掘調査は、石川県農林水産部耕地整備課施行の県営ほ場整備事業小松東部地区古府工区施工の係るもので、同課の依頼により昭和59年度に石川県立埋蔵文化財センターが実施したものである。

3．本遺跡の調査期間、調査面積及び調査担当者は次の通りである。

昭和59年7月3日～昭和59年8月4日　約231m²

石川県立埋蔵文化財センター主事　米沢義光（現在石川県立松任農業高等学校教諭）が担当し、田中孝典（調査員）の補助を受けた。

4．本遺跡の調査費は、昭和59年度は文化庁の補助を受け、昭和60・61年度は耕地整備課の費用負担と一部を文化庁の補助事業とした。

5．調査にあたり、次の方々の御協力を得た。記して感謝の意を表する。

石川県農林水産部耕地整備課、石川県小松土地改良事務所

西　久秀、西　外二、家宅輝蔵、多田徳次郎、吉村留枝、国本喜代子、太田恵美子、西　清子、国本きくえ、川中とめ、中山輝枝、西島昭子、坂下和子、浜秋茂子、浜崎悟司、木戸口善治、米津博文、磯野外志行、串　彰文、南　隆志

6．遺物整理は、昭和60年度に石川県埋蔵文化財協会に委託した。

遺物の復元、実測、トレースは協会の勝島栄蔵、小林なお子、小谷紀美子、横山そのみが担当した。

写真撮影及び遺構図のトレースは、米沢が行った。

7．本書の編集と執筆は、米沢が担当し、石川県立埋蔵文化財センター職員から協力を得た。

8．本書中の挿図の方位は磁北であり、レベルの数値は絶対値である。

9．遺構の記号は以下の通りである。

ＳＥ　井戸、ＳＤ　溝、ＳＫ　土壙、ＳＸ　その他

10．本調査の遺構・遺物の実測図・写真、出土品等の資料は、石川県立埋蔵文化財センターにて一括保管している。

目　　次

第１章　位置と環境 …… 1

第２章　調査に至る経緯 …… 4
　第１節　調査に至る経緯 …… 4
　第２節　調査日誌 …… 5

第３章　検出された遺構 …… 7
　第１節　遺構の検出状況 …… 7
　第２節　１区の遺構 …… 7
　第３節　２区の遺構 …… 8
　第４節　３号トレンチの遺構 …… 10
　第５節　４号トレンチの遺構 …… 10

第４章　出土遺物 …… 18
　第１節　出土遺物の概要 …… 18
　第２節　Ⅰ期（弥生時代）の遺物 …… 19
　第３節　Ⅱ期（７世紀～８世紀）の遺物 …… 19
　第４節　Ⅲ期（９世紀～10世紀）の遺物 …… 20
　第５節　Ⅳ期（12世紀）の遺物 …… 24
　第６節　Ⅴ期（13～15世紀）の遺物 …… 27
　第７節　ヘラ記号・硯・土錘・円盤状陶製品・砥石・
　　不明石製品・鉄製品・古銭 …… 28
　第８節　瓦 …… 29
　第９節　加工石 …… 30

第５章　ま と め …… 31
　第１節　遺構について …… 31
　第２説　遺物について …… 32

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置（Ｓ＝1/25,000）…… 2
第２図　調査区の位置図（Ｓ＝１/2,000）…… 3
第３図　１区・２区遺構配置図（Ｓ＝１/120）…11
第４図　３号トレンチ・４号トレンチ遺構配置図（Ｓ＝１/180）……12
第５図　１区遺構実測図①（Ｓ＝１/40）……13
第６図　２区遺構実測図②（Ｓ＝１/40）……14
第７図　２区遺構実測図③（Ｓ＝１/40）……15
第８図　３号・４号トレンチ遺構実測図④（Ｓ＝１/40）……16
第９図　４号トレンチ遺構実測図⑤（Ｓ＝１/40）……17
第10図　遺構（ＳＥ－１、ＳＫ－１、Ｐ－30）出土遺物①（Ｓ＝１/3）……31
第11図　遺構（ＳＥ－２、ＳＫ－２～８）出土遺物②（Ｓ＝１/3）……32
第12図　遺構（ＳＫ－９、ＳＤ－５、ＳＸ－１・２、Ｐ－118・132・143）出土遺物③（Ｓ＝１/3）……33
第13図　遺構（ＳＥ－３、ＳＤ－11、Ｐ－68・104・161）出土遺物④（Ｓ＝１/3）……34
第14図　遺構（ＳＫ－10・11、Ｐ－159・160）⑤（Ｓ＝１/3）……35
第15図　遺構（ＳＤ－９）出土遺物⑥（Ｓ＝１/3）……36
第16図　遺構（ＳＤ－９）出土遺物⑦（Ｓ＝１/3）……37
第17図　遺構（ＳＤ－９）出土遺物⑧（Ｓ＝１/3）……38
第18図　遺構（ＳＤ－９・10）出土遺物⑨（Ｓ＝１/3）……39
第19図　包含層出土遺物①（Ｓ＝１/3）……40
第20図　包含層出土遺物②（Ｓ＝１/3）……41
第21図　包含層出土遺物③（Ｓ＝１/3）……42
第22図　包含層出土遺物④（Ｓ＝１/3）……43
第23図　包含層出土遺物⑤（Ｓ＝１/3）……44
第24図　包含層出土遺物⑥（Ｓ＝１/3）……45
第25図　遺構・包含層出土遺物⑦（Ｓ＝１/3）…46
第26図　遺構出土遺物⑧（Ｓ＝１/6）……47
第27図　古府台地周辺の遺跡と調査区の位置図……50

表　目　次

第１表　古府遺跡出土陶磁器一覧表……52

第１章　位置と環境

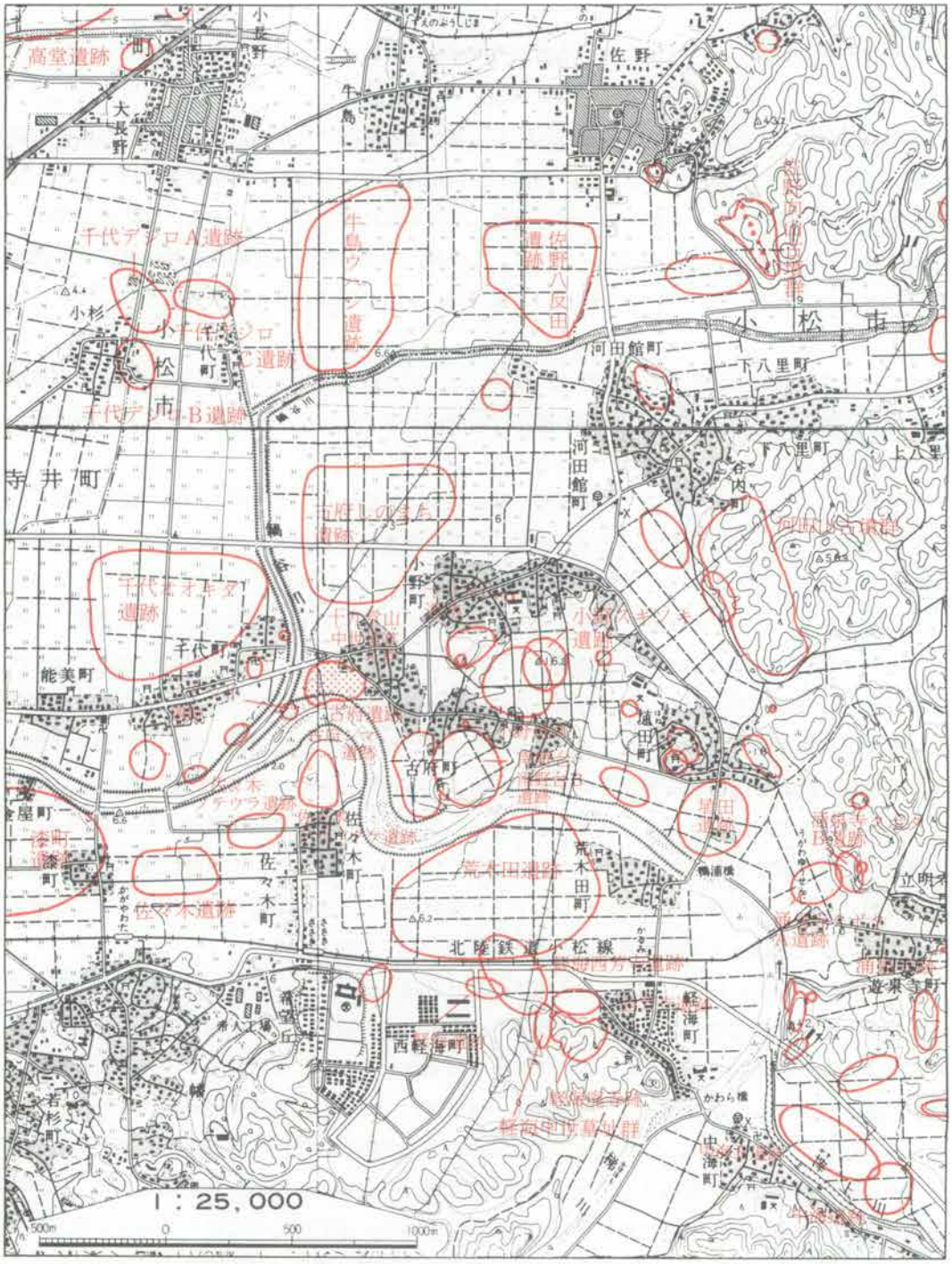
小松市古府遺跡は、小松市古府町の南西端に位置し、町村合併前の旧古濱地区のアサバタケ・カドタ・フドンドと称する一帯に存在している。

遺跡の存在する古府町は、東の能美郡丘陵から派生する標高約10mの洪積台地とその西側末端に延びる微高地上に広がっている。この南側には白山連峰の大日山系に源を発する梯川が、山間部を抜け沖積平野に出てから蛇行しながら西流して日本海に注いでいる。また、同町の北側から西側には、支流の鍋谷川が梯川に注いでいる。この梯川中流左岸と小松東部丘陵の間には沖積平野が形成されている。対して右岸側は、梯川と鍋谷川によって形成された沖積平野が北方に広がっている。

さて、本遺跡周辺に存在する縄文時代の遺跡には、梯川の支流滓上川右岸の河岸段丘上に中期後半の中海遺跡が存在している。同期の遺跡は軽海西芳寺遺跡が、小松東部丘陵から北西に緩く傾斜する台地上の「前山」に立地している。

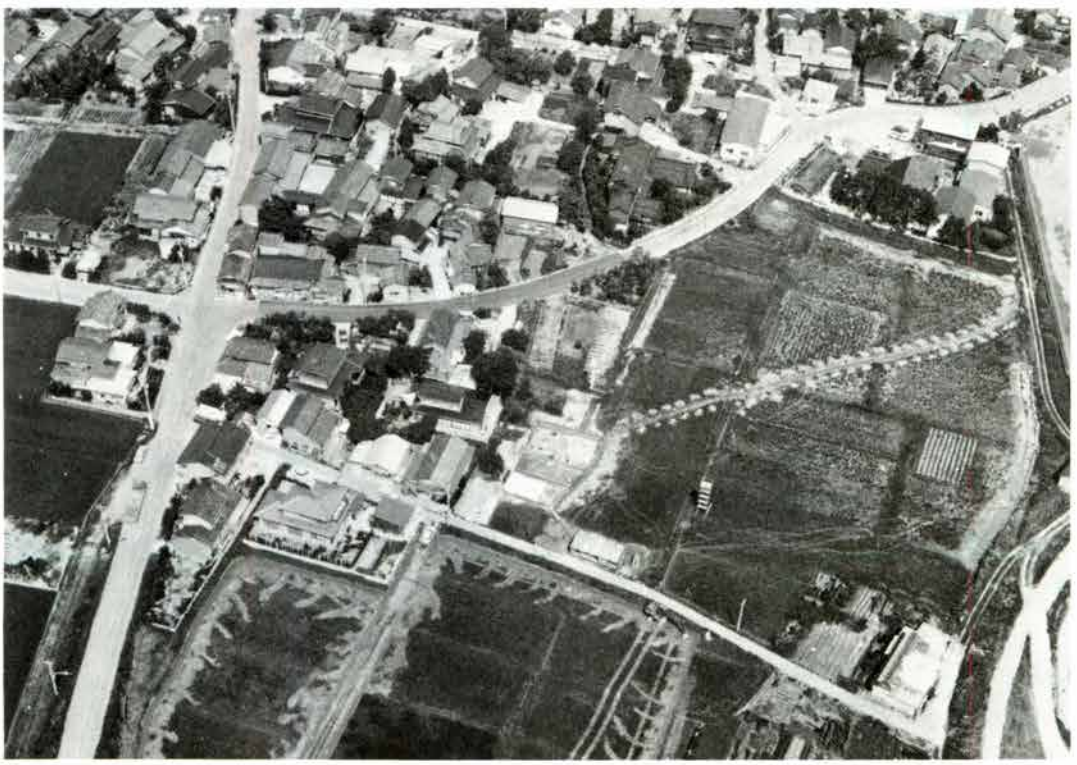
弥生時代に入ると、梯川左岸の沖積平野に遺跡が分布し始める。下流側の中期の遺跡には、八日市地方遺跡、梯川鉄橋遺跡がある。特に八日市地方遺跡から検出された土器は「小松式土器」と名付けられ、北陸の弥生時代中期中頃の標式となっている。中流域では後期後半になると遺跡も増加しだしてくる。その遺跡には漆町遺跡、白江梯川遺跡、白江念仏塔遺跡、吉竹遺跡、佐々木ノテウラ遺跡、佐々木アサバタケ遺跡などが存在している。また、支流の鍋谷川右岸には千代デジロA・B遺跡なども形成されている。この何れの遺跡も両河川の自然堤防上に立地しており、この流域が農耕生活に適していたことが窺われる。梯川中流域の遺跡は、古墳時代前期には他地域の土器群の流入と伴に飛躍的な発展を遂げている。各遺跡とも前時代とは比較にならないほど多くの遺構と遺物が検出されている。このことから前時代よりさらに一段階進んだ当時の「ムラ」の構造や生活形態を知る上で、貴重な手掛かりを与えている。しかし、古墳時代後期（６世紀後半）以降になると遺跡群も規模を縮小し、７・８世紀になると漆町遺跡の金屋サンバンワリ地区、佐々木ノテウラ遺跡と本遺跡で確認される程度に減少してくる。

９世紀になると弘仁14（823）年には、越前国より分離して加賀国が設置される。この加賀国衙の所在地については諸説があるが、本遺跡東方の古府台地周辺説が有力である。本遺跡北方の古府しのまち遺跡付近は「能美千軒、古府千軒」と口承され、台地上に所在する十九堂山遺跡からは布目瓦片が出土し、国分寺としての可能性が推察されているが、確証は発見されていない。これが９世紀後半～10世紀に入ると、梯川中流域の各遺跡で掘立柱建物を始め遺構や遺物が急増してくる。この再開発は、国司として赴任してきた受領層の土着化に伴い国衙を利用して、一時放棄され荒廃した条里制水田を対象としたと考えられている。漆町遺跡の若杉ヤシキワリ地区から10世紀中頃に比定される「庄」の墨書の残る須恵器は、国府の膝元で荘園開発が行われていたことを示す資料として注目される。平安後期以降中世になると、梯川中流域の遺跡からは多数の井戸跡が検出されており、当時の生活を探る上で良好な資料が検出されている。本遺跡はまさにこのような歴史的環境の中で形成されたものであろう。



第１図　遺跡の位置（S＝1/25,000）

第２図　調査区の位置図（S＝1/2,000）



調査区の位置（上空から）

第２章　調査に至る経緯

第１節　調査に至る経緯

古府遺跡の調査は、昭和59年度県営ほ場整備事業小松東部地区古府工区施工に伴う緊急発掘調査によるものである。

この小松東部地区のほ場整備事業は、昭和46年度から実施されている。この事業に伴い古府地区では昭和48年度、今回の調査地点の北方約500mあたりの所に存在する古府しのまち遺跡の調査が実施され、古墳時代から中世にかけての遺構と遺物が検出されている。また、この小松東部地区内では、昭和57･58年に本遺跡から南東へ約2.7km離れた梯川の支流滓上川右岸に広がる中海遺跡の調査が、中海工区施工に伴い実施された。縄文時代から中世にかけての遺構と遺物が検出されている。

１区調査風景

昭和57年４月に県耕地整備課から古府工区のほ場整備事業を昭和58年度に実施するため、分布調査の依頼が県立埋蔵文化財センターへ提出された。その範囲は、古府地区南側の台地上に鎮座する石部神社の西側から、古府地区西端を南北に流れる鍋谷川と梯川に挟まれた約7.6 haの面積であった。センターでは、同年４月12日～14日に分布調査を実施した。その結果、梯川沿いの低地の水田部分では遺構・遺物は検出されず、砂層が堆積していることから梯川の旧河道域であったと推定された。しかし、石部神社周辺の台地上一帯では、耕土下から厚く堆積した遺物包含層や地山面から多数の遺構が検出された。この遺跡は石部神社の東・北方に存在が指摘されている加賀国府との関連性が高いことが推定された。そのためこの遺跡の取り扱いについて県耕地整備課と協議した結果、当初の削平予定から遺跡を盛土保存することに工法変更することで合意した。

２区調査風景

１区ＳＥ－１調査風景

一方、この工区西側（本発掘調査を実施した地

点一帯）では、すでに春の耕作準備が始まっており、分布調査はできなかった。そのため秋の収穫後に行うことになり、それは同年10月27日に実施している。その結果、梯川沿いの通称フドンドと称する畑地の東側に隣接する水田と、工区北側で集落背後に残る畑地部分から、それぞれ遺物包含層と遺構が検出された。また、遺物包含層や遺構の検出されなかった水田部分でも、鍋谷川寄りの所を除き地山面を確認しており、遺構の存在している可能性の高いことが推定された。このため県耕地整備課へは、工事で遺物包含層や地山面を掘削する場合には、発掘調査を実施する必要があると回答している。

昭和59年度になり、この古府遺跡の調査依頼が、県耕地整備課からセンターへ提出された。センターでは、同工区内北側で基盤を削平して排水路の設置される畑地（１・２区）と工区東側及び南側で排水路の設置箇所（３・４号トレンチ）の調査を実施した。その調査は昭和59年７月３日から開始し、同年８月４日に終了した。現地調査の経過の経緯については、第２節の調査日誌の通りである。

第２節　調査日誌

７月３日(火)　工区内に作業小屋（プレハブ）を設置する。

７月４日(水)　発掘機材等をセンターから搬入し、作業員を入れ１区の畑地から掘り下げる。

７月７日(土)　２区の畑地を掘り下げる。

７月11日(水)　２区の畑地を掘り下げる。

７月12日(木)　２区の畑地の掘り下げ終了後、１・２区の遺構検出を行う。

７月13日(金)　１区の遺構検出終了後、重機（バックホー）で工区と東側と南側の排水路設置箇所（３・４号トレンチ）の遺構確認調査を行う。

７月14日(土)　午前中雨のためプレハブで発掘機材と出土品の整理を行う。午後１・２区の遺構検出状況の写真撮影を行う。終了後１区の遺構から掘りはじめる。

７月16日(月)　雨のためプレハブで発掘機材と出土品の整理を行う。

７月17日(火)　１区の遺構の掘り下げと２区西側の包含層を掘り下げて遺構検出を行う。ベンチマークの移動後、１区の土壙の土層実測を行う。

７月18日(水)　１区の遺構を掘り下げる。２区西側の包含層の掘り下げと遺構検出を行う。

７月19日(木)　１区の井戸跡を掘り下げて土層実測を行う。覆土下部より緑釉片が出土する。２区東側の遺構検出を行う。

７月20日(金)　１区の井戸跡を完掘して１区の完掘状況の写真撮影を行う。２区の遺構を掘り下げる。

７月21日(土)　１区の遺構実測を行う。２区の遺構を掘り下げる。

７月23日(月)　１区の遺構実測とレベル記入を行う。２区の遺構を掘り下げる。

７月24日(火)　２区の土壙の土層実測を行う。工区南側の４号トレンチを掘り下げる。

７月25日(水)　２区の遺構の遺物を取り上げ後、１・２区の完掘状況の写真撮影を行う。４号トレ

ンチを掘り下げる。

7月26日(木)　2区の土壙を掘り下げる。4号トレンチ遺構を検出して掘り下げる。

7月27日(金)　2区の遺構実測とレベルを記入する。4号トレンチの遺構を掘り下げる。

7月28日(土)　1・2区の遺構実測とレベルを記入する。工区東側の3号トレンチを掘り下げる。

7月30日(月)　2区の遺物取り上げと北壁の土層実測を行う。4号トレンチの遺構実測を始める。3号トレンチの遺構の掘り下げと検出を行う。

7月31日(火)　2区の残りの遺構実測とレベルを記入する。4号トレンチの遺構実測をする。

8月1日(水)　3・4号トレンチの遺構実測とレベルを記入する。

8月2日(木)　3号トレンチの井戸跡を掘り下げ実測する。4号トレンチの溝を拡張して掘る。

8月3日(金)　3号トレンチの井戸跡の土層実測と写真撮影を行う。4号トレンチの溝を完掘し、実測・レベル・写真撮影を終え、現場作業を終了する。

8月4日(土)　午前中に発掘機材・実測図・遺物を整理し、午後センターへ撤収する。

第３章　検出された遺構

第１節　遺構の検出状況

今回調査を実施した箇所は、工区北側の畑地部分の１・２区（約133m²）と工区南側で梯川沿いの排水路設置箇所の４号トレンチ（56m²）とそこから東へ約25m離れて、工区東側の排水路設置箇所の３号トレンチ（42m²）の水田部分である。レベル的には１・２区の畑地の方が高く、３・４号トレンチの方が低くなっている。それはこの水田部分は以前の耕地整理で削平されて低くなったもので、その１・２区の畑地はその削平を免れたものといえる。本来はこの古府地内でも旧古濱地区の集落背後から、梯川沿いに広がりフドンド遺跡の存在する畑地にかけては、微高地状の高まりが続いていたのであろう。それは本調査のおり、１・２区と３・４号トレンチの中間の水田部分で、耕土下の地山面に柱穴の掘り方が存在していたのを確認していることからも推定される。

遺構の分布状況では、２区からのものが多かった。この２区は範囲が狭い割に地山のレベルが約4.1mと他地点より高く、包含層や遺構も良好に残っていた。が、しかしその遺構の重複は激しかった。検出された遺構には、井戸跡・土壙・溝・ピット等があり、掘立柱建物の柱穴のピットも確認したが、調査区が狭いため建物を確認するまでには至らなかった。この２区も南側半分は地山が大きく削平され、盛土して畑地となっていたことが判明した。１区は２区の西側約６m離れていたが、耕土下で地山面となり、包含層はほとんど存在していなかった。地山面のレベルは２区よりも僅かに低い4.00mを測る。遺構の種類は２区と同様なものが検出されたが、その数も少なくまた重複も少なかった。３・４号トレンチでは地山面が削平されているため、検出された遺構数も少なく、特に４号トレンチではそれが顕著であった。以上、各調査地点の状況から古府遺跡の範囲は、旧古濱地区集落下からフドンド遺跡にかけての一帯に分布していたものと推定される。以下、各調査区で検出された主な遺構について説明して行きたい。なお、（ ）の数値は現存値を示している。

第２節　１区の遺構

ＳＥ－１（第３・５図）　１区の北端で検出され、ＳＤ－２を切って作られている。掘り方の北側は一部調査区外へ延びている。掘り方の上端径は約(2.30)×2.50mとほぼ楕円形の平面プランを呈している。深さは1.17m〔Ｌ＝2.80m〕を測り、底部は青灰色粘土層上面に達している。覆土は①～⑮層に区分されたが、その堆積状況からすると①～⑦層までの上層と、⑧～⑮層までの炭化物や腐植物を多量に含む下層に区分される。この下層は井側材の抜き取り後に堆積した土層とみられ、この掘り方内をゴミ穴的に機能させていたことを窺わせる。この下層中からは土師器・

須恵器に混ざり、緑釉の破片も２点出土している。一方、上層はこの井戸の掘り方を埋め戻すために、人為的に入れられた土層といえる。

ＳＫ－１（第３・５図）　１区中央部から検出された。径は0.65×0.60mで楕円形を呈し、深さは0.37mを測る。その内部は２段になっており、覆土は２層に区分された。

ＳＤ－１（第３図）　１区のＳＫ－１の北西側にある。長さ（1.12）m、幅は0.15～0.30m、深さは0.05m前後を測る。形態的にはくの字形を呈し、東端は別のピットによって切られていた。

ＳＤ－２（第３・５図）　１区のＳＥ－１の北東側から西側へ逆くの字形に延びている。北東側は調査区外へ、西側は地山が削平されているため途切れている。長さは（4.70）m、幅は一定せず最大（0.70）m、最小0.36m、深さは0.06～0.11mを測る。溝内にはピットが３個存在するが、これは溝が埋まった後に上から掘り込まれたものである。

第３節　２区の遺構

ＳＥ－２（第３・６図）　２区東側で検出された。掘り方の上端径が1.60×1.40mの楕円形を呈しており、深さは、1.53m〔Ｌ＝2.52m〕を測る。底部は暗灰色粘土層中に達している。この遺構の土層は実測直前に崩壊したため明らかでない。ただ、壁面精査時の記憶から底部側には灰色ないし暗青灰色粘質土があり、中位には腐植物を多量に含んだ暗灰色粘質土が、その上部から検出面には砂利を多量に含んだ黄褐色粘質土（地山Ｉか）が入っていた。検出時には砂利を含むことから後世の攪乱とも考えて半截して掘り下げた結果、井戸跡であることが判明した。この井戸は覆土の堆積状況から判断すると、最終的には人為的に埋め戻したのであろう。井戸が埋ってから後に、その覆土の一部を切ってＳＫ－２が作られていた。

ＳＫ－２（第３・６図）　ＳＥ－２の北側の一部を切って作られていた。径0.96×0.70mと楕円形を呈する。深さは0.20mを測り、内部は２段になり中央部が楕円形に深くなっていた。

ＳＫ－３・４（第３・６図）　これは中央部西側にあり、３はＳＫ－４とＳＤ－４を切って作られている。ただ、３も南側を別のピットに切られている。径は（0.83）×0.68mの楕円長方形を呈し、深さは0.12～0.20mを測り、内部は２段になっている。

４は径（1.35）×1.13mで楕円形を呈し、深さは0.11～0.15mを測る。これも内部が２段になり、北東から北側に平坦面が形成されていた。覆土は単純で灰褐色系を呈していた。これも埋まった後に別のピットやＳＤ－４に切られていた。

ＳＫ－５（第３・６図）　２区の北東端にあり、ＳＤ－７を切って作られていた。径は0.66×0.54mで楕円形を呈し、深さは0.74mを測る。形態的には円筒形の土壙となっている。覆土は１層でその中位に打ち欠かれた礫が数個入っていた。

ＳＫ－６・７（第３・６図）　２区北西端にあり、位置がややずれながら重複して存在していた。何れも掘立柱建物の柱穴掘り方で、６が新しくて７が古い。６の径は推定ながら（0.78）×0.75mで隅円方形を呈し、深さは現存値で0.15mを測る。中央部に径約0.20mの柱根跡が残っている。７も推定で径0.90m×0.78mで隅円方形を呈し、深さは0.28mを測る。これも中央部に径約0.12

mの柱根跡が残っている。いずれも柱根跡が掘り方よりも深くなっている。

ＳＫ－８（第７図）　２区中央部西側にあった。径1.00×0.98mで隅円方形を呈する。深さは1.13m〔Ｌ＝2.90m〕を測り、底部は灰色粘土層上面にまで達している。この遺構も検出時点では、覆土中に砂利を含むことから後世の攪乱かと推定し、半截して掘り下げたところ、遺構であることが判明した。覆土は①～⑦層に区分され、⑤層中から軒平瓦の破片が出土した。この遺構は土壙として扱ったが、覆土の特徴や遺構の形状から井戸跡である可能性も考えられる。

ＳＫ－９（第７図）　ＳＫ－４と６・７の中間から検出されたもので、ＳＤ－４を切って作られている。埋まった後に南東側を別のピットに切られている。径は(1.23)×1.08mで楕円形を呈し、深さは0.90m〔Ｌ＝3.25m〕を測る。覆土は②～⑨層に区分されたが、④～⑨層の土層が水平に堆積していることから見ると、掘立柱建物の柱穴掘り方の可能性が高い。穴の上部に堆積している①・②層は柱根の抜き取り時の攪乱で堆積した土層であろう。その際壁面の上部を削り込んでいる。

ＳＤ－３（第３図）　ＳＫ－６・７の東側からＳＫ－９の北側にかけて蛇行して延びている。両端は途切れていたが長さは(1.75)m、幅は一定せず0.08～0.18mを測る。この溝のＳＫ－６・７の南西隅側の覆土中からは、緑釉の水注の把手部分の細片が出土している。

ＳＤ－４（第３図）　２区西端にあり、南側から北側に延びている。両端は遺構の切り合や地山が削平されているため途切れている。長さは(3.80)mを測り、幅は0.25m前後、深さは0.07m前後となっている。

ＳＤ－５・６（第３図）　ＳＤ－４から東側へ約1.80m離れて平行に南北方向に延びている。間にＳＸ－２やピット等があるため途切れているが、本来は一条の溝であろう。５の北側は調査区外に延び、６の南側は地山が削平されているため途切れている。長さは５・６を合わせると(7.80)m、その幅は0.25～0.35m、深さは0.04～0.08mを測る。

ＳＤ－７（第３図）　ＳＤ－５・６から東側へ約2.60m離れて併行し、南北に延びている。北側は調査区外へ延び、南側は地山が削平されているため途切れている。また、この溝を切ってＳＫ－５が作られている。長さは(3.20)m、幅は0.38m、深さは0.07m程度を測る。

ＳＤ－８（第３図）２区の南側にある。両端をピットに切られているため、僅かに長さ(0.80)mしか確認できなかった。幅は約0.30mで、深さは0.07m程度を測る。

ＳＸ－１（第３・７図）　２区北側で検出され、北側は調査区外に延びている。形態的には不整長方形の形態を呈し、長さは(1.90)×0.76mを測る。深さは約0.09mと浅いが、南端は約0.34mと深くなっている。また、北側のピットには表面をノミ状具で削った長方形の石材と土師器の長甕がいっしょに入っていた。

ＳＸ－２（第３・７図）　２は１の南側にある。埋まった後ピットに切られているが、菱形の形態を呈している。長さは(1.64)×1.34mを測り、その内部は平坦ではなく凹凸がある。覆土の②層上から土師器の鉢の破片が出土した。また、この②層の北側には①層の濁黄褐色粘質土が、遺構内から遺構外の北側にかけて広がっていた。

第4節　3号トレンチの遺構

ＳＥ－3（第4・8図）　これは3号トレンチの北側から検出された。掘り方の上端径は1.24×1.17mで楕円形を呈し、深さは1.45m〔Ｌ＝2.01m〕を測る。底部は淡灰色粘質土層中まで掘り込まれている。覆土は①～⑥層に区分され、覆土の中位あたりから「木」と記された墨書土器（須恵器）が出土している。この断面形態から井側材が存在していたかどうかは明らかではないが、素掘りのものである可能性もある。

ＳＥ－4（第4・8図）　3号トレンチの中央南側から検出された。掘り方の東側は調査区外へ延びており、その全形は明らかではない。上端の径は(0.87)×1.14mで隅円長方形を呈するものと推定される。深さは0.75m〔Ｌ＝2.58m〕を測る。底部は黒色粘質土層中まで掘り込まれている。覆土は2層確認されたのみで、他の井戸跡と比べると単純である。これも内部に井側材が存在していたかどうかは明らかではない。

ＳＤ－11（第4図）　トレンチの北側にあり、東西に延びている。長さは（1.9)m、その幅0.24～0.40m、深さは0.05～0.10mを測る。東側に行くにしたがい、浅くなっている。

ＳＤ－12（第4図）　ＳＤ－11の西端から南に0.50m離れた地点から始まり、トレンチに沿って長さ9.65m延びる。さらにその南端近くから直角に東側へ延びている。幅は0.35～0.40m、深さは0.07～0.08m程度である。

ＳＤ－13（第4図）　トレンチのやや南側から検出され、南東から北西方向に延びている。幅は1.40～1.70m、深さは0.40mを測る。

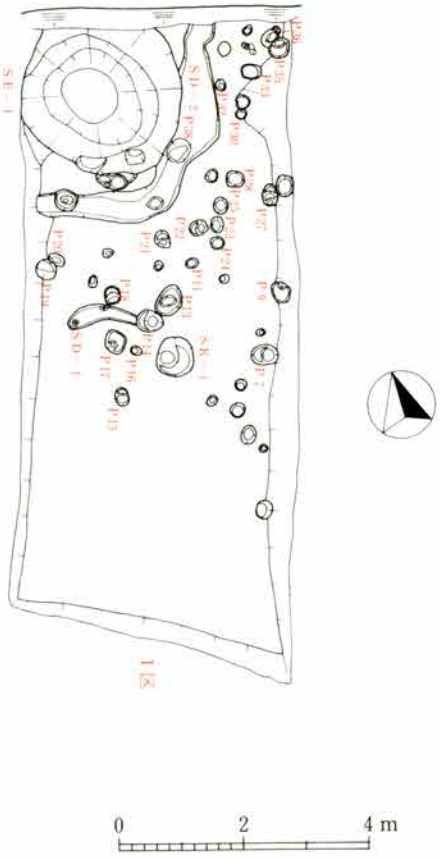
第5節　4号トレンチの遺構

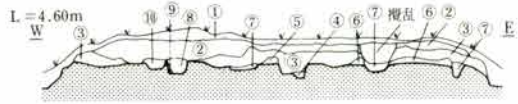
ＳＫ－10（第4・8図）　トレンチの中央西寄りの地点から検出された。この土壙が埋まった後、その北側には浅いＰ－160（これは溝の可能性がある）が掘り込まれており、そこには重複関係がある。径は1.24×1.28mで南側がやや突出して不整方形を呈しており、深さは0.63mとやや深かった。その土層は⑧層あり、その内部へ流れ込んだような状態で堆積していた。

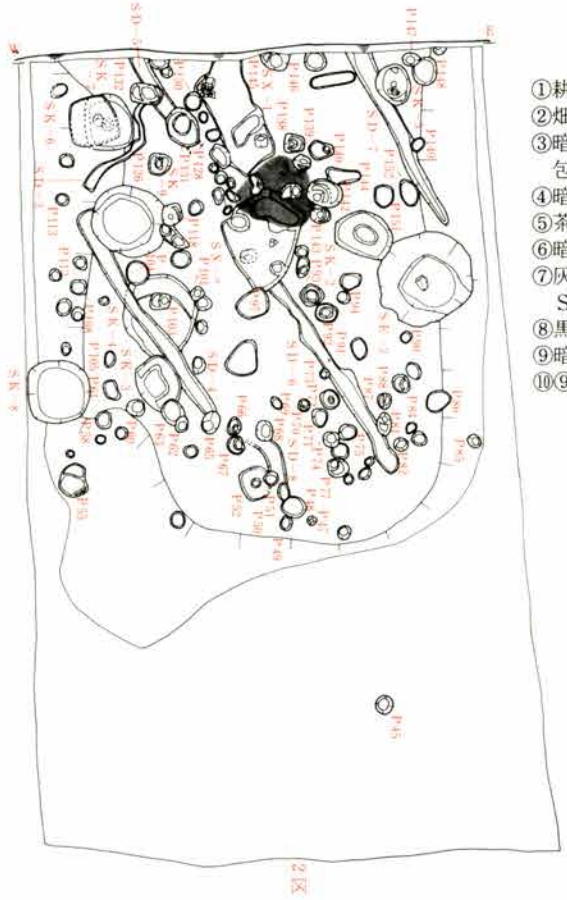
ＳＫ－11（第4・8図）　トレンチの中央東寄りの地点から検出された。径は0.72×0.53mで隅円長方形を呈し、深さは0.44mを測る。

ＳＤ－9（第4・9図）　トレンチの西端近くから検出され、北東側の調査区を一部拡張し長さ約4.60mまで確認した。幅は0.70～1.00m、深さは0.30m前後を測り、その内部は2段になっている。覆土中からは多量の遺物が検出され、赤彩した黒色土器を含む土師器と「生」、「万富」と記された墨書土器を含む多量の須恵器が出土している。

ＳＤ－10（第　図）　これはＳＤ－9の東側から検出された。幅は0.85～1.00mと広く、深さは0.13～0.17mを測る。溝の底面は全体に平坦になっている。



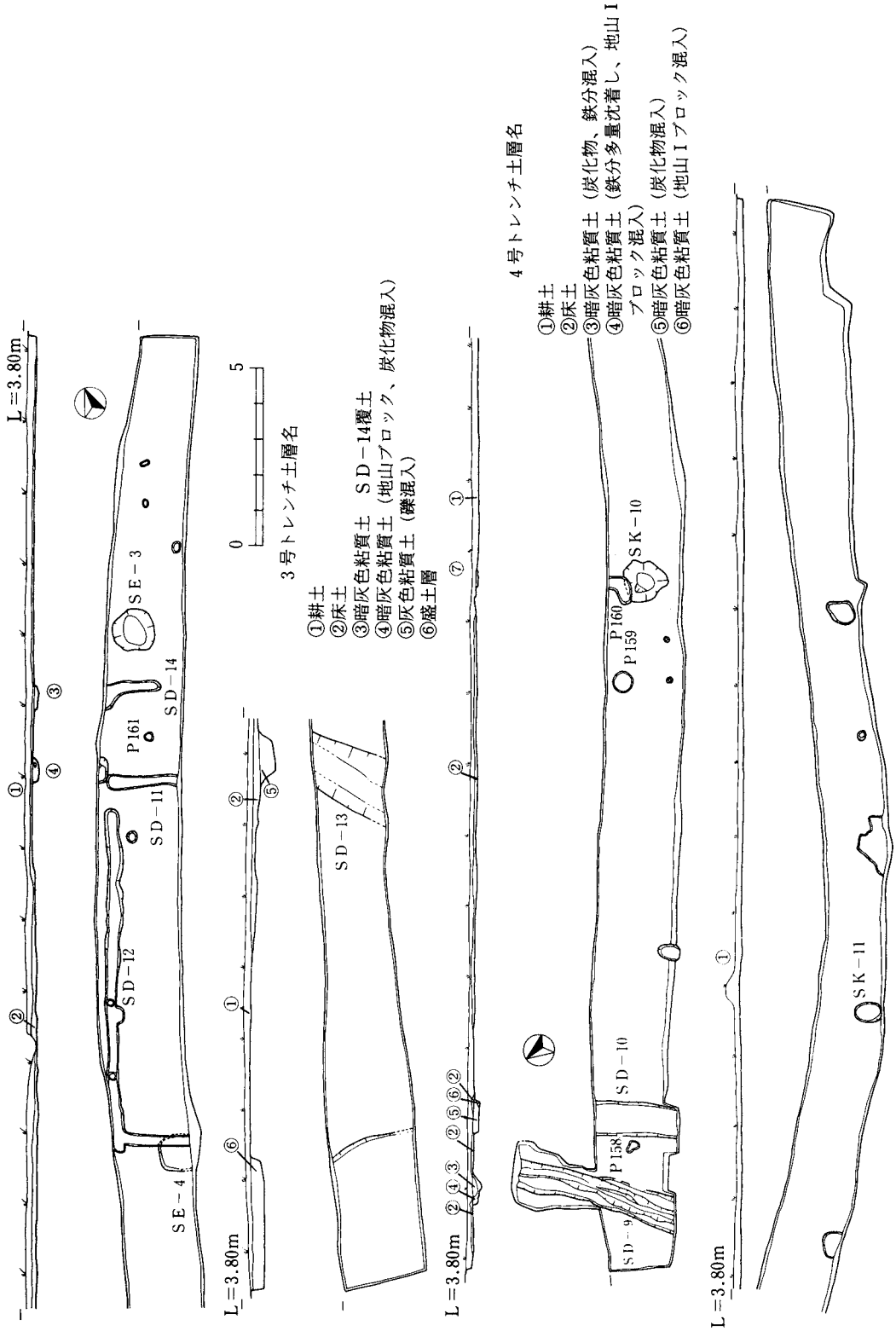




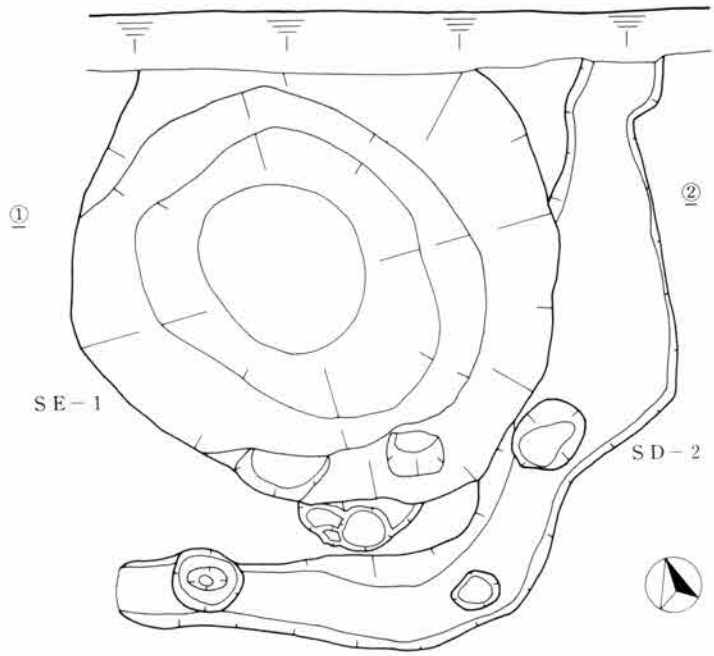
2区北壁土層名

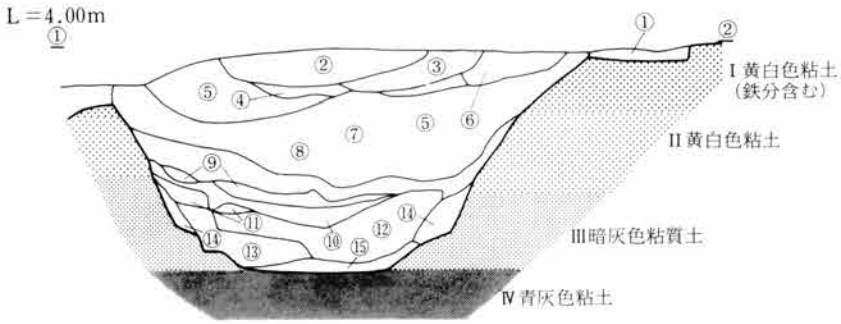
①耕土
②畑地客土
③暗茶褐色粘質土(地山ブロック、炭化物混入)
　包含層
④暗茶灰粘質土
⑤茶褐色粘質土（炭化物混入）
⑥暗褐色粘質土（灰褐色土ブロック混入）
⑦灰褐色粘質土（炭化物少量混入）
　ＳＸ－１覆土
⑧黒褐色粘質土（炭化物混入）
⑨暗褐色粘質土（炭化物混入）
⑩⑨層と同じ　ＳＤ－５覆土

第３図　１区・２区遺構配置図（Ｓ＝1/120）



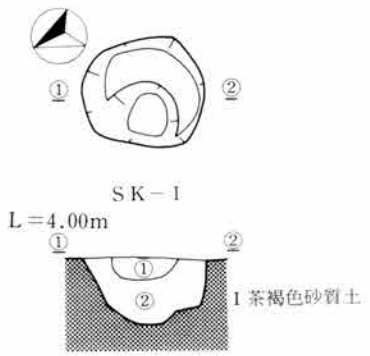
第4図　3号トレンチ・4号トレンチ遺構配置図（S＝1/180）





1区SE－1土層名

①茶褐色土（灰色土ブロック、炭化物混入）SD－2覆土
②①層と同じ
③濁黄褐色粘質土〔地山掘削土〕
④明茶褐色粘質土（黄褐色土ブロック混入）
⑤茶褐色粘質土（地山ブロック、炭化物混入）
⑥淡灰褐色砂質土
⑦暗茶褐色粘質土（地山ブロック混入、炭化物多量混入）
⑧淡褐灰色粘質土（炭化物極めて多量混入）
⑨淡褐灰色粘質土（炭化物微量混入）
⑩炭化物層
⑪淡黄褐色粘質土〔地山Ⅰ崩壊土〕
⑫暗灰色強粘質土（腐植物混入）
⑬暗灰色粘質土（地山Ⅰブロック混入）
⑭暗褐色粘質土（⑬層のブロック混入）
⑮灰褐色強粘質土

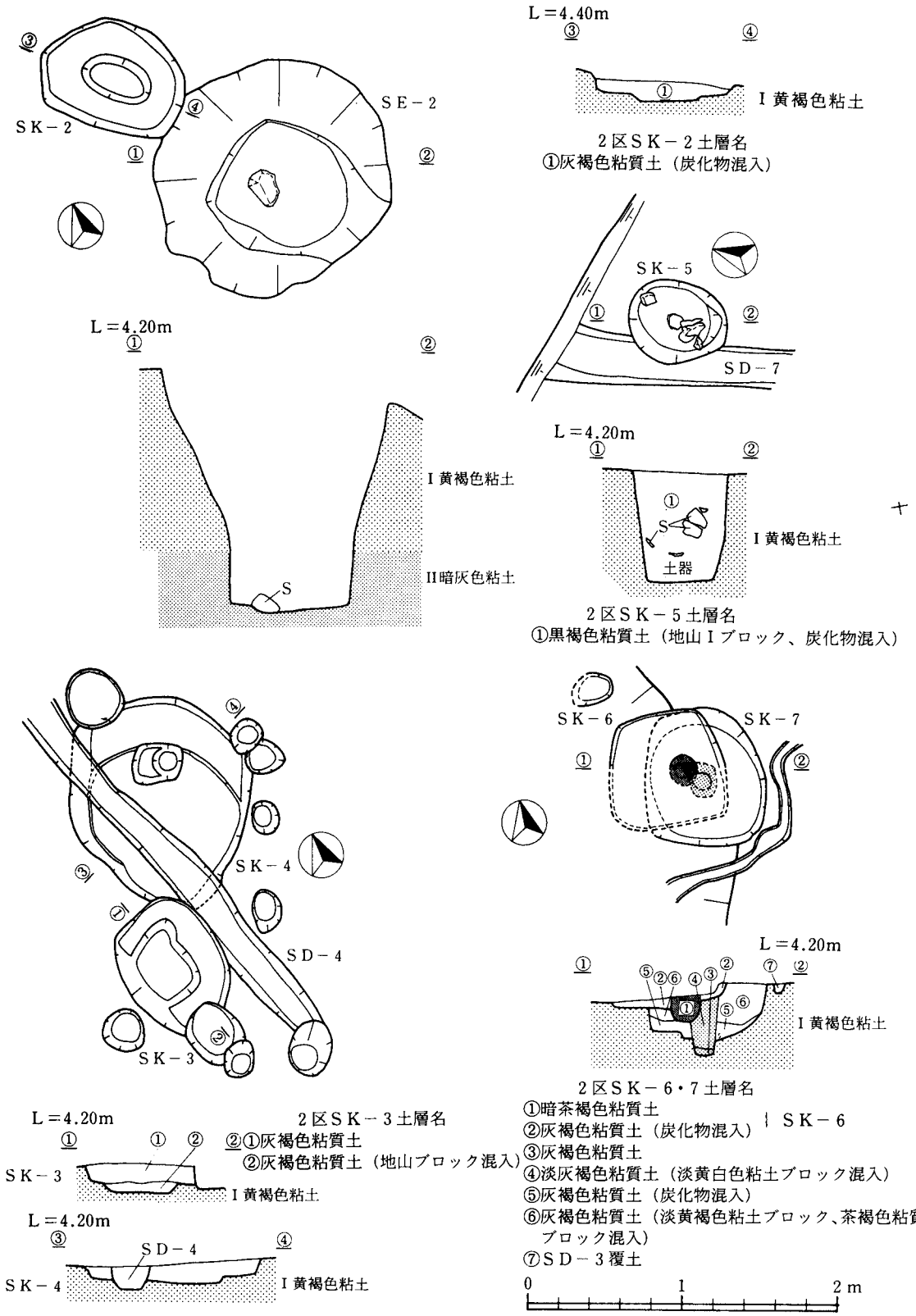


1区SK－1土層名

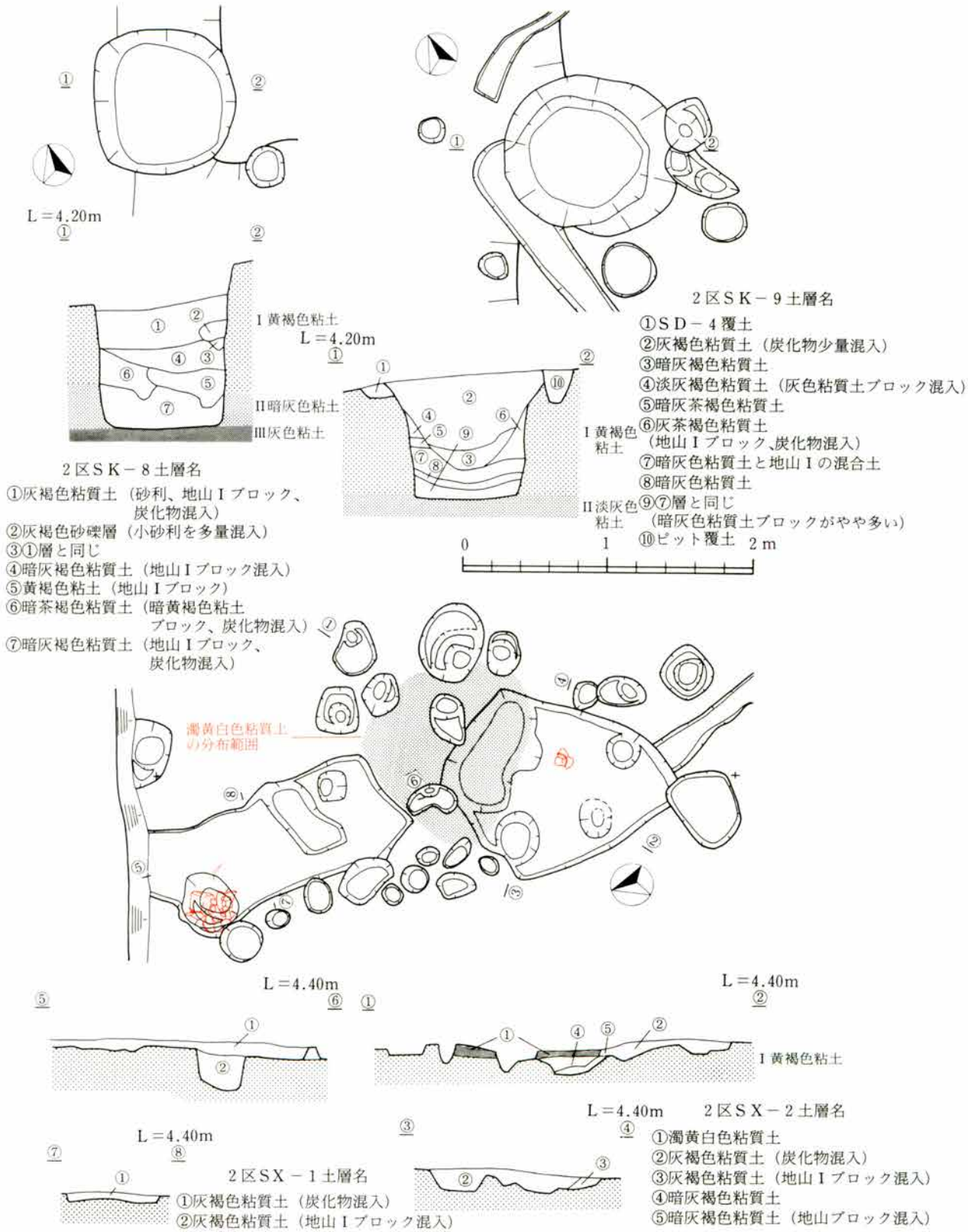
①暗灰褐色土（炭化物混入）
②暗灰褐色ん粘質土（黒灰色粘質土ブロック、炭化物混入）

0　1　2 m

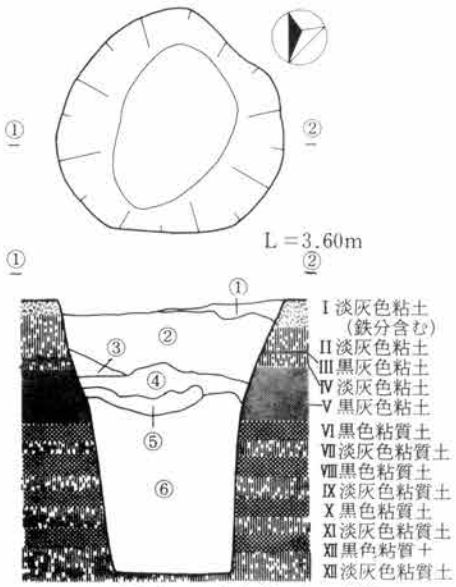
第5図　1区遺構実測図①（S＝1/40）



第6図　2区遺構実測図②（S＝1/40）

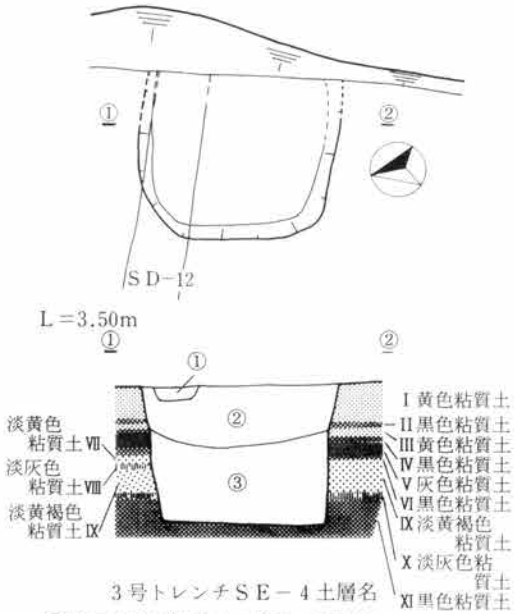


第7図　2区遺構実測図③（S＝1/40）



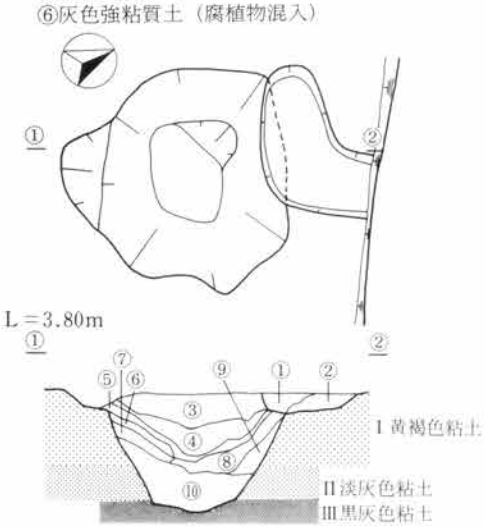
3号トレンチＳＥ－３土層名

①淡灰色粘質土と地山Ⅰ（多量）の混合土
②淡灰色粘質土
③淡灰色粘質土と地山Ⅰ（少量）の混合土
④暗灰色粘質土
⑤黒灰色粘質土
⑥灰色強粘質土（腐植物混入）



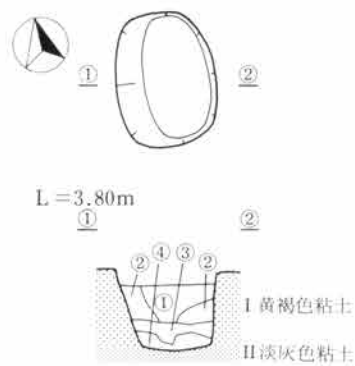
3号トレンチＳＥ－４土層名

①暗灰黄褐色粘質土　ＳＤ－12覆土
②暗灰茶色粘質土（砂礫混入）
③暗灰色粘質土（鉄分の沈着多し）



4号トレンチＳＫ－10土層名

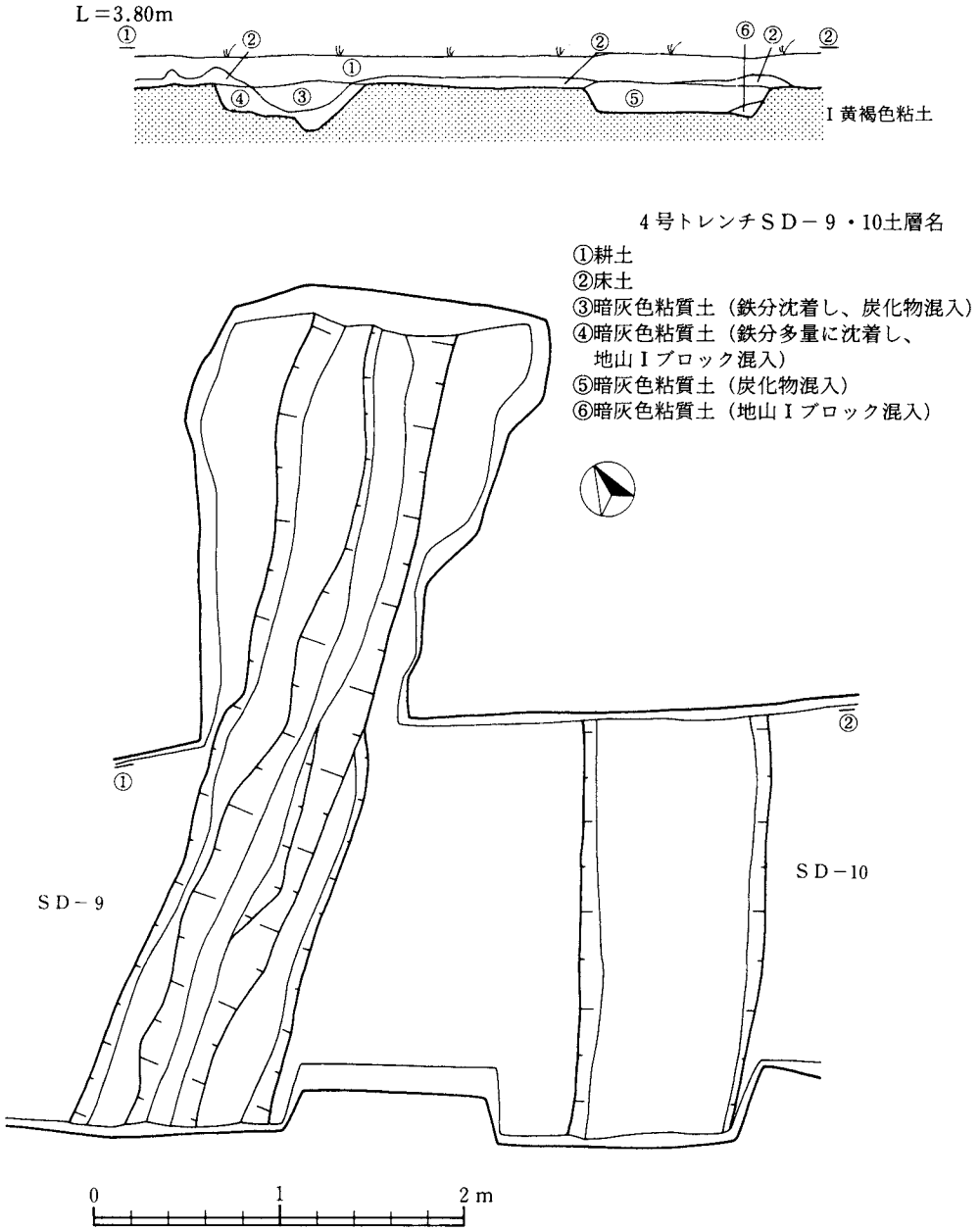
①淡灰色粘質土
②淡灰色粘質土と地山Ⅰの混合土
③暗灰褐色砂質土（炭化物多量に混入）
④暗灰色砂質土
⑤暗灰褐色砂質土（③層より茶色味が薄い）
⑥灰色シルト層
⑦灰色シルトと地山Ⅰ（多量）の混合土
⑧暗灰褐色砂質土（⑤層より茶色味強く、③層より灰色味強い）
⑨暗灰色粘質土
⑩黒灰色粘質土（炭化物多量混入）



4号トレンチＳＫ－11土層名

①灰茶褐色粘質土（炭化物混入）
②灰茶褐色粘質土（地山Ⅰブロック混入）
③暗茶褐色粘質土
④灰白色粘土（地山Ⅰブロック多量混入）

第８図　３号・４号トレンチ遺構実測図④



第９図　４号トレンチ遺構実測図⑤（Ｓ＝1/40）

第４章　出土遺物

第１節　出土遺物の概要

今回の調査で検出された遺物は、弥生時代から中世にかけてのものが出土している。その出土状況は遺構内よりも包含層からのものが多かった。時期的には９世紀から10世紀にかけてと12世紀頃のものがこれに次いで多く、これが本遺跡の主体となっている。以下、本書ではその出土遺物を古い順にＩ期からＶ期に分けて説明して行きたい。なお、ここで各時期に該当する遺構名もあわせて記述しておいた。

Ｉ期　弥生時代後期。この時期の遺構は無く、遺物が僅かに出土しているのみ。

II期　７世紀～８世紀。遺構ではＳＸ－１のみと少なく、遺物も少量のものが確認されているだけである。

III期　９世紀～10世紀。本遺跡のピークを示す時期にあたり、遺構ではＳＥ－３、ＳＫ－１、ＳＫ－３、ＳＤ－９、Ｐ－68などと明確なものの数は少ない。他にはＳＥ－２、ＳＫ－４、ＳＫ－６・７、ＳＫ－11、Ｐ－104、Ｐ－132等が該当する可能性があろう。遺物は調査区全域の遺構と包含層からも出土していることになる。なかでも４号トレンチのＳＤ－９からは赤彩した黒色土器や墨書土器を含む多量の土師器と須恵器が出土している。

IV期　12世紀。前段階に次いで遺構・遺物が多く確認された時期にあたる。遺構ではＳＫ－５、ＳＫ－８、ＳＫ－９、ＳＫ－10、ＳＤ－５、ＳＤ－10、ＳＸ－２、Ｐ－36、Ｐ－118、Ｐ－143、Ｐ－159、Ｐ－160、Ｐ－161等が該当しよう。この時期の土器も調査区全域から出土しているが、土器量はIII期と比較すると少ない。特に全形の判明するものは少なくなってきている。

Ｖ期　13世紀～15世紀。確認された遺構は少なくなり、僅かにＳＥ－１、ＳＫ－２、ＳＤ－11のみとなる。遺物も同様な傾向を示しており、この時期に限られる遺物が出土している遺構は確認しておらず、他の時期の遺物と混ざった状態で出土している。本遺跡の中では最後の段階にあたる。

本遺跡の出土遺物は以上のように大きく区分される。それではＩ期から順次説明を加えて行きたい。

第２節　Ⅰ期（弥生時代）の遺物

この時期のものは僅かに２点存在するだけである。151は４号トレンチのＳＤ－９内から出土している。口径は推定で26.8cmを測る壺形土器の口縁部で、口縁には２条の凹線を巡らしている。胎土には砂粒を含み、外面は淡黄褐色、内面は淡黄灰褐色をそれぞれ呈している。焼成はややあまい。160は底部で底径5.8cmを測る。胎土には砂粒を多量に含み、焼成はややあまい。全体に暗灰褐色から淡黄褐色を呈している。これらは弥生時代後期のものであろう。

第３節　Ⅱ期（７世紀～８世紀）の遺物

この時期の中で７世紀頃のものとしては、須恵器の坏蓋が数点出土しているだけで少ない。

ＳＫ－６・７からの42がある。口径は推定で14.2cmを測り、坏蓋は天井部外面を回転ヘラケズリしている。胎土には砂粒を含み、淡白灰色を呈している。同じく口縁部内面にかえりをもつものには、包含層からの172がある。推定口径13.7cmを測り、天井部を回転ヘラケズリしている。これと42を比べると天井部は水平になり、器厚も厚い点に違いがある。焼成は良好で堅く、灰色を呈している。この口縁部にかえりの持たないものに包含層からの173がある。推定口径15.7cmを測り、天井部の半分を回転ヘラケズリしている。口縁内面端を強くヨコナデし、端部を下方へ折り曲げている。灰色から淡灰色を呈している。

８世紀頃のものでは、土師器と須恵器が存在している。土師器ではＳＸ－１から50の長甕が存在する。口径24.9cm、器高は推定ながら29.3cmを測る。口縁部はくの字に外反し、端部をまっすぐに持ち上げて縁帯を作りだしている。胴部はやや磨耗ぎみであるが、頸部から胴上部の内外面にはカキメ調整を施している。以下外面は斜位の平行叩きを、内面は同心円叩きを加えている。この内外面にはヘラケズリ痕は認められない。胎土中には粗砂粒が目立ち、色調は胴下部が濁白褐色で、他は淡白褐色を呈している。このＳＸ－１からは他に須恵器の甕胴部の51と緑釉椀の破片が出土しているが、これらは混入したものであろう。

甑では61がある。底径15.2cmを測り底部内面端をやや強くヨコナデし、端面をしっかりと面取りしている。内外面共にカキメ調整をしてから、外面には平行叩きを、内面には同心円叩きをそれぞれ施している。胎土は砂粒を含むが良好で、外面は暗茶褐色、内面は淡灰褐色をそれぞれ呈している。外面にはススが付着している。

須恵器では有台と無台の坏が存在している。有台坏では177がある。その高台は幅が広く、高台径は8.4cmを測る。内外面伴にヨコナデ調整をし、底部側から丸みを持って立ち上がる。色調は外面が灰褐色、内面が淡灰褐色をそれぞれ呈している。また、底面にヘラ記号の一部が残っている。

無台の坏では180がある。口径12.8cm、器高3.2cm、底径8.5cmを測るものである。内外面はヨコナデ調整をし、口縁端部が僅かに外反している。内面や底面は使用により滑らかになっている。底面には回転ヘラ起こし痕があり、その上にヘラ記号を引いている。

第４節　III期（９世紀～10世紀）の遺物

ＳＫ－１からは土師器の椀・皿が出土している。19は椀で口径14.6cm、高台径7.6cm、器高は4.1cmを測る。これは口縁がやや内湾ぎみに開いている。色調は口縁が褐色を呈するが、高台部は白褐色と異なっている。焼成も良好で、内部にはスス状の付着物が残っている。21は黒色土器の底部で、外面は赤彩されている。色調は淡白褐色を呈しており、焼成はあまい。20は有台の皿で、口径12.7cm、高台径6.1cm、器高3.3cmを測る。口縁が直線的に延びるもので、端部が僅かに反っている。底部にも僅かに糸切り痕を残しており、これにふんばった高台を貼付している。焼成も良好で、褐色を呈している。この他には須恵器の甕の胴部片が存在している。

ＳＫ－２から須恵器が混在して出土している。26は坏で口径14.4cmを測る。底部は欠落しているが、内外をヨコナデ調整をしている。色調は灰色を呈しており、焼成も良好なものとなっている。27は有台坏で口径11.7cm、器高3.8cm、高台径9.3cmを測るものである。外傾する口縁端部が、直立ぎみに立ち上がっており、焼成も良好で灰色を呈している。28は甕の口縁部で、外面の端部が外方に延びている。体部外面は平行叩きしてから、カキメ調整を加えている。これも焼成は良好である。ただ、この遺構自体の時期はＶ期に該当するものである。

ＳＫ－３の30は土師器の無高台の坏で、推定口径13.1cm、器高3.4cm、底径7.4cmを測る。全体に遺存不良で磨耗しており、調整等は明らかではない。色調は淡白黄色を呈している。31は長甕の口縁部で、推定口径21.5cmを測る。これも焼成があまい。須恵器では32は坏蓋で、口径15.7cmを測る。坏では33と34がある。前者は口径13cm、器高3.1cm、底径6.8cmを測る。底部は回転ヘラ起こししている。後者は底径6.3cmを測る。35は盤で口径16.4cm、器高1.8cm、底径11.6cmを測る。また、この他に図示していないが黒色土器で外面を赤彩した土師器の椀が１個体出土している。

ＳＥ－３からは須恵器が出土している。62は口径12.3cm、器高2.5cm、底径8.9cmを測るもので、底部は回転ヘラ起こしをしており、全体にやや薄での作りのものとなっている。63は墨書土器で、底部に「木」と記されている。この土器は口縁を打ち欠かいて底部を丸く残しているようであり、円盤状陶製品をまねた可能性もある。64は盤で口径15.1cm、器高２cm、底径11.7cmを測る。口縁の内外面はヨコナデ調整をしている。また、他に墨書痕を残すものが１点存在するが、その判読は不能である。この遺構からは他に甕の体部片65、66も出土している。

ＳＤ－９からは多量の遺物が出土している。土師器では椀、皿、小甕、長甕、鉢等が存在し、その主体は椀である。その椀も無台の椀と有台椀に大きく区分される。さらに内面を黒色処理するものとしないものに分けられる。黒色処理するものは外面を赤彩するものとしないものにも分けられる。ただ、椀は全体に外面が薄く剝離したり磨耗したりしているために、黒色処理されない97と103以外は、外面が赤彩されていたことも考えられる。

無台のものでは97は底径4.9cmを測り、底部には糸切り痕をとどめている。淡白褐色を呈して焼成はあまい。無台で黒色処理するものには98と99がある。98は底部5.5cmを測るもので、底部はヘラケズリしている。これも外面は磨耗しているが、胎土は精選され良好なものである。底部から

体部にかけても一部黒色を呈している。99は底径5cmを測り、底部はヘラケズリしている。これも胎土は良好で、底部の一部が黒色を呈している。内面には放射状にヘラミガキを加えている。無台椀で黒色処理して外面を赤彩するものには100～102がある。そのうち器形の判明しているのが101と102である。それは口縁が内湾ぎみに開くもので、端部が少し外反するタイプの器形を呈している。101は口径13.8cm、底径6.5cm、器高3.7cmを測るもので、102よりも器壁がやや厚くなっている。その器面の調整を見ると口縁外面は下端側から半分以上までの範囲と底部をヘラケズリ調整している。102は口径13.2cm、底径6.9cm、器高3.8cmを測るもので、器壁が総じて薄く、底部ではそれが顕著といえる。底部や外面は薄く剝離したり磨耗しているため、その調整は明らかではない。有台椀で黒色処理しないものには103が存在する。高台径5.7cmで、底部をヘラケズリしてから低くふんばった高台を貼付している。色調は茶灰色を呈しており、他のものと異なっている。また、高台部分は2次的加熱を受けたためか、その色調が赤桃色に変化している。有台椀で黒色処理しているものには105、106、108が存在している。それぞれ底部片であるために、その全形は不明である。高台径は105が7.9cm、106が7.2cm、108が7.4cmを測る。これらの高台の形態を見ると、105と106のものは一般的に認められるが、108は断面三角形を呈しているところに特徴がある。有台椀で黒色処理して外面を赤彩するものに107、110～112が存在している。107は口縁部を欠落しているが、底径が8.1cmを測り大型タイプの椀になるものと推定される。この高台も断面三角形を呈しており、それを体部下端に貼付している。底部はナデ調整している。112も底部のみの破片であるが、この高台も同様な形態を呈している。高台径は6.5cmを測り、その高台の約半分の範囲には黒いスス状の付着物が残っている。110は器形の判明するもので口径14cm、底径7.4cm、器高5.1cmをそれぞれ測る。口縁部は内湾ぎみに延びるが、途中で僅かに器壁が内側に入っている。この高台も同様の形態を呈しているが、底部にはナデ調整をしているようである。外面はヨコナデ調整をしているが、その下端にはヘラケズリを加えている。111は口径は約14.7cm、底径7cmを測る。器高は110よりも高い。口縁部は直線的に開くが、その中央部あたりで少し内側へ入っている。これも口縁部外面はヨコナデ調整しているが、下端側はヘラケズリを加えている。底部には糸切り痕を残して高台を貼付しているが、その高台端部は外側へ曲がっている。小甕には113～115がある。113は口径13.9cmを測り、内外面を共にヨコナデ調整している。114、115はその底部片である。

長甕には116と117が存在している。116は推定口径32.9cm、117は33cmを測る。

鉢には118が存在している。推定口径26cmを測る。外傾して立ち上がり、口唇部を肥厚させて平坦面を形成している。その下部には2条の隆帯を巡らしている。胎土にはやや砂粒を含み、淡白褐色を呈している。焼成もややあまい。

須恵器では坏蓋、無台坏、有台坏、盤、有台椀、有台皿、瓶壺類、短頸壺蓋、甕等が出土している。坏蓋は119～122のものが存在する。119だけが有鈕のものであるが、他のものも本来は有鈕であった可能性が高い。119は口径15.9cm、器高3.3cmを測る。120は口径16.4cmを測る。このいずれもが、その端部を巻き込みぎみに内屈させているのが特徴といえる。両者の胎土と焼成は良好なものとなっている。121は口径17.1cmを測り、天井部をヘラケズリしている。122は口径16cmを

測り、天井部は肥厚してナデ調整している。この両者は端部の下端を少し延ばしている。

短頸壺蓋には123がある。口径13cmを測るもので、胎土と焼成は良好である。有台坏には124～126のものが存在する。124は口径16.5cm、高台径9cm、器高6.1cmを測る。器面にはヨコナデ調整をし、胎土と焼成は良好といえる。125は高台径が8.8cmを測る。126は前者のものと比べると厚手の作りものとなっている。これも良好なものといえる。

無台坏には127～132のものが存在している。127は墨書土器で、薄手の作りとなっている。径12.9cm、底径8.2cm、器高3cmを測る。底部は回転ヘラ起こし後にナデ調整しており、「万富」と記されている。良好なものである。128は口径13.7cm、129は口径12.4cm、132は口径13.8cmをそれぞれ測る。色調は132の淡白灰色以外は、すべて灰色を呈している。130は口径13.3cmで、器高3cm、底径6.6cmを測る。底部には回転ヘラ起こし痕が残る。内面端部と一部外面にはスス状の付着物が残っている。131は口径13.4cm、底径8cm、器高3cmを測る。これも底部には回転ヘラ起こし痕が残っている。さらにこの底部には墨書が記されているが「彳 」のみしか判読することができない。内面端部にはスス状の付着物が残り、その外面側端部にも僅かに付着している。色調はこれも淡白灰色を呈している。

有台皿には104がある。高台径は6.6cmを測り、底部には糸切り痕を残している。内面はあばた状に剝離している。色調は淡白灰色を呈している。

盤では133～138のものが存在している。底部にはいずれも回転ヘラ起こし痕が残る。胎土は133、135、136は良好なものであるが、他は砂粒を多量に含んでいる。口径も14～16cmのもので、14cm台のものが多い。器高では1.7cmから2.3cmまでのものがあり、2cm程度のものが多い。133は墨書土器で、口径16.1cm、器高2.2cmを測る。底部には「生」と記されている。134もその底部には太い墨痕が残っているが、それを判読することは不能である。有台椀には139と140がある。前者は土師器椀の形態と類似し、高台径は5.7cmを測る。体部下端には強いヨコナデ調整を加えており、高台はやや幅広で短いものが貼付されている。さらにこの高台と体部は色調が異なっている。胎土は良好である。後者は底径5cmを測るもので、底部は蛇ノ目高台を呈しており、高台内にはヘラ記号が僅かに残っている。

瓶壺類では肩衝壺と推定されるものに141が存在する。内外面をヨコナデ調整し、全体的に器壁が薄くなっている。底部から肩部までの長さが短く、底部には高台が存在しない点に特徴がある。胎土と焼成は良好で、色調は灰色を呈している。双耳瓶には144、145、148が存在する。144は肩部と胴上部にそれぞれ2条の沈線を巡らしている。把手はヘラ状具で丁寧に調整して、中央部に孔が開いている。145は体部片で上下に2条づつの沈線を巡らしている。148は頸部片である。長頸瓶には146と147が存在している。146は体部片で、高台が欠落している。147は頸部から体部にかけてのもので、器形はやや小さいが胎土と焼成は良好といえる。

甕には142、143、149、150が存在する。142は口径25.6cmを測る。口唇部を少し肥厚させており、外面には2条の沈線を巡らしている。143は推定口径が19.8cmを測るもので、2段に外傾させている。口縁は肥厚させて凹線状の沈線を巡らしている。149は外面に平行叩きを、内面の同心円叩きの上をナデ調整して、その叩きを消している。淡白黄色を呈している。150は外面には平行叩

きを、内面には弧線状の叩きを加えている。

ＳＥ－２から須恵器の有台椀24と甕の口縁部25が出土している。前者は高台径７cmを測るもので、内外面をナデ調整している。後者は推定口径30.2cmを測る。口縁部を肥厚させて多面体状にしている。

ＳＫ－４の須恵器の有台椀36は高台径5.8cmを測り、体部下端には弱いながらもヘラケズリを加えている。焼成は良好である。

ＳＫ－６・７には土師器の有台椀が存在する。39は高台径6.1cmを測るものである。底部は丁寧にナデ調整を加えている。焼成は良好で、淡褐色を呈している。41は黒色土器で高台径7.3cmを測る。底部には糸切り痕を残している。40も黒色土器で推定口径９cmを測るが、これは時期が遡る可能性がある。

ＳＫ－11からは長頸瓶の体部と推定される94と95の頸部、さらに甕の胴部も２点存在する。

Ｐ－68からは推定口径約34.8cmを測る土師器の鍋58が出土している。

Ｐ－132からは高台径6.8cmを測る有台椀55と口径10cmの小甕56が出土している。

この遺構以外の包含層から出土土器もある。土師器の椀（無台・有台）や皿類には、161～167が存在する。166は黒色土器で口径17.6cmを測りやや大型のものといえる。167は高台径６cmを測る黒色土器で、外面を赤彩している。なお、この土器は４号トレンチのＳＤ－９の北側を拡張して検出した折りに出土している。長甕には168、169がある。168は口径23cmを測るものである。鍋には170、171がある。170は口径34.8cmを測る。また、類例の少ないものとしては、243の椀がある。口径9.8cmを測り、色調は褐色を呈している。焼成も良好となっている。盤には181～188があり、口径が13～16cm台を測るものが多い。椀(有台、無台)、皿には189～192がある。瓶壺類には198～201が存在する。200の双耳瓶の耳の部分は下方まで下がっている。鉢の底部としては202～204のものがある。202は底部に刺突を加えている。204は底部が滑らかになっている。

甕胴部は外面が平行叩きのみであるが、内面は同心円叩き（太いものと細いもの）と平行叩きのものが多数を占め、それ以外のものは少ない。同心円叩きで圧痕が太く明瞭に残るものは208～212、216、217に認められる。さらにＳＥ－１上層の３、ＳＫ－10の80、ＳＤ－11の70なども含まれる。ただ、３は同心円叩きの上を軽くナデ調整している。この同心円叩きの不明瞭なものにはＳＫ－１の22やＳＤ－11の71に認められるが、これは叩き自体が弱いためのものである。214やＰ－104の59と60では叩きを加えた上に、強いヨコナデ調整を加えているために不明瞭なものとなっている。同心円叩きと平行叩きを併用しているものには、215とＳＫ－10の81が存在している。215では叩きを施す部位を別にしているが、81では同心円叩きの上に平行叩きを重複させている。同心円叩きでもそれの細いものが213とＳＸ－１の51の２点存在している。213では同心円叩きの上から平行叩きを加えている。平行叩きだけのものには218～220、222、223、226が存在し、他にはＳＤ－９の150にも認められる。しかし、226や150では平行よりもやや弧線状の平行叩きである。227では内面を不規則にナデ調整しており、色調も淡灰色で焼成もあまいなどの違いが認められる。225では内面を押圧するような感じでナデ調整している。ＳＤ－９の149は弧線状の平行叩きを加えて、その上を軽くナデているようである。221、224、229ではこれまでのものと異な

り、その押圧具は明らかではない。225は内面に自然釉が付着しており不明である。

灰釉では椀と瓶が出土している。261は椀の口縁部片で、端部に押圧を加えている。釉は外面に薄く内面にやや濃くかかっている。胎土は灰白色を呈する。262は高台径7.9cmを測り、内外面には釉がかかっていない。内面見込み部分は使用により、滑らかになっている。胎土は灰色を呈している。263は高体径6.8cmを測る。体部下端から底部と内面の見込み部分には施釉されていない。胎土は灰色を呈している。264は瓶の底部で、高い高台が付けられている。高台径5.5cmを測る。外面と内面には淡緑色の釉がかかっている。胎土は灰色を呈している。265は瓶の体部片で、外面はヘラ状具でナデ調整を、内面はヨコナデ調整をしている。色調は白灰色を呈している。

緑釉では遺構内と包含層からのものがある。遺構ではＳＥ－１の下層から椀と皿が出土している。17は椀で口径15cmを測るものである。それは須恵質で内外全面に濃い緑釉を施し、器面には光沢がある。18は推定口径14.8cmを測る皿で、これも須恵質で内外に施している。包含層からのものには266～268のものが存在し、須恵質のものである。266は椀で口径12cmを測り、濃い緑釉を施している。267も椀で口径13.8cmを測り、淡い緑釉を施している。268は底径5.8cmを測る皿で、全面に淡い緑釉を施している。ＳＤ－11の75も椀に近いものである。釉は薄い。

第５節　Ⅳ期（12世紀）の遺物

ＳＫ－５から土師器が出土している。37は椀の底部で底径6.8cmを測り、底部には糸切り痕が残っている。胎土は精選されたもので、それは砂粒を僅かに含むが赤色土粒のブロックをやや多量に含んでいる。色調は淡褐色から淡白灰褐色を呈し、焼成は少しあまい。38は底部が厚くて台形状を呈している。外面はヨコナデ調整をしている。内面中央部にはヨコナデ調整によってできた円形の凹がある。これも底部には糸切り痕が残っている。この胎土も同様なもので砂粒は少なく僅かで、赤色土粒を少量含んでいる。焼成は良好である。色調は淡褐色を呈している。

ＳＫ－８からは椀かと推定される44が出土している。口径13.7cmを測り、内外面はヨコナデ調整をしている。胎土には砂粒を少量含み、焼成は良好でからっとした感じのものになっている。この点が他のものと大きく異なっている。色調は淡褐色を呈している。

ＳＫ－９からは白磁椀Ⅳ類（横田・森田　1978年）に該当する口縁部の47が出土している。

ＳＫ－10からもややまとまって出土している。須恵器も出土しているが、これは混入したものである。土師器では小皿、椀と白磁椀が存在している。

小皿は大きく２タイプに区分することができる。それは底部の器壁の薄い82～85と、厚く平高台状を呈する86～89になる。前者の中で器形の判明する82と84を見ると、底部の中央はヨコナデ調整によって少し凹んで薄くなり、口縁部も先細りとなっている。82は口径9.2cm、底形4.4cm、器高2.2cmを測る。器面が薄く剝離している。胎土は精選されて微細な砂粒を含んでいる。焼成はあまく、色調は淡白褐色を呈している。底部には糸切り痕が残っている。83は底径4.2cmを測り、底部には糸切り痕が残っている。胎土は精選されて微細な砂粒を含んでいる。これも焼成はあまい。色調は淡白灰色を呈している。84は口径９cm、底径4.7cm、器高２cmを測る。器面が薄く剝離

しており、焼成はあまい。色調も淡白褐色を呈している。胎土は同様である。85は底径は5cmを測る。胎土は精選されて赤色土粒を僅かに含んでいる。これも焼成はあまく色調は淡褐色を呈する。次に底部が平高台状の器形をするものがある。86は底径は4cmを、底部の厚さは約2cmを測る。胎土は精選されており、赤色土粒を含んでいる。また、底部には底面から内面側へ延びる穴が開いている。その穴の状態からすると底部を作る際には、粘土紐を巻き上げているが、それをさらに横にねじっていることが推定される。これも焼成はあまく、色調は淡褐色を呈している。87も胎土、焼成、色調が86と同様なもので、底径4cm、底部の厚さが1.6cmを測る。これも底面側から内面側へ延びる穴が開いており、その状態から底部をねじっていることが推定される。また、この穴には底面側から奥にかけては、断面が曲線状を呈するヘラ状具で刺突を加えている。88も精選された胎土で、赤色土粒と微細な砂粒を含んでいる。焼成があまいために86～89と同様に器面が磨耗・剝離している。底径は3.8cm、底部の厚さ1.5cmを測り、色調は淡白褐色を呈している。89も同様で底径3.6cmを、底部の厚さは1.7cmを測る。胎土と色調は88と同様である。椀にも底部の厚さの厚い91と薄い90に分かれる。91はその遺存状況は悪いが、推定底径は5.8cmを測る。底部の断面をみるとこれにもすきまが存在している。胎土と焼成は、小皿の底部が平高台を呈するものと同様で、色調が淡白褐色を呈している。90は底径が6.4cmを測る。胎土は90と同様であるが、色調は灰褐色を呈している。黒色土器には92が存在する。推定高台径が7cmを測る。胎土と焼成は良好であるが、色調は淡白褐色を呈している。93は白磁碗Ⅳ類（横田・森田　1978年）の底部である。高台径は6.3cmを測る。

ＳＤ－５からは小皿が２点出土している。48は底径4.7cmを測る。微細な砂粒と赤色土粒を含み、色調は淡灰褐色を呈している。49は底径4.8cmを測る。これも胎土に微細な砂粒と赤色土粒を含むが、48よりは少ない。色調は淡茶褐色を呈している。

ＳＤ－10からは椀と白磁碗が出土している。155は底径6.3cmを測るもので、胎土は精選された土に赤色土粒を含む。器面が薄く剝離しており、焼成はややあまい。色調は淡明褐色を呈している。156は白磁碗４類の口縁部である。ただ、152がこれに伴うか明らかではないが、それは底径6.3cmを測る。胎土には微細な砂粒と赤色土粒を含んでいるが、この時期の土器の感じとは趣を異にしている。色調は褐色を呈している。

ＳＸ－２では小皿と鉢が出土している。53は底径4.3cmを測り、胎土には砂粒と赤色土粒を含んでいる。色調は褐色を呈している。52は口径21.5cm、底径7.8cm、器高9.9cmを測る。内外面はヨコナデ調整をしており、口唇部はやや丸みを持ちながらも平坦にしている。内面には漆が付着している。胎土には砂粒と赤色土粒を含む。外面は少し器面が剝離しているが、焼成は良好である。色調は淡灰褐色を呈している。

Ｐ－36は椀が出土している。23は底径6cmを測る。胎土には微細な砂粒と赤色土粒を含み、淡灰褐色を呈している。

Ｐ－118からは椀の54が出土している。口径13.8cmをはかる。胎土は精選され微細な砂粒と赤色土粒を含む。淡褐色を呈している。

Ｐ－143からは底部の台付部分の57が出土している。底径10cmを測る。外面はヨコナデ調整を

し、底部内面はヘラケズリしている。底面にはハケ状具で調整している。胎土は精選され、微細な砂粒と赤色土粒を含み、色調は褐色を呈している。

Ｐ－159からは小皿と椀が出土している。小皿の157は口径8.9cm、底径4.3cm、器高1.5cmを測る。この小皿は他のと比べると、体部下端で少し凹み口縁部が外傾しているところに特徴がある。精選された胎土に赤色土粒を含み、焼成はあまい。色調は淡褐色を呈している。157は椀で、底径6.2cmを測る。これも底部は粘土紐を巻き上げて成形していると推定されるが、底面側から中央部にかけて空洞になっている部分を残している。胎土は精選されて赤色土粒を含む。焼成はあまく、色調も淡灰褐色を呈している。

Ｐ－160では小皿が出土している。このピットはＳＫ－10を切って作られていた。159の底部は平高台状を呈しており、底径4.6cmを測る。これも底部中に空洞部が残っている。焼成は良好で堅く、胎土には微細な砂粒を含んでいる。また、底部には糸切り痕が施されていないところに違いがあり、色調は淡白褐色を呈している。

Ｐ－161からは椀の77が出土している。底径5.8cmを測る。胎土は精選されており、色調は淡灰褐色を呈している。

包含層からも土師器と白磁が出土している。土師器では小皿と椀が存在している。まず、小皿は底部の器壁の薄いものと厚く平高台状を呈するものに分けられる。前者には240～242のものがある。240は底径5.4cmを測る。241は底径４cmを測り、胎土は精選されて赤色土粒を含んでいる。色調は淡褐色を呈し、焼成はあまい。242は器形の判明するもので、口径は9.7cm底径は5.6cm、器高は2.3cmを測る。口縁部は体部下端で少しくびれてから外傾している。この土器の胎土も精選されており、僅かに微細な砂粒を含む程度となっている。色調は淡褐色を呈している。後者のものとしては230がある。底径3.8cmを測り、底部の厚さは1.3cmを測る。これは、胎土に微細な砂粒を含んでいる。

椀は底部だけであるが、６タイプに分かれる。それは231と235で、前者は底径4.8cmを、後者は5.8cmを測る。底径の上からはちがいが認められるが、胎土はいずれも同じものといえる。それは、精選されたもので微細な砂粒と赤色土粒を含んでいる。色調は淡褐色を呈している。焼成もあまい。232は底部から強く立ち上がるもので、底径は5.2cmを測る。胎土を見るとそれは精選された土であるが、淡褐色の土のなかに淡白褐色の土がまだら状に含まれている。このような特徴をしめすものはＳＫ－10からの86と87に認められている。232はその中に微細な砂粒と赤色土粒も含んでいる。233と234は外反ぎみに開くものと推定される。233は底径5.8cmを測る。胎土は精選されており、微細な砂粒と赤色土粒を含んでいる。焼成はあまい。234は底径5.5cmを測り、胎土も同様なものである。ただ、焼成が良好で堅いものになっている。色調は淡褐色を呈している。また、底部の糸切り痕の上には、細い棒状具の圧痕が残っている。236は底径6.2cmを測る。この土器は胎土と色調は他のものと同様であるが、その焼き上がりは堅くからっとしたものになっている。類似するものにはＳＫ－８の44がある。237は底径7.9cmを測る。胎土は精選されてこれにも赤色土粒を含んでいる。色調も淡褐色を呈している。椀でも底部が厚い平高台状のものもある。それは体部下端でくびれてから口縁が外傾するものである。238は底径6.2cmを測り、体部下端が

少し丸みをもっている。この土器の底部の断面を見ると、その中央部には斜めの空洞部を残していることが分かる。さらにその空洞部が内面まで延び、その内面の空洞の穴を埋めるために粘土紐を入れた可能性がある。この胎土も精選された土に微細な砂粒を含み、色調は淡褐色を呈している。239は底径6cmを測り、胎土は238と同じで、色調は褐色から淡褐色を呈している。

白磁では碗とⅣ類がある。碗では玉縁口縁をもつもので244～247のものが認められる。これらは白磁碗4類（横田・森田　1978年）に該当するものである。244～246の口径はそれぞれ15.4cm、14.2cm、14.2cmを測る。249はこれの底部で、内面には沈線が認められない。251は端反碗である。254は白磁碗Ⅷ類（横田・森田　1978年）で、口径13.9cmを測る。皿では250は口径11.4cmを測る端反皿である。248も細片ながら皿であろう。260は白磁皿Ⅵ類（横田・森田　1978年）で、内面に草花状の沈線文様を持っている。256は白磁皿のⅤ類ないしⅦ類（横田・森田　1978年）で、内面には沈線があり、底部は上げ底風になっている。釉は口縁下で止まっている。257も同一タイプのもので、底径は4.8cmを測る。胎土は良好で白っぽい感じになっている。

この他には遺構からも出土している。ＳＥ－１の上層からは碗の口縁部の８と底部の９が出土している。前者は口径７cmを測るものである。後者は高台径5.1cmを測る。ＳＤ－11からは皿の破片が出土している。73は256と257のタイプの皿の口縁部と推定される。

第６節　Ⅴ期（13世紀～15世紀）の遺物

この時期の遺構と遺物は、前段階と比べるとその数量が少なくなってきているのが特徴となっている。

ＳＥ－１では、その遺物を上層と下層に区分して取り上げた。その下層からは井戸の廃絶直後に入ったと推定される土器類が出土している。それは前段階の時期の土器と混在しているが、15の土師器と16の加賀焼が存在している。15は口径7.9cm、器高0.9cmを測る。口縁部はヨコナデ調整の後に、内底には静止のナデを加えている。口縁部の内面と外面にはタール状の付着物が残っている。胎土と焼成は良好で、色調は淡灰褐色を呈している。16は加賀焼の大甕で、その甕の肩部にあたる。上部側は頸部側からヘラ状のものでナデ調整をして、その屈曲部から下はハケ状具でナデ下ろしを加えている。内面には同様なハケ状具等で、ヨコナデ調整を施している。胎土と焼成は良好で、色調は灰色を呈している。またこの上層からは５の加賀焼の甕で、刻印を加えている。色調は淡灰色を呈している。６は珠洲焼の擂鉢で、おろし目を持っている。その内面は使用により滑らかになっている。胎土と焼成は良好で、色調は淡灰色から淡褐灰色を呈している。７も珠洲焼の擂鉢であるが、おろし目を認められない。これも良好なものである。

ＳＫ－２は須恵器の坏と甕が含まれているが、遺構の時期はこの段階のものである。29は珠洲焼の坏鉢の底部で、その底面には木目状の圧痕が残る。内面は使用のため滑らかになっている。これも胎土と焼成は良好で、色調は灰色を呈する。

ＳＤ－11には前段階の時期の土器を含むが、加賀焼の72、白磁74、青磁の76がそれぞれ出土している。72は大甕で、その肩部にあたり刻印を加えている。外面には自然釉がかかっている。74

は皿で、底部は輪高台を呈している。土はやや軟質であり、釉は高台外面までに及んでいる。76は青磁の碗で、口縁部の直立する無文のものである。

包含層からも出土している。珠洲焼では270～272の擂鉢が存在する。270は口唇部に波状文を描いている。271と272は内面におろし目があり、それが使用により擦り減っている。273は越前焼の底部である。

白磁では252は碗で、外面にヘラ先による（沈線）で先丸の蓮弁を描いている。253も同種のものであろう。255は高台付きの皿で、口縁部に２条の沈線を持っている。258は全面施釉の小盃で、口縁は端反りとなり、底部は三角高台となっている。釉は透明感があり光沢がある。259は小碗である。

青磁では細片ながら269の鉢がある。これは無文の鉢であろう。

第７節　ヘラ記号・硯・土錘・円盤状陶製品・砥石・不明石製品・鉄製品・古銭

ヘラ記号を持つものは７点存在している。それはすべて須恵器で、140と180及び193～197のものである。いずれも底部にヘラ先で直線的に引かれているが、194は坏蓋の天井部に引かれているものと推定される。すべて破片であるためにその全形は明らかではない。

硯は石製のものと須恵器の甕胴部片を転用しているものがある。第24図１は石製のものである。硯頭部を欠落しているが、硯尻部より硯頭部の幅が狭い台形型を呈している。硯尻部の裏面を凹ませて脚としている。現存の硯面の頭部側1/3が海の部分にあたり、残りの部分が陸の部分にあたる。硯面は使用頻度が多かったために滑らかな状態を呈している。特に海と陸の境目あたりの硯面が少し凹んでいる。また、この硯の全面には墨ではなく朱が付着している。２は須恵器甕の胴部片を転用しているもので、周りは滑らかに磨いてある。内側の中央部寄りの器面は、使用のためか滑らかになっている。これ以外では先に説明したＳＫ－10の甕胴部片79も転用硯としての可能性があろう。

土錘では３～７までの５点が出土している。いずれも完形かほぼ完形のものである。竹等の丸い棒状具に粘土紐を巻き付けて、指頭により形を整えている。Ⅰ類(3)は大型品で端部より中央部幅が広いもの。Ⅱ類(4)やや楕円形を呈するもの。Ⅲ類（６～７）細長く中央部の太さが、同じもの。長さでは６は７よりも短い。Ⅳ類(5)小型で端部より中央部幅が広いもの。以上のように区分される。

円盤状陶製品は２点出土している。いずれも須恵器甕の胴部片を打ち欠いて、円盤形にしている。第24図８は厚さ1.1cm程度の厚さの胴部片を使い、1.2×1.8cm程度の大きさにしている。第24図９は厚さ0.5cm程度の胴部片を使い、3.0×3.4cm程度の大きさにしている。この小型品の他に大型品としては、ＳＥ－３の墨書土器63などが同様な性格を持つのであろう。

砥石としては第24図10が出土している。長さ15.3cmを測るもので、それは４面共に使用している。石質は黄褐色を呈し、石質は粘板岩系統の硬く目の細かいものである。その石質から仕上げ砥の

ようもなのであろう。

不明石製品第24図11がそうで、一部破損品である。厚さは約0.6cm、幅は6.8cmを測るが、長さは現存値で4.6cmである。両面と側面を磨いてあり、端部側は断面の厚さが薄くなっている。

鉄製品は３点程出土している。それはＳＥ－３の上層から２点、１区Ｐ－17から長さ3.7cm、幅0.35cmの四角の釘が１点である。ほかに鉄滓が６点出土している。

古銭は３号トレンチから寛永通宝が１点出土している。

第８節　瓦

今回の調査で瓦は14点出土している。出土地点は２区が５点、そのうち遺構ではＳＫ－８から１点。３号トレンチでは遺構のＳＤ－11と13からそれぞれ１点づつの計２点。４号トレンチからは７点。そのうち遺構のＳＫ－10とＳＤ－９から１点づつの計２点出土している。その瓦の種類は軒平瓦１点、平瓦11点、丸瓦２点である。第25図にまとめて掲載した。

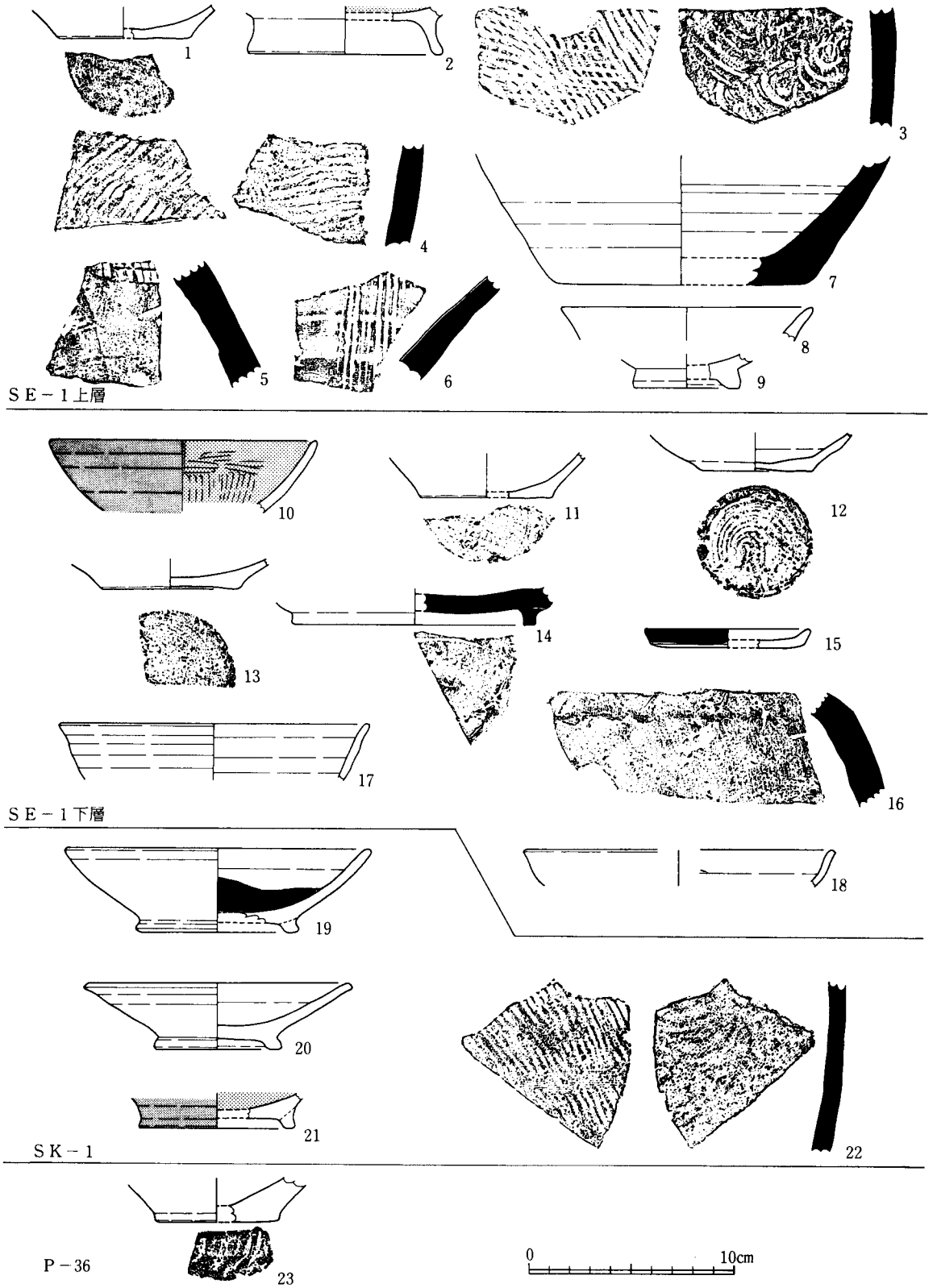
１はＳＫ－８から出土した軒平瓦で、瓦当に変形唐草文を構成しているが、圏線が弦端のみに存在するもので、この上下の圏線はなくなっている。さらにその変形唐草文も太くて低い隆線が入り乱れたものになっており、そこには流麗さをすでに失っている。この瓦はすでに表面が全体的に磨耗している。このＳＫ－８の遺構内に入った時点にはすでに破損して、磨耗のかなり進んだ段階であったのであろう。２と14は丸瓦の破片と推定される。凸面と側面は丁寧にヘラナデ調整によって仕上げられている。凹面には布目痕を残している。その他は平瓦と推定される。３は瓦の四隅のいずれかにあたる。凸面から側面はナデ調整をし、凹面には布目痕が残っている。４は側端部の部分である。凸面は中央部はヘラケズリし、端部はナデ調整をしている。凹面には布目痕が残っている。９と13も凸面はヘラナデ調整をし、凹面には布目痕を残している。９はＳＫ－10、13はＳＤ－９から出土している。５は側面を丁寧にヘラナデ調整して面を形成している。凸面には縄目痕を残し、凹面には布目痕を持っている。この瓦の色調は淡白灰色を呈している。６はＳＤ－13から出土している。これも平瓦で四隅のいずれかにあたる。側面はヘラ状具でナデ調整をして凸面には縄目痕があり、凹面には布目痕が残る。この凹面にはかすかに指紋の跡が残っている。色調は褐色を呈している。７はＳＤ－11から出土した。これも凸面には縄目痕が、凹面には布目痕が残っている。12も同様なものである。次に８と10と11であるが、これは凸面には平行叩きを残し、凹面には布目痕を残しているものである。

第９節　加工石

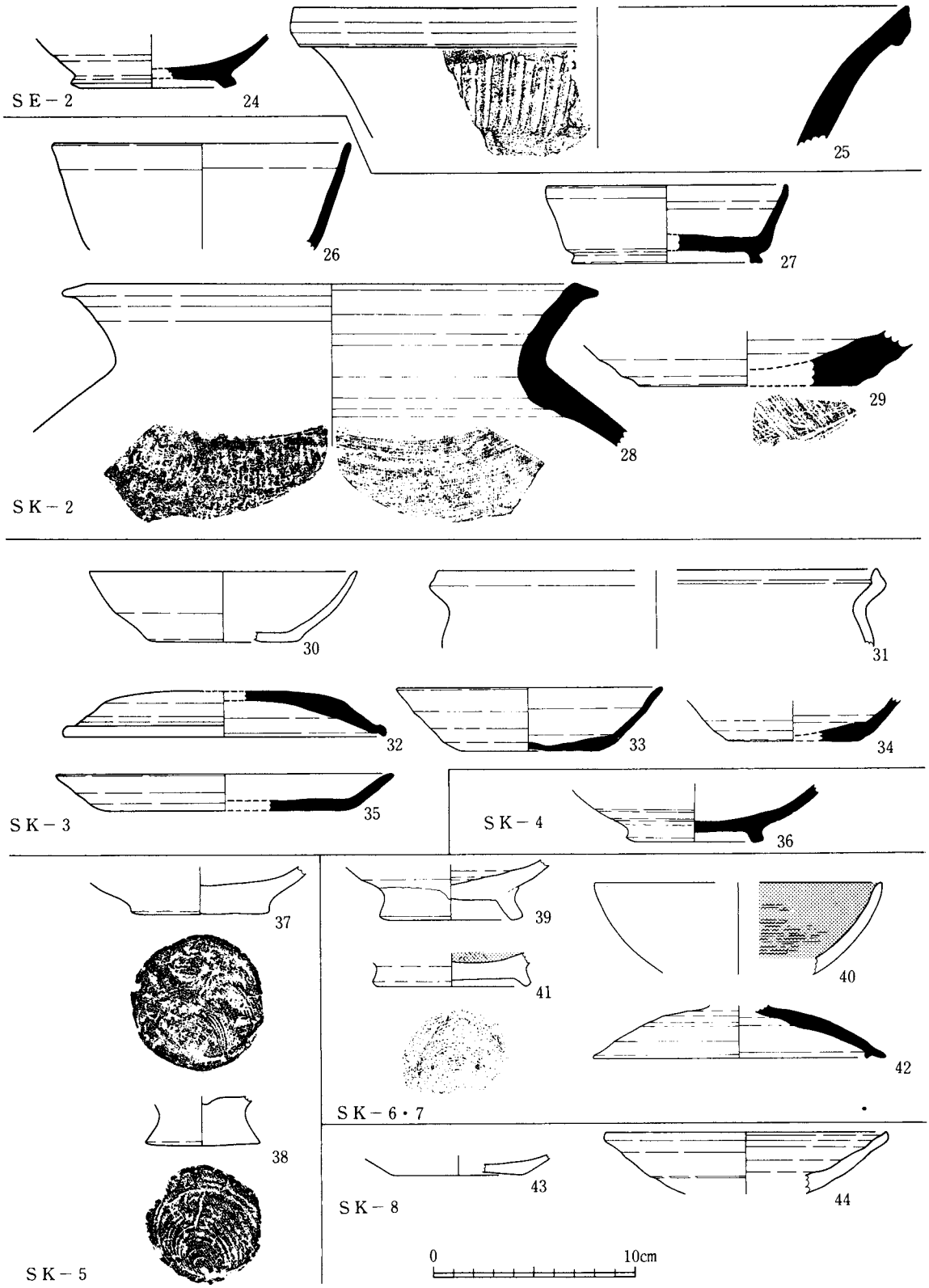
加工した大型の石製品も出土している。第26図１はＳＸ－１のピットに土師器の長甕といっしょに入れてあった。長さ35cm、幅22cm、厚さ15.5cmを測る。両端は折れているが、表面はノミ状工具で削って調整している。表面が焦げたようになっていることから、火の近くで使用していたことが窺われる。ただ、それが具体的にどのような場所かは明らかではない。２はそれよりも

小さいものであるが、これも一方が欠けている。長さ22cm、幅15cm、厚さ12cmを測る。表面には欠けた部分もあるが、これにもノミ状工具で削った痕がある。3も同様なものであるが、本来の厚さの半分ほどの部分で割れている。上面と側面の2面はその表面が滑らかになっているが、もう一方の側面にはノミ状工具で削った痕がある。これはＳＫ－８から出土している。これらの3点の石質は凝灰岩系の石材が使われている。長さ9cm、幅12.5cm、厚さ5.8cmを測る。4は一部欠けているが長楕円形の礫の両面を磨いており、一部に擦った痕が残っている。長さ30.6cm、幅14cm、厚さ8.3cmを測る。

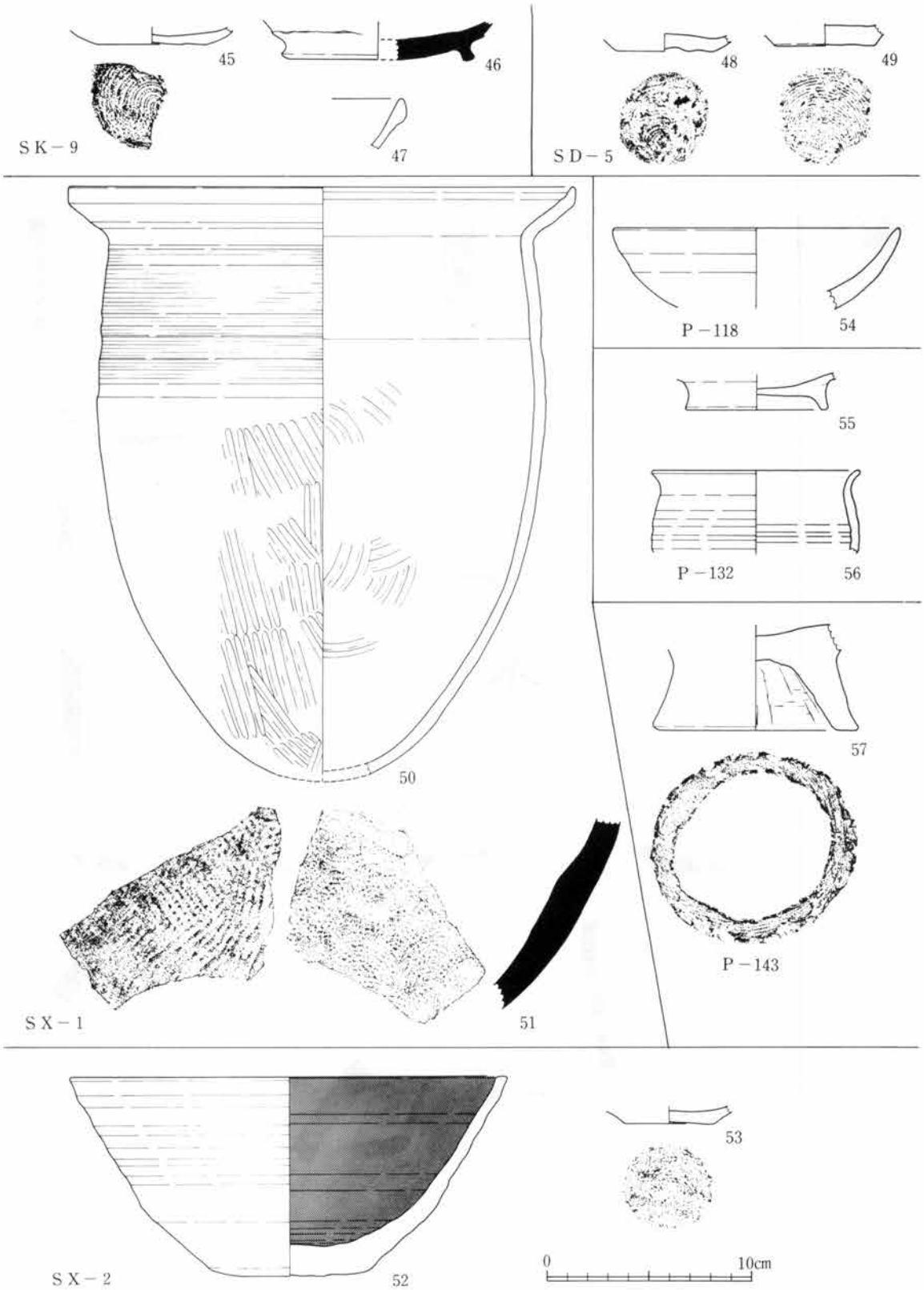
註. 第5節第IV期（12世紀）の遺物の中で紹介した白磁碗皿の分類については、横田賢次郎・森田　勉　1978年「太宰府出土の輸入中国陶磁器について――形式分類と編年を中心として――」九州歴史資料館研究論集4に従った。



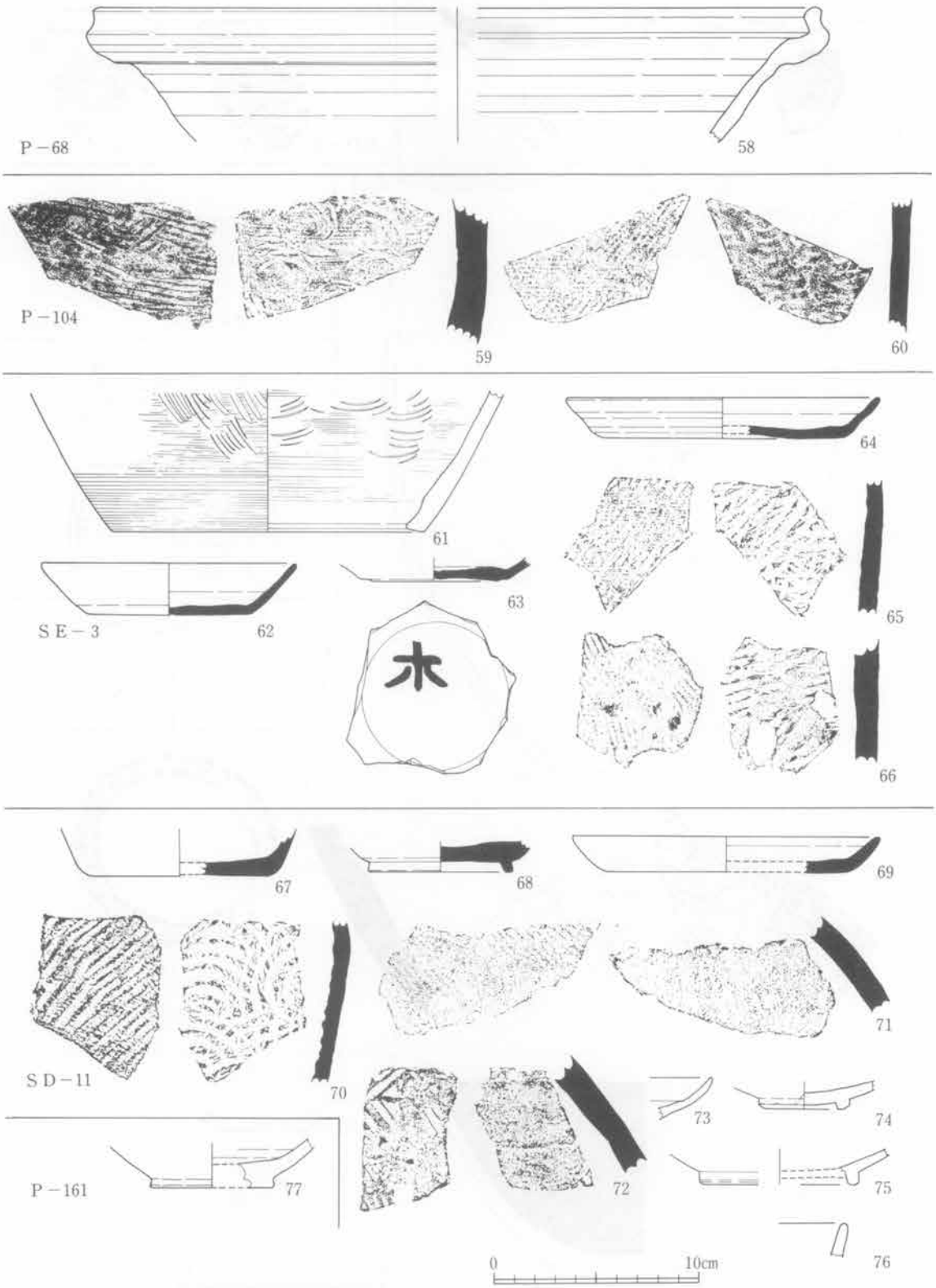
第10図　遺構（ＳＥ－１、ＳＫ－１、Ｐ－30）出土遺物①（Ｓ＝1/3）



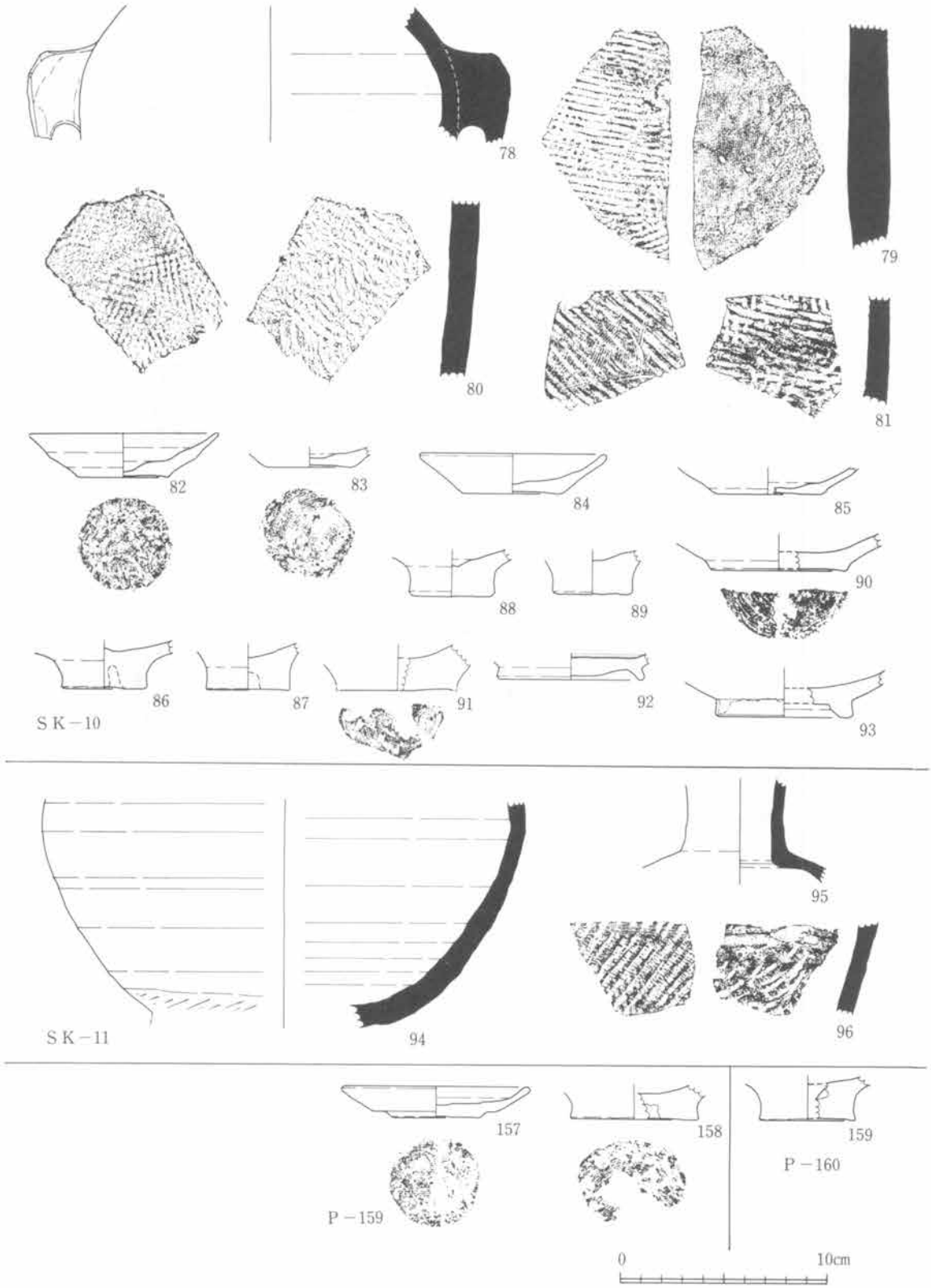
第11図　遺構（ＳＥ－２、ＳＫ－２～８）出土遺物②（Ｓ＝1/3）



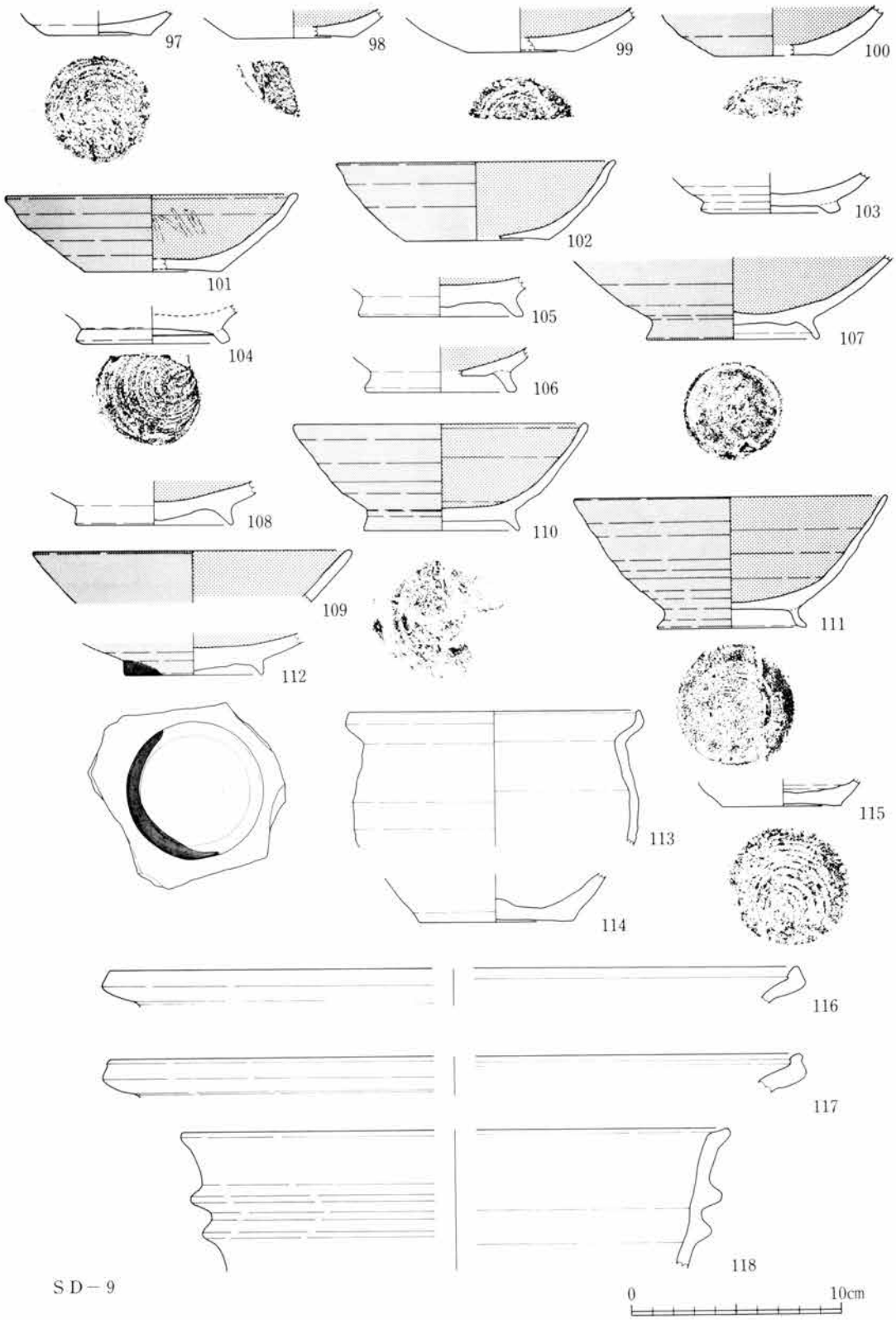
第12図　遺物（ＳＫ－９，ＳＤ－５，ＳＸ－１・２，Ｐ118・132・143）出土遺物③（Ｓ＝1/3）



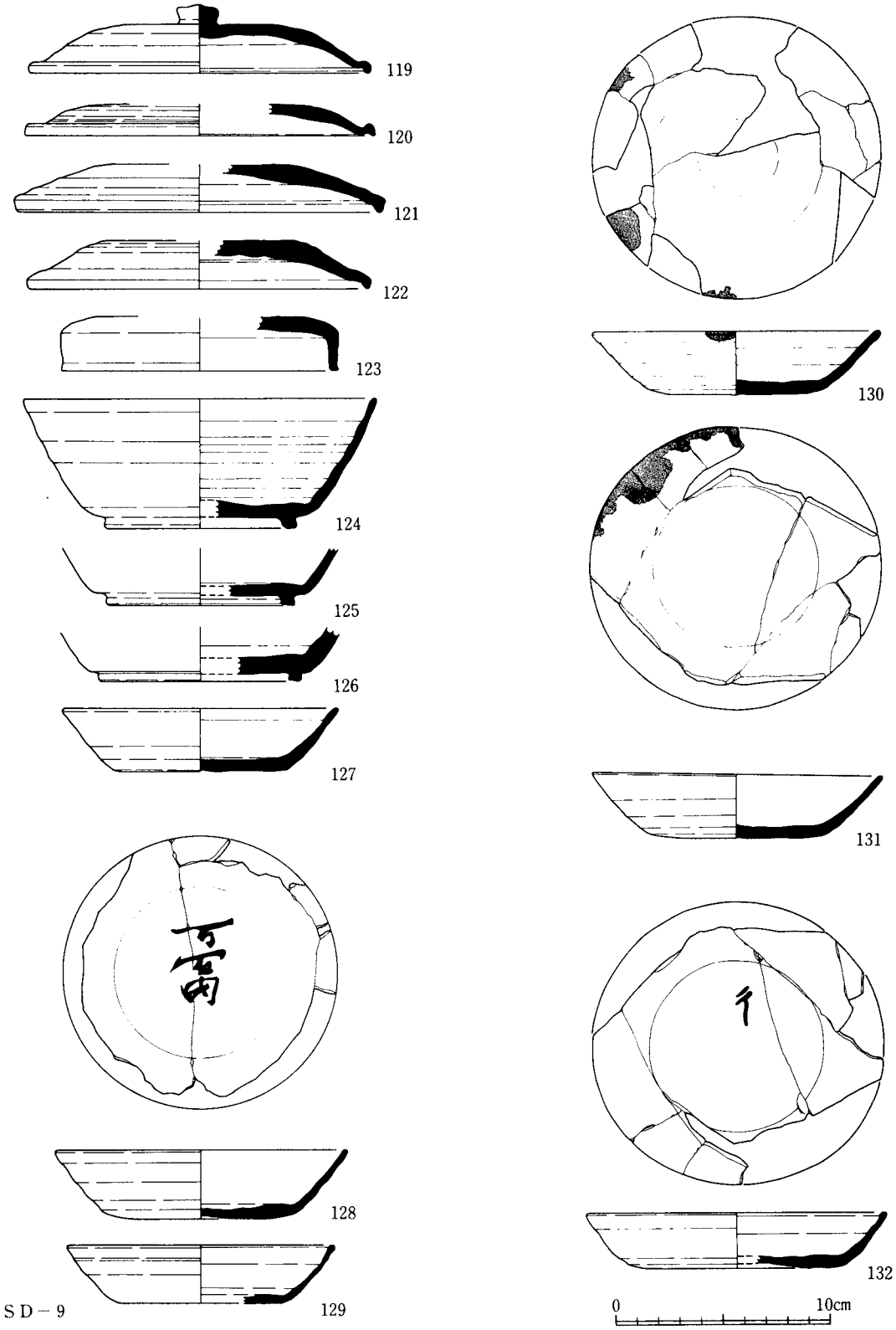
第13図　遺構（SE－3, SD－11, P－68・104・161）出土遺物④（S＝1/3）



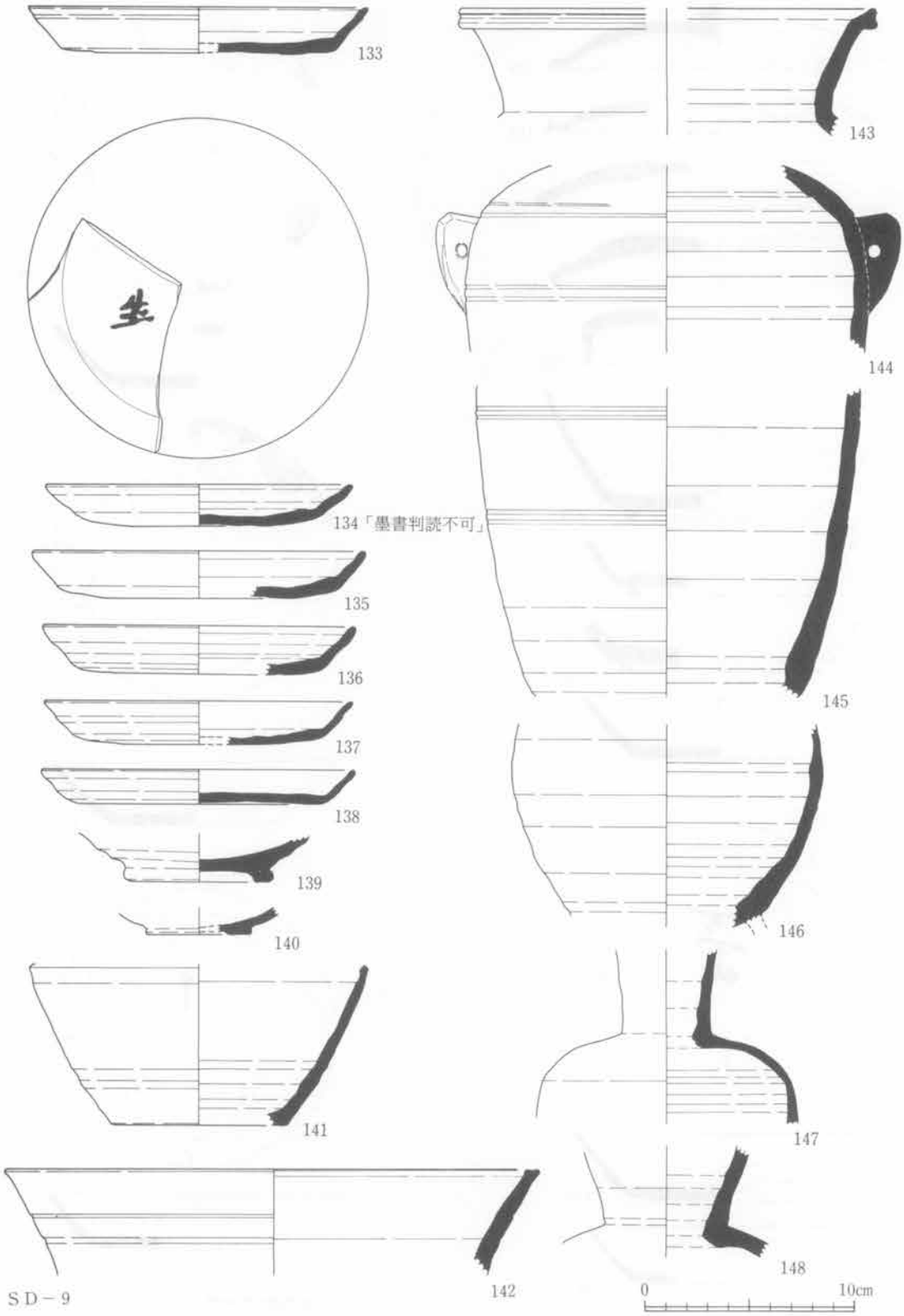
第14図　遺構（SK－10・11，P－159・160）出土遺物⑤（S＝1/3）



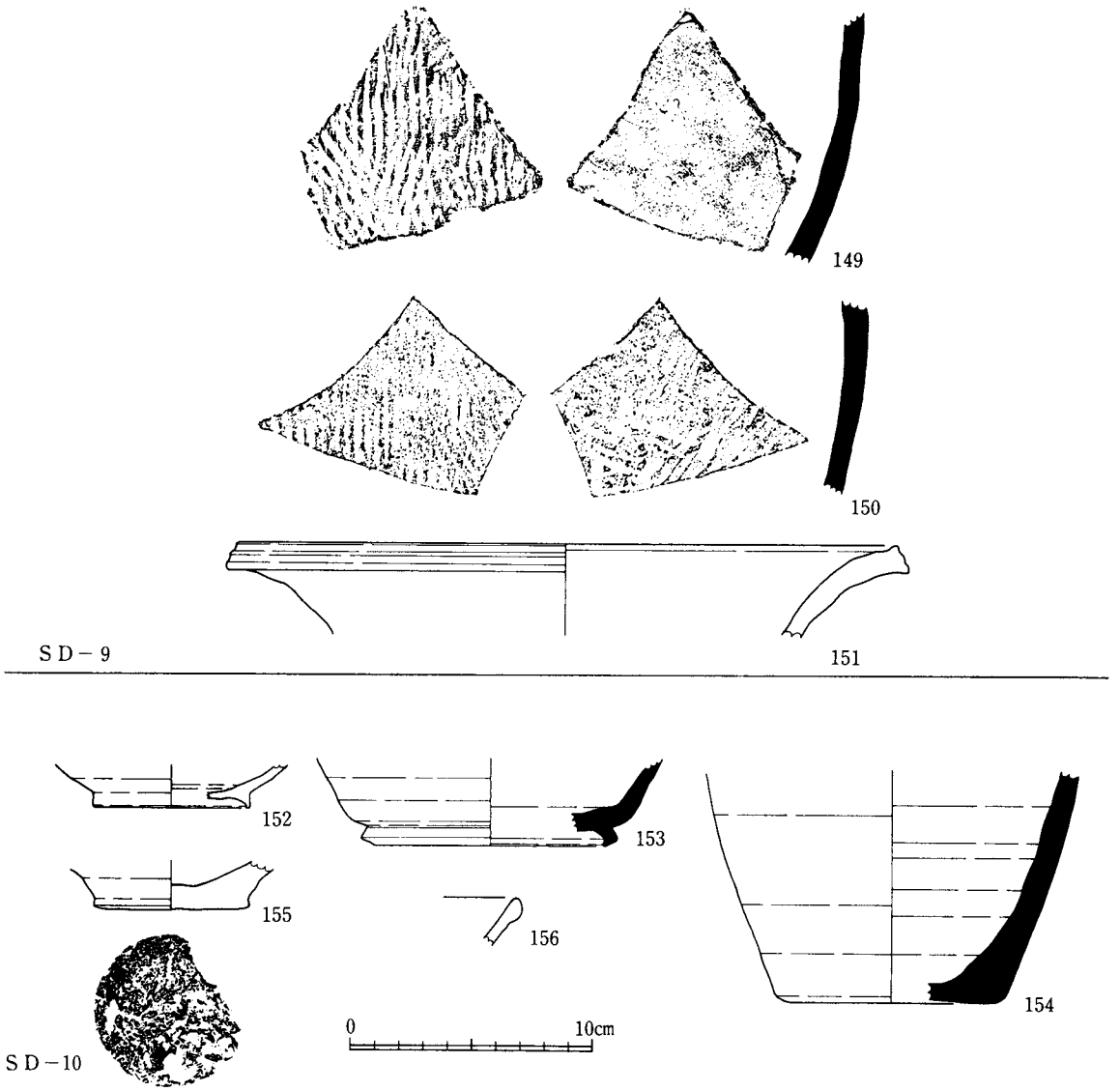
第15図　遺物（SD－9）出土遺物⑥（S＝1/3）



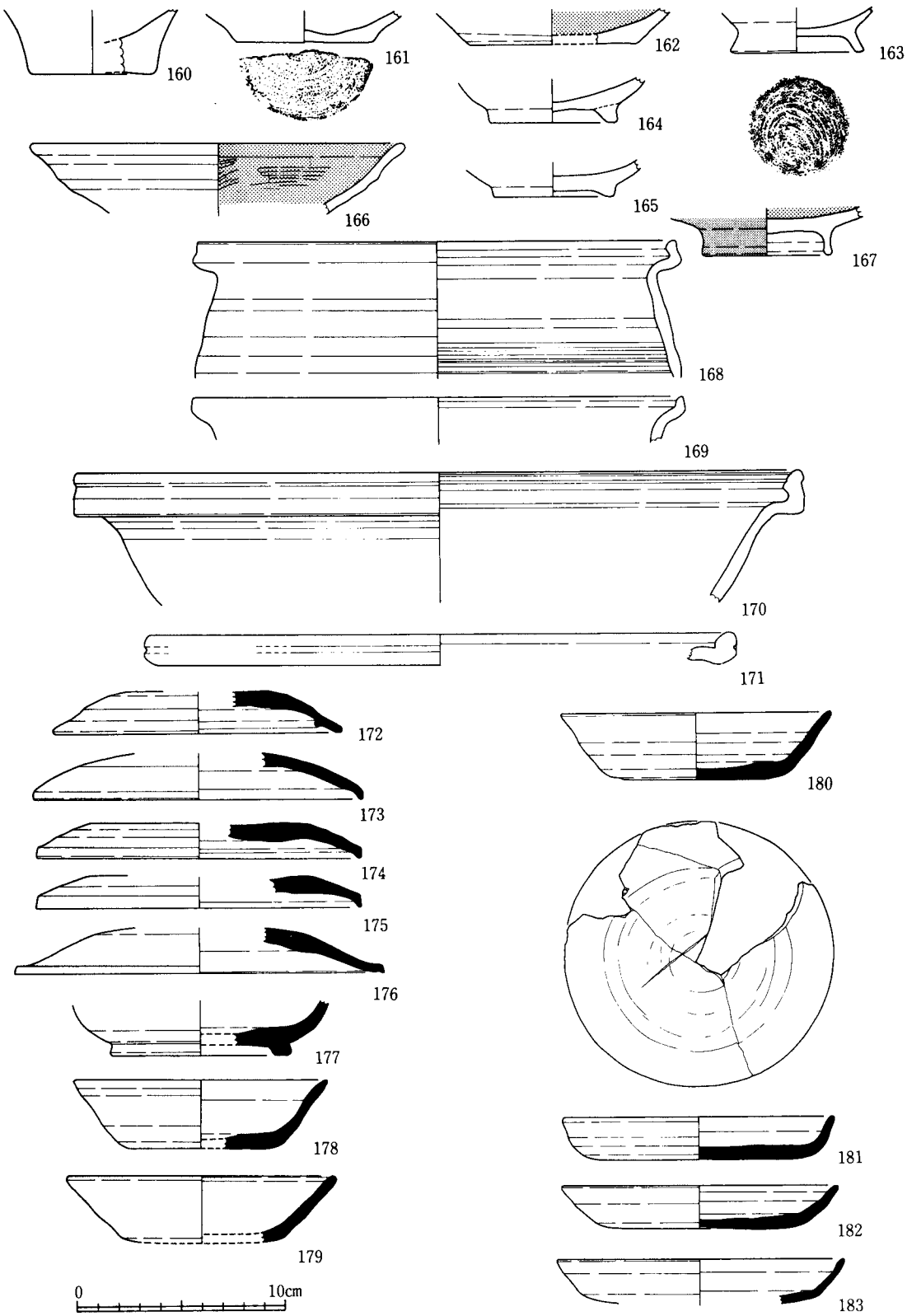
第16図　遺構（ＳＤ－９）出土遺物⑦（Ｓ＝1/3）



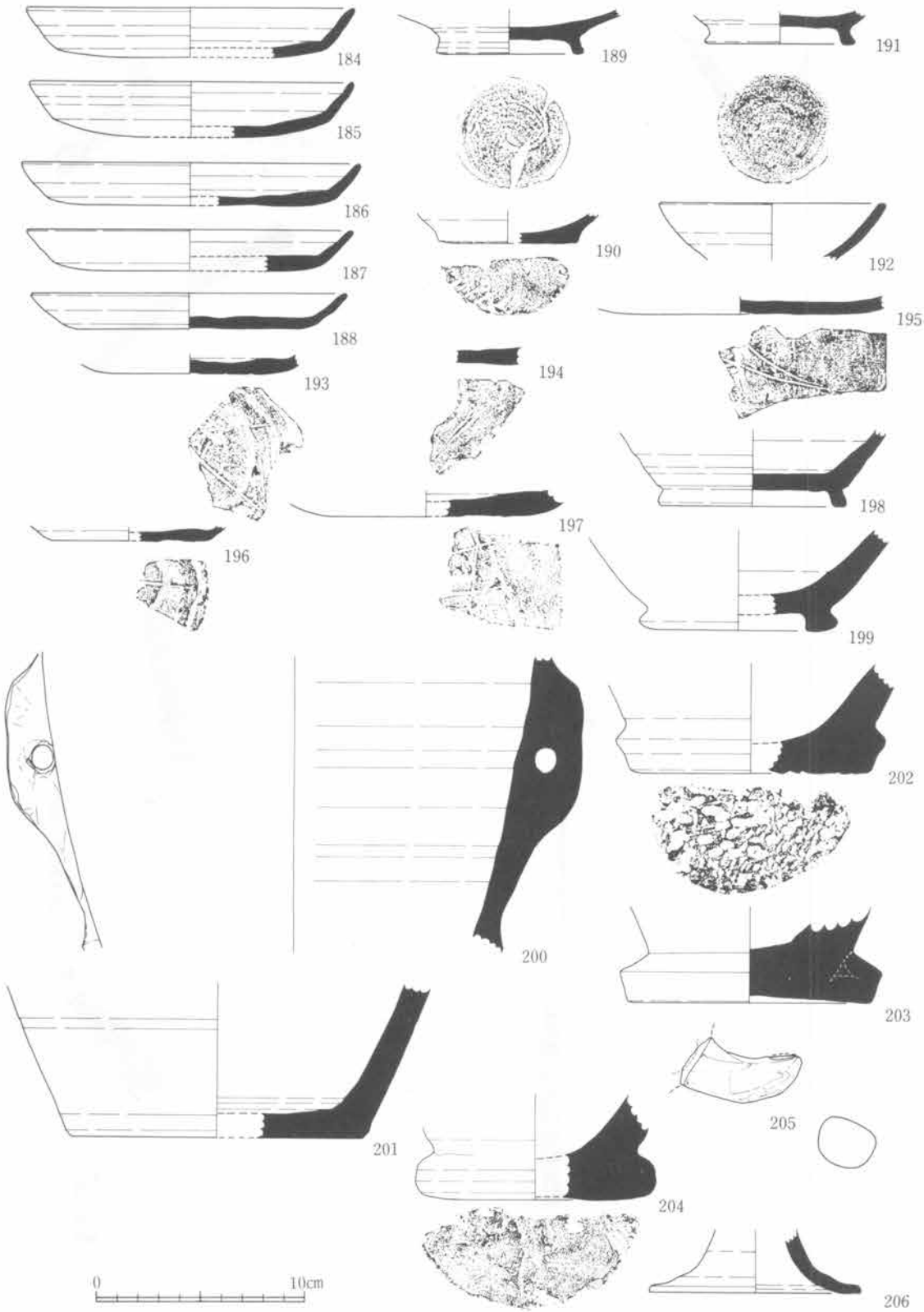
第17図　遺構（ＳＤ－９）出土遺物⑧（Ｓ＝1/3）



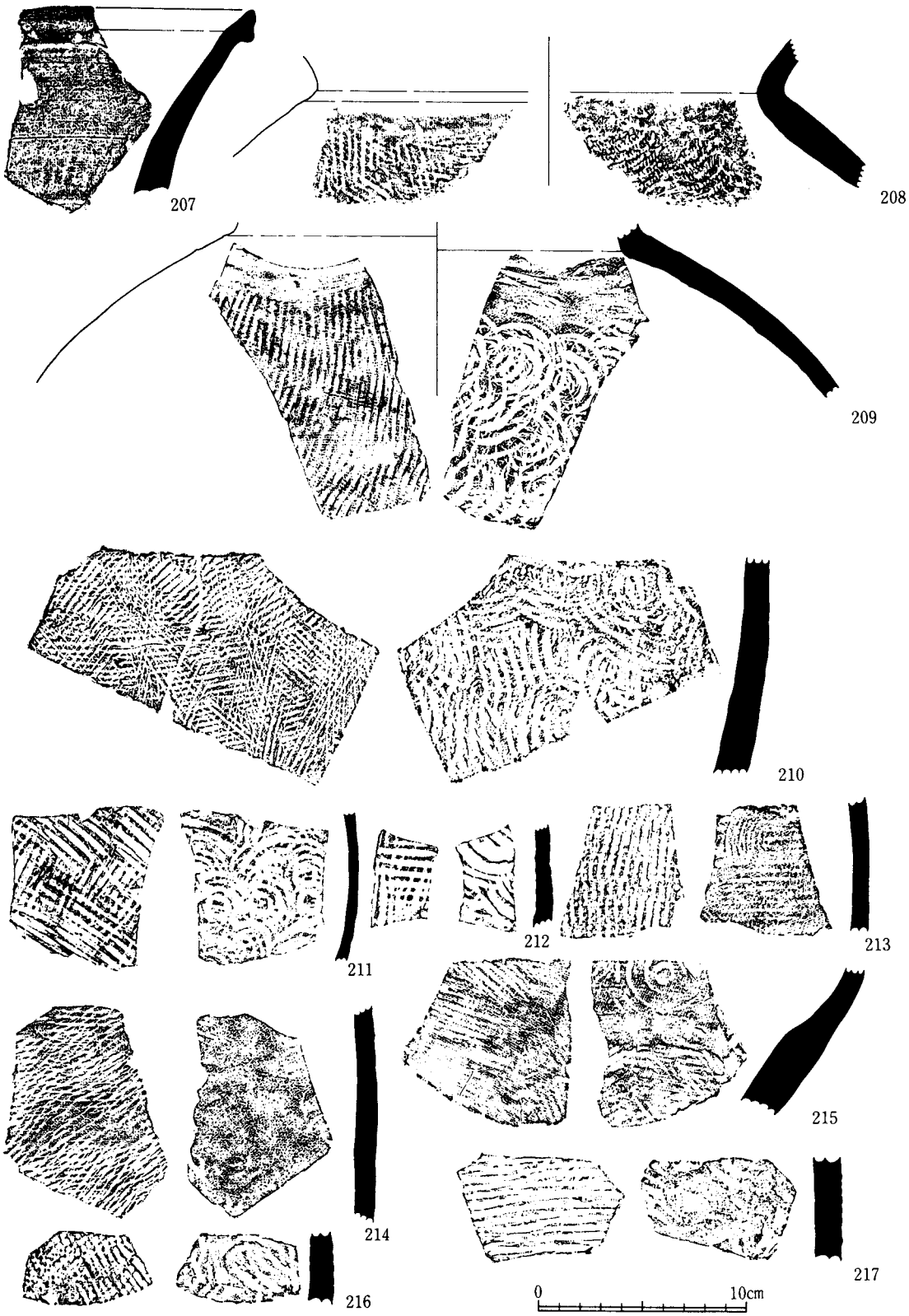
第18図　遺構（ＳＤ－９・10）出土遺物⑨（Ｓ＝1/3）



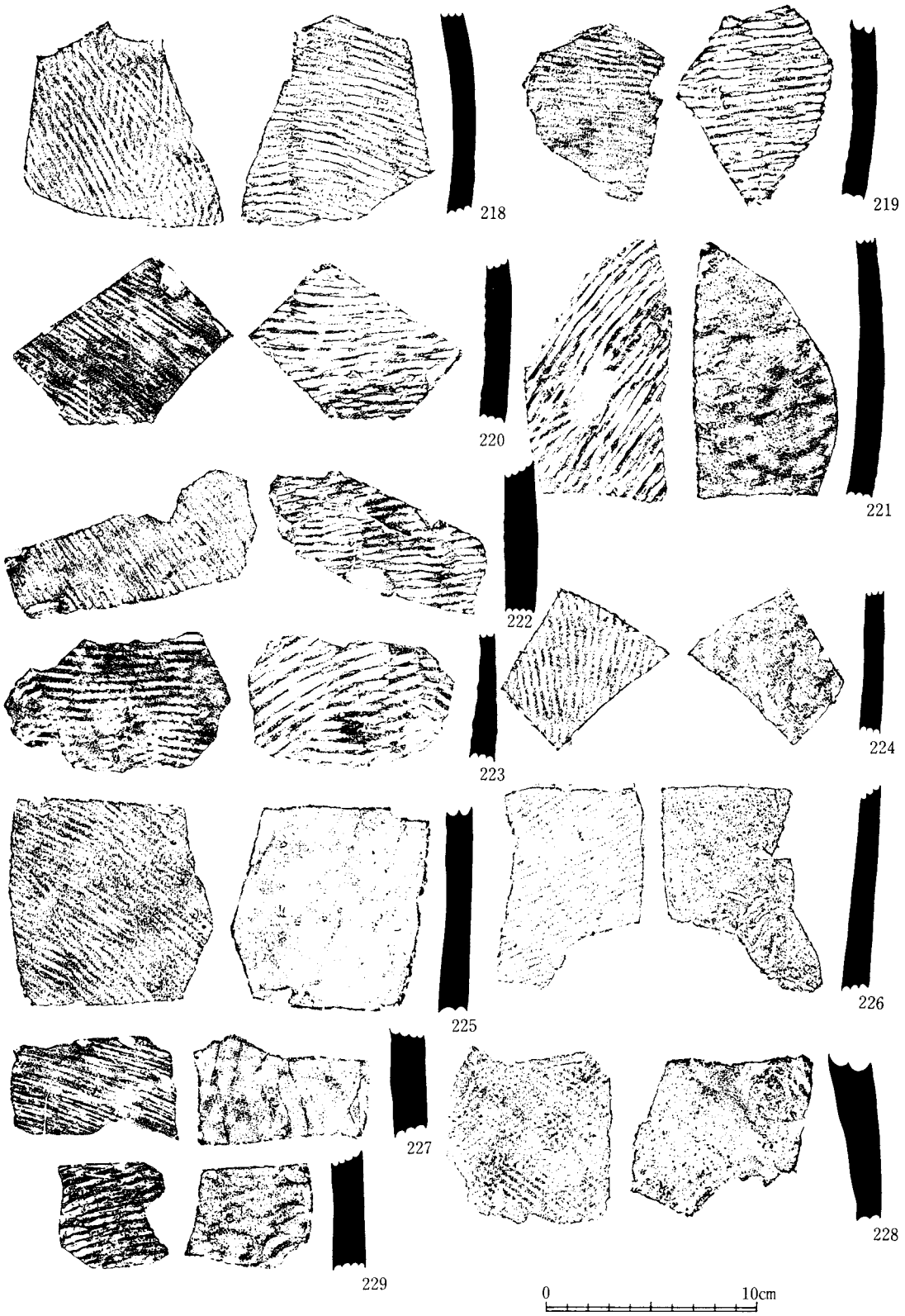
第19図　包含層出土遺物①（S＝1/3）



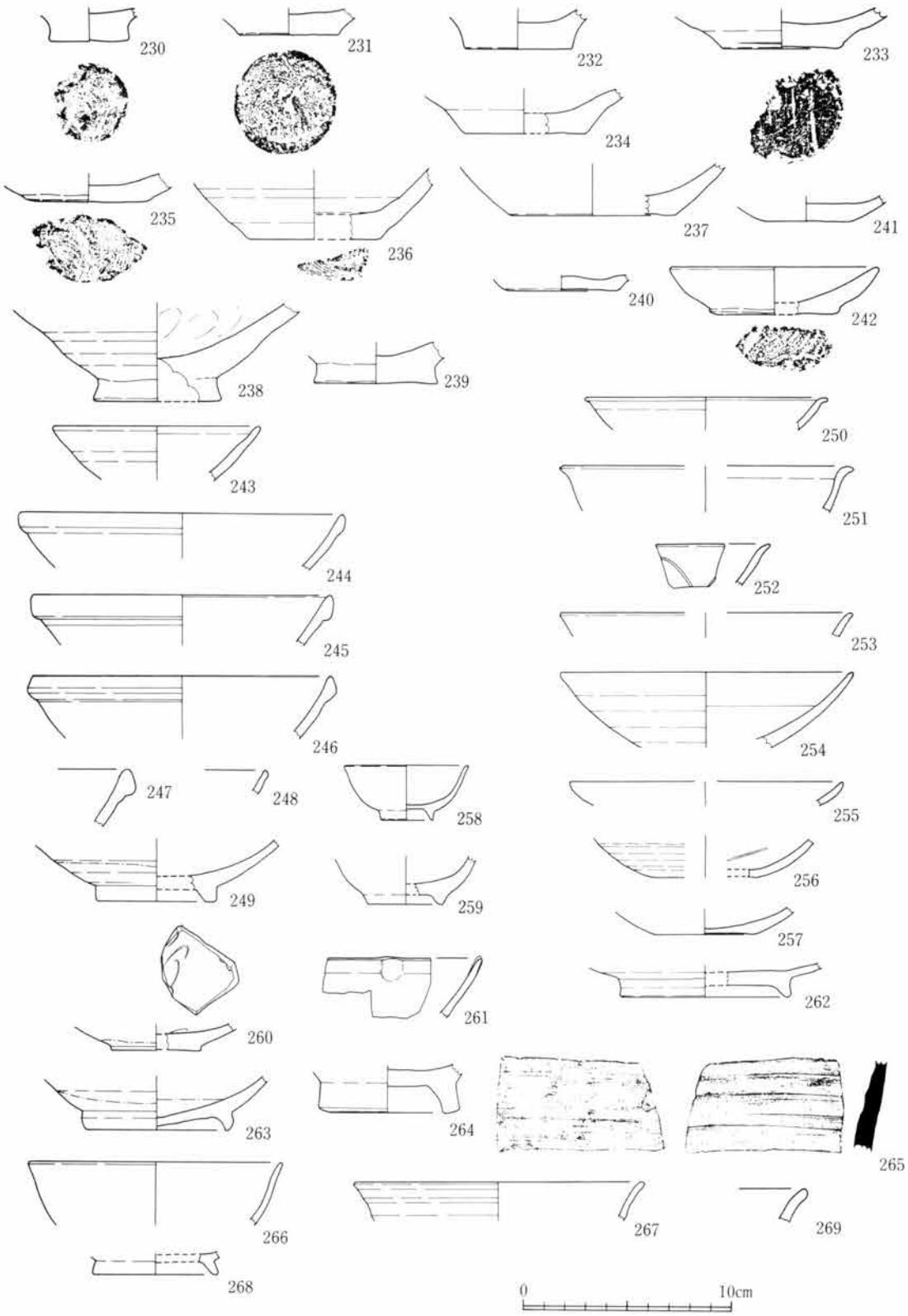
第20図　包含層出土遺物②（S＝1/3）



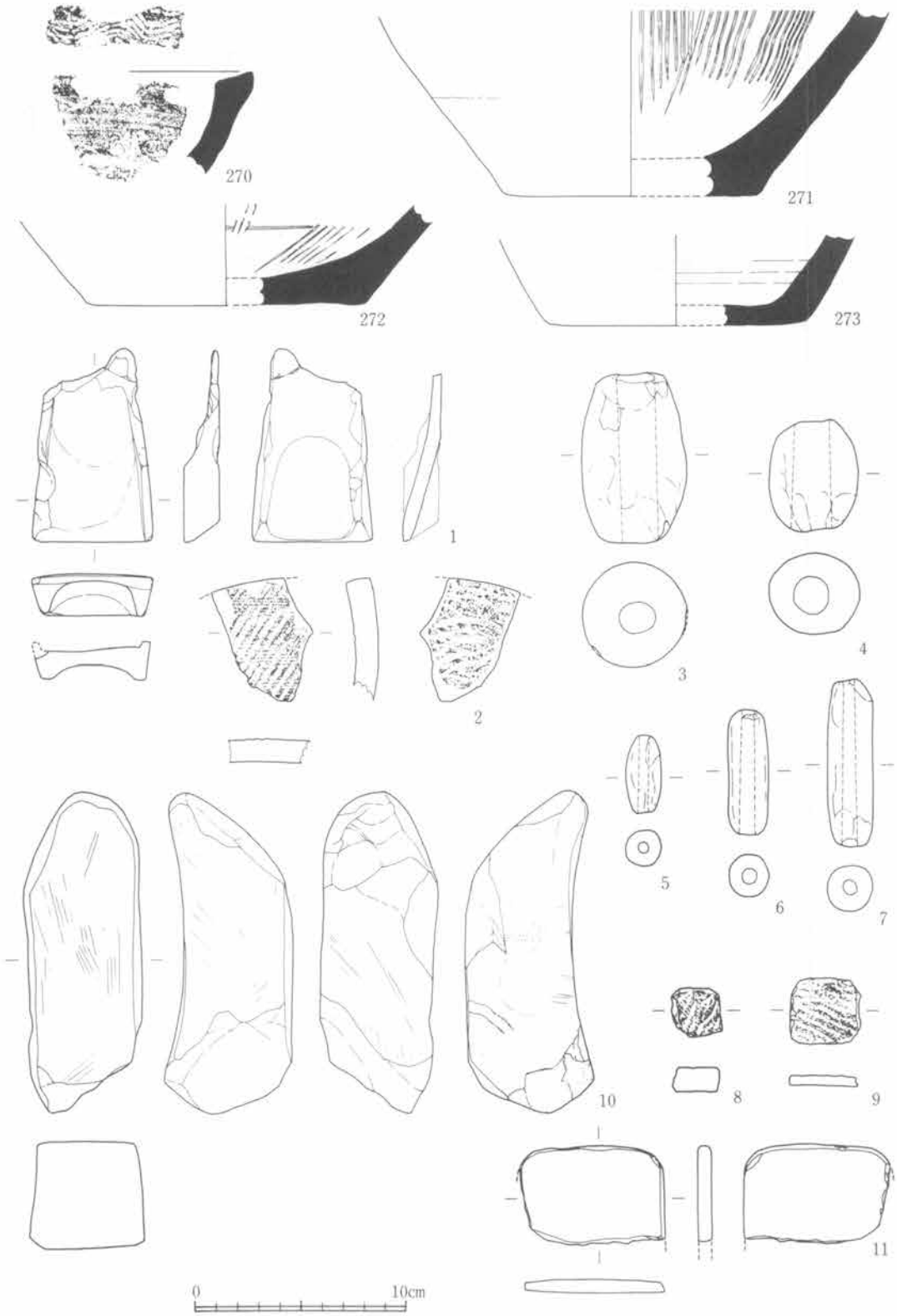
第21図　包含層出土遺物③（S＝1/3）



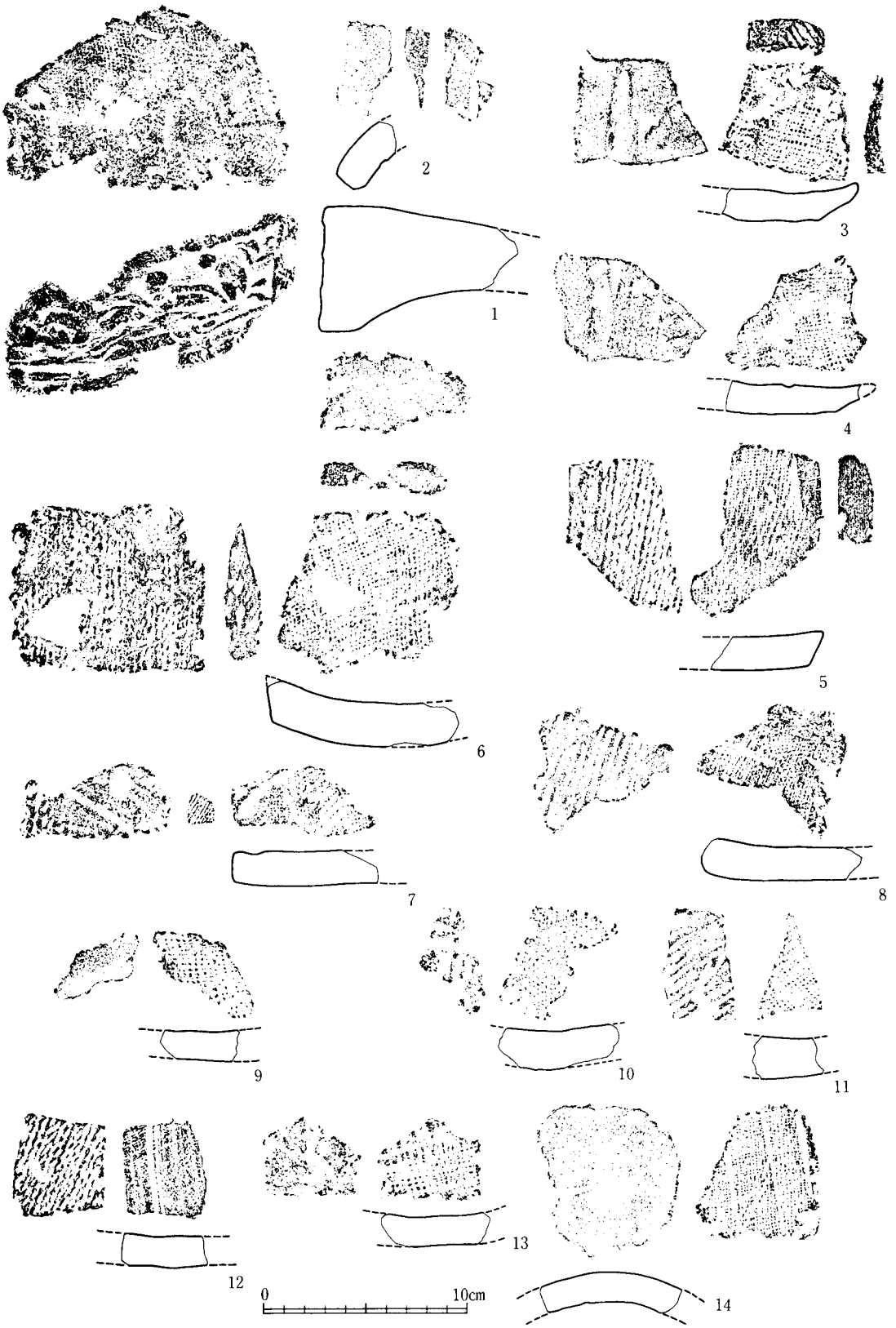
第22図　包含層出土遺物④（S＝1/3）



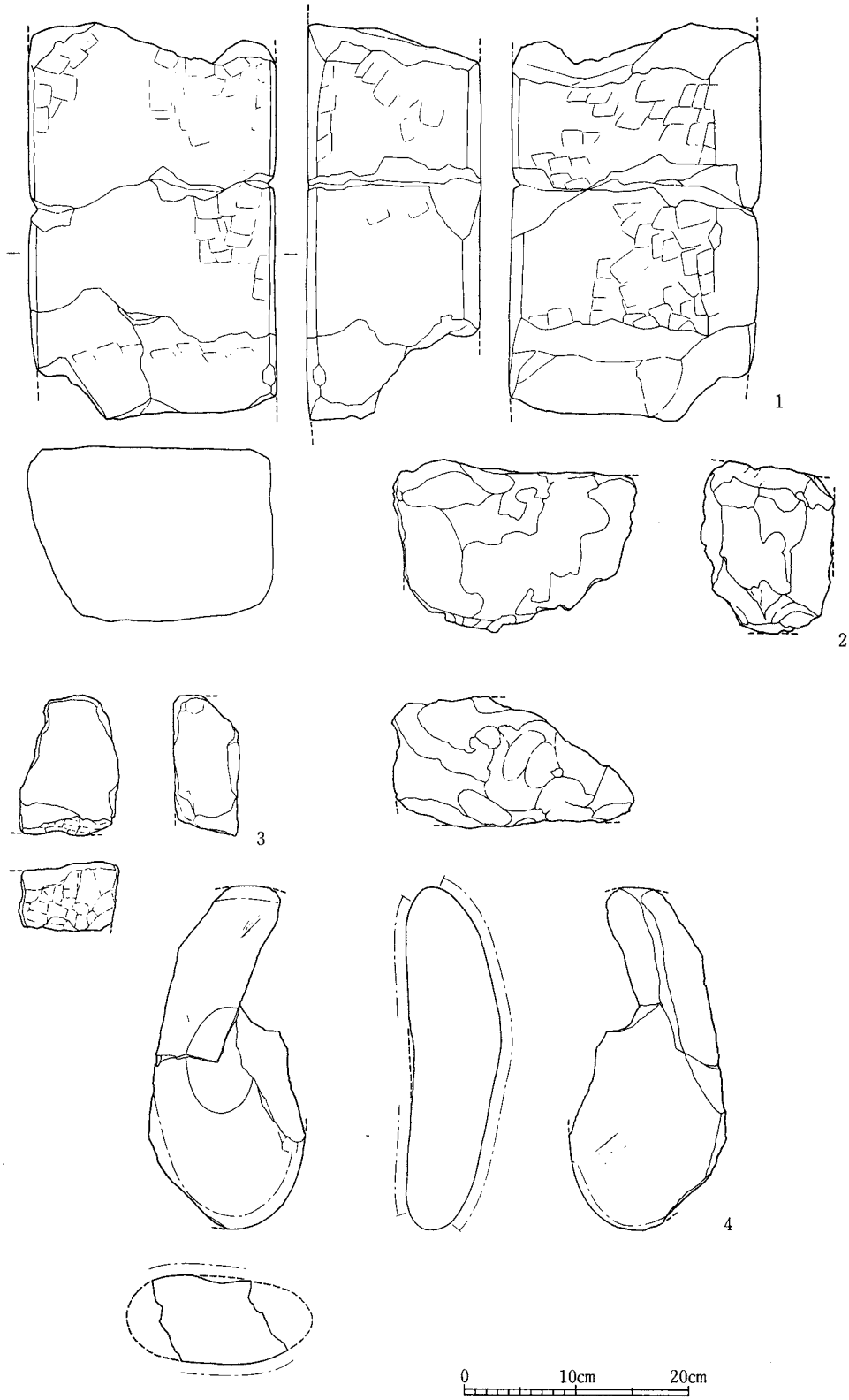
第23図　包含層出土遺物⑤（S＝1/3）



第24図　包含層出土遺物⑥（S＝1/3）



第25図　遺構・包含層出土遺物⑦（S＝1/3）



第26図　遺構出土遺物⑧（S＝6/1）

第5章　まとめ

第1節　遺構について

今回の調査で検出された遺構には、井戸（ＳＥ）４基、土壙（ＳＫ）11基、溝（ＳＤ）13条、その他（ＳＸ）２基があり、他にピットが多数存在していた。これらの遺構は各々離れた調査区から検出されたが、同一遺跡のものといえる。ここではこれらの遺構について簡単にまとめてみたい。

まず、井戸であるが４基確認された。ＳＥ－１は楕円形の掘り方も持ち、その中央部に井側材を持っていたものと推定される。しかし、井側材自体は井戸の廃棄時に取り上げたためか、すでになく、その構造は明らかではない。ＳＥ－２・３・４は１のような掘り方を持つものではなく、その規模と形態からして素掘りのものであった可能性が高い。また、土壙としたＳＫ－８はその形態等から判断すると、井戸であった可能性が考えられる。これらの井戸の掘削深度並びに土層は、１が青灰色粘土層上面までで〔Ｌ＝2.80m〕、２が暗灰色粘土層中で〔Ｌ＝2.52m〕、３が淡灰色粘土層中までで〔Ｌ＝2.01m〕、４が黒灰色粘質土層までで〔Ｌ＝2.58m〕の深さまで掘り込まれていた。ＳＫ－８の場合は灰色粘土上面までで〔Ｌ＝2.90m〕となっていた。これらの井戸の底部はすべて粘土層中か粘質土層中で止まっており、砂層中までは掘り込まれてはいない。このことからこれらの井戸は、地下水を汲上げるためのものというよりも、溜め井戸的な性格をもつものと推定される。基盤の土層が２区と３号トレンチでは異なっていたことも特徴といえる。

これらの井戸の埋没状況をみると、ＳＥ－１は井戸の使用を止めて井側材を取り上げた後に凹地の状態を呈する期間があり、その間に覆土下層の炭化物や腐植物等が多量に入り込んだもので、この掘り方内をゴミ穴的に機能させていたことが窺われる。その後これを一気に埋め戻している。ＳＥ－２も機能を止めてから少し時間を置いて埋め戻しているが、その埋め戻しの最後に入れた土には砂利を多く含んでいるのが特徴であった。同様のことはＳＫ－８でも確認しているが、他の遺構では確認できなかった。ＳＥ－３はその上面が削平されているものと推定されるが、これも機能を止めて少し時間を置いてから埋め戻しているのであろう。４は他のものと比べると土層が単純で異なっている。

土壙では一般的な土壙と掘立柱建物の柱穴掘り方のものがある。後者のものにはＳＫ－６・７があり、他にその可能性のあるものとしてＳＫ－９がある。６・７はややずれているが重複しているもので、その中央部には柱根跡が残っている。形態的には方形や隅円方形を呈していた。９はその攪乱されていない下部の土層堆積状況から柱穴の掘り方と推定したが、上部が攪乱されているために推定の域をでない。もし、それが正しいとするならば大型の掘り方のものとなる。これらの土壙を検出した当初は、このＳＫ－６・７、９、４が並ぶことから１区と２区の間の水田部分にも遺構の存在する可能性からトレンチを設定したが、それは確認できなかった。

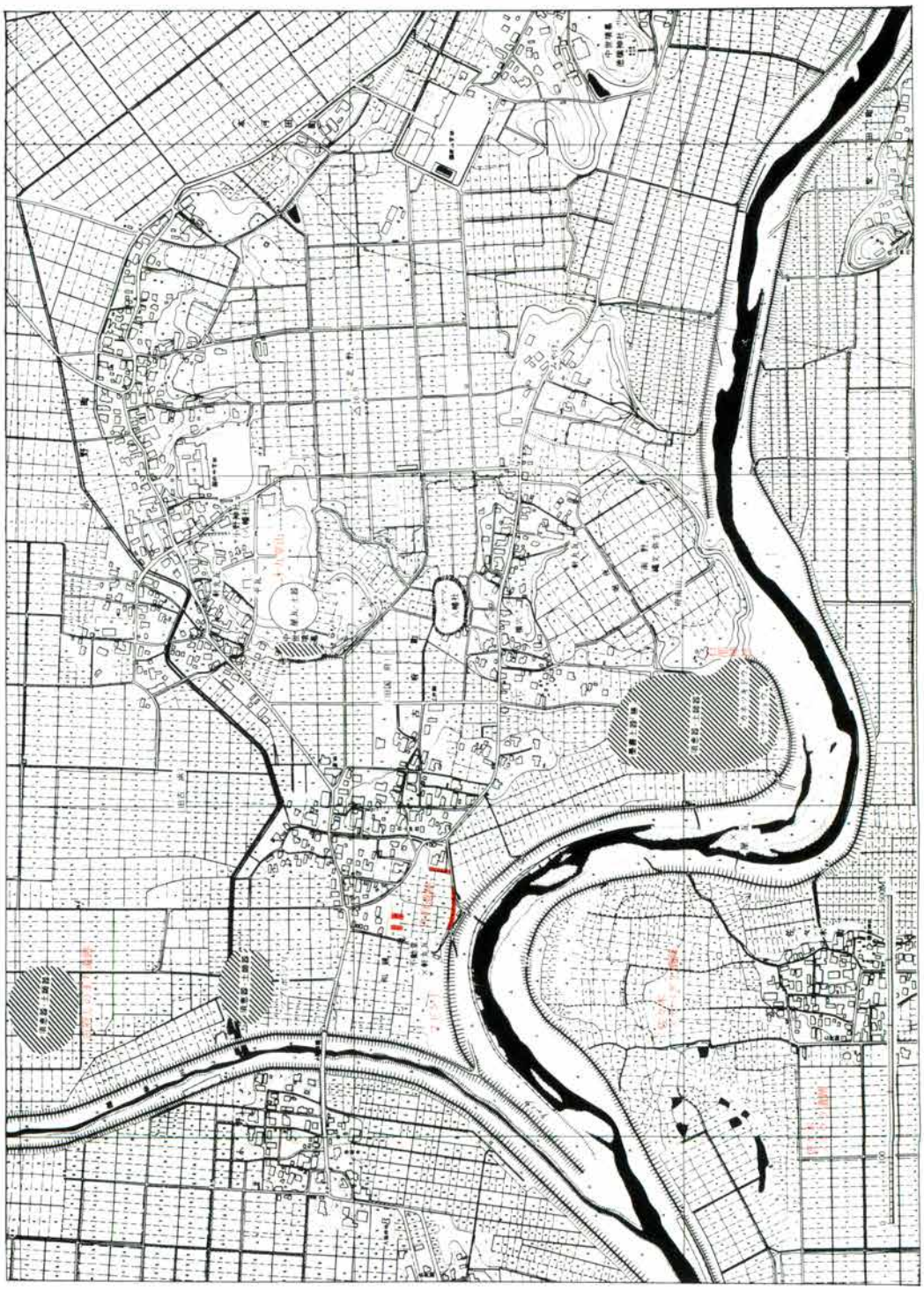
溝では2区の調査区内に南北方向に3条の溝（ＳＤ－４、５・６、７）が平行に走っている。その性格については明らかではないが、ＳＤ－５の覆土中からⅣ期の土師器小皿が2点出土していることから、その時期のものであろう。

第2節　遺物について

今回の調査ではⅠ期の弥生時代後期からⅤ期の中世にかけての遺物が出土している。Ⅰ期とⅡ期及びⅤ期のものは少なく、Ⅲ期とⅣ期の遺物が多数を占めている。ここではこのⅢ期とⅣ期の遺物を中心にまとめてみたい。

このⅢ期の遺物は調査区の全域から出土しているが、包含層からのものが多い。その確認された器種は土師器では、椀（有台・無台）、皿、小甕、長甕、鉢、鍋などがある。須恵器では坏蓋、坏（有台・無台）、盤、有台椀、有台皿、瓶壺類、短頸壺蓋、甕等がある。なかでもこのⅢ期の遺物がまとまって出土した遺構にＳＤ－９がある。ここからは土師器と須恵器が多数検出された。土師器では椀、小甕、長甕、鉢等が存在している。土師器の椀では15個体あり、口縁部片の1個体を除くと無台のものが6個体、有台のものが8個体で、有台の数がやや多い。この両タイプ共に内面を黒色処理しているものが殆どで、黒色土器の比率は極めて高い。さらにこの内面を黒色処理しているもので、外面を赤彩しているものも認められる。これらの椀の体部はヨコナデ調整をしているが、その下端はヘラケズリしているのが特徴といえる。底部には糸切り痕を残すものと、それをヘラケズリしているもの、さらにナデ調整しているものなどが認められる。甕では小甕と長甕があり、小甕は底部に糸切り痕を残している。須恵器では坏蓋と有台坏はその個体数自体が少なくて無台坏の方が多い。この中でも坏蓋の121、122、有台坏の126などはやや時期が遡ると推定されることから、坏蓋と有台坏の数は少なくなっている。盤はやや多い。この坏や椀類の中で坏蓋の119は端部の形態や鈕が小型化している点に特徴がある。これと有台坏の124がセットを組むものと推定される。無台坏では127なども特徴があろう。また、1点づつしか存在しないが土師器の椀をまねた有台椀の139と蛇目高台を持つ140も含まれよう。この供膳器に占める土師器と須恵器の割合をみると、僅かに須恵器の方が多くなっているが、ほぼそれは両者拮抗しているものといえる。貯蔵器では肩衝壺、長頸瓶、双耳瓶と短頸壺の蓋が存在しているが、その作りは丁寧なものといえる。甕については胴部片が殆どで、口縁部片が少なく明らかではない。土師器の長甕と小甕、鉢も存在している。他の遺構や包含層からも甕や鍋があり、口縁の作りはしっかりしている。この時期の遺物はＳＤ－９以外からも出土しているが、それらの特徴から時期は9世紀の後半のものが主体といえる。10世紀のものとしては有台皿の189、191が該当しよう。この土師器と須恵器以外のもので緑釉・灰釉等の施釉陶器も存在している。いずれもその点数は少なく、緑釉の場合は細片のものが殆どである。しかし、調査区の範囲からすればその頻度は高いものといえるであろう。

土器以外の遺物中で注目されるのが瓦類である。それには軒平瓦・平瓦・丸瓦の3種類のものが存在している。本遺跡の周辺で瓦の出土遺跡には、本遺跡南西側に位置するフドンド遺跡[1]、同



第27図　古府台地周辺の遺跡と調査の位置図
吉岡康暢　1976年「平安前期の地方政治と国分寺(上)」
金沢大学日本海域研究所報告第8号より加筆転載

じく本遺跡東方の台地上の十九堂山遺跡[2]がある。梯川右岸側では軽海西芳寺遺跡[3]、軽海遺跡[4]、軽海廃寺跡[5]、軽海中世墓址群[6]、佐々木ノテウラ遺跡[7]、佐々木アサバタケ遺跡[8]、漆町遺跡[9]からそれぞれ出土している。これらの瓦は小松市戸津窯跡群・二ッ梨窯跡群で作られたものがほとんどで、この戸津窯跡群・二ッ梨窯跡群では軒丸瓦は1種、軒平瓦はA種とB種の2種類が認められている[10]。が、同種の軒丸瓦は集落跡からはまだ出土してはいないという。軒平瓦のA種は均整唐草文軒平瓦でその文様に流麗さが認められるが、B種はこのA種の文様を陰刻したもので流麗さに欠けている。本遺跡のものはこのB種に該当するものである。また、本遺跡の製品では上外区右端の珠文部分に傷がない点から、戸津窯跡群の製品よりも古い瓦笵を使用していたものと指摘されている[11]。このB種は前述のフドンド遺跡と漆町遺跡及び瓦生産を行っていた戸津窯跡群からそれぞれ出土しており、フドンド遺跡と漆町遺跡では、この戸津窯跡群で作られた軒平瓦B種と焼成窯が未発見の加賀市高尾廃寺跡出土と同種の単弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土しており[12]、軽海廃寺跡でもこの高尾廃寺出土と同種の軒丸瓦と軒平瓦が出土しているという[13]。このことから戸津窯跡群・二ッ梨窯跡群以外にも瓦生産を行っていた窯跡が存在しているのであろう。戸津窯跡群の中で瓦生産を行っていたのは戸津37・38号窯跡で、同窯内から出土した須恵器の年代は吉岡編年第V_1期で10世紀前半の時期が想定されている。瓦の時期は、平安京及び周辺地域から出土する複弁四葉蓮華文軒丸瓦とC字対向形を中心飾とする均整唐草文軒平瓦からの系譜を持ち、その時期は10世紀前半とされているが、それが10世紀初頭頃に上る可能性も考えられている[14]。望月氏の研究によれば戸津古窯跡群の中で戸津37・38号窯は、第II期（10世紀前半）に位置付けられているが[15]、瓦の年代が上り、戸津第II期の時期が10世紀初頭頃に上ることになれば、当然これに先行する戸津31号窯跡の時期も9世紀後半に上ることになる。本遺跡の主体となる土器群は、この戸津31号窯に先行し、その時期は吉岡編年のIV_2期の富来町給分小袋窯跡[16]に併行するものであろう。そのことから本遺跡ではその主体となる土器群の時期と瓦の時期との間に、時間差が存在していることになる。戸津窯跡群ではこの時期の様相は明らかでないため、南加賀でこの時期の様相を窺う上で貴重な資料といえる。

次に、IV期の土器群についてみたい。この時期の土器群も調査区全域から出土しているが、その数は少なかった。すべてが遺構からのものではないが、土師器では小皿、椀、有台椀、鉢、台付き土器等のものが存在している。その中で小皿は少なくとも6タイプに分かれる。小皿1類はＳＫ－10から出土の82～85で全体に薄手の作りで、特に底部内面の中央が凹み、体部が底部から直線状に開くものである。2類はＰ－159から出土の157で、底部直上で少し凹み口縁が外傾するものでこれも口縁の器壁が薄い。3類は包含層からの242で、底部直上で少し凹むようになり、外傾する口縁の厚いものである。4類から6類は底部片のみであるため分けるのが難しい。4類は底部の内面中央部が周より高くなるもので、ＳＤ－5の48や包含層からの240である。5類は底部の厚さが均等なＳＤ－5の49や包含層からの231や241などである。6類はＳＫ－10からの86～89や包含層からの230で、底部が厚く平高台状を呈するものである。この中にはＰ－160の159も含まれよう。椀では全形の判明するものがなく、皿になる可能性もあるが、口縁部の形態では2タイプ、底部では6タイプに分かれる。口縁部の1類はＳＫ－8の44で、口縁が直線状に開くもので

ある。2類はP－118の54で、丸く内湾するものである。底部では1類はSK－10の90や包含層からの233、234などの底部から外反ぎみに開くものである。2類はSK－5の37でやや厚い底部から口縁が内湾ぎみに立ち上がっている。3類はSK－10の91とP－36の23で、器壁の厚いものもある。4類は包含層からの236で、底部から直線状に開いている。5類はP－161の77で、底部がやや厚く平高状を呈し、底面から少し立ち上がり口縁が内湾ぎみに開いている。6類はP－159の158や包含層からの238、239で、平高台状の底部からくびれぎみに立ち上がり、外形するものである。

第1表　古府遺跡出土陶磁器一覧表

分類 / 出土地点	白磁						青磁		緑釉			灰釉			瀬戸
	碗	玉緑碗	皿	小磁	小盃	その他	碗	鉢	椀	皿	その他	椀	皿	その他	碗
1区SE－1上層	3	1	2												
〃　下層									2						
1区　包含層	1	1	3						1					1	
2区　S　K－9		1													
S　D－3											1				
S　X－1									1						
包含層	5	10	4	1	1	1	1	1	6	1		3	1	1	1
3トレS　D－11		2	2				1		2						
包含層			1												
4トレS　K－10		1													
S　D－10		2													
包含層	1		3												
調査区排土中	1	1													
地点不明		1	1												
合計	11	20	16	1	1	1	2	1	12	1	1	3	1	2	1

小皿と椀をこのように区分したが、遺構でまとまっているのがSK－10からの小皿1類と6類及び椀1類でこれに白磁碗が伴っている。皿1類は他では認められず、同6類は小松市中海遺跡第2次調査第3地点[17]から同様なものが存在している。P－159の157は中海遺跡の同地点や小松市漆町遺跡金屋ヤシキダ地区4号井戸[18]に同様なものが存在している。椀6類とした238は漆町遺跡金屋サンバンワリ173号土壙[19]に類例がある。有台椀ではSK－10から黒色土器の92が1点確認されるのみである。

この他で注目したい器種は、SX－2からの鉢52とP－143からの57の台付き土器の底部である。鉢は内面に漆が付着しているもので、この種の器形自体は他に類例が確認されていない。この台付き土器の方は、小松市佐々木アサバタケ遺跡第1次調査のA－7区[20]から出土した土器群中に認められる。調整等は同じであるがそれは一回り小さく、色調も淡灰褐色と異なっている。

本遺跡の土器は数量も少なく遺存状況の不良なものが多いため、これだけのもので論ずること

には無理な点があるが、色調の面では褐色系、淡白褐色系、淡白灰色系、灰褐色系のものが認められる。梯川を挟んで対岸の佐々木アサバタケ遺跡のそれは灰褐色系のもので殆ど占められ、僅かに皿で褐色系のものが数点含まれている程度である[21]。それと比べると褐色系及び淡白褐色系のものが多いことに特徴がある。中海遺跡では佐々木アサバタケ遺跡のありかたと違い、本遺跡以上にバラツキが認められる。次に胎土ではすべて精選されたものであるが、その胎土中に含まれる混和材からみると微細な砂粒だけのもの、それに赤色土粒を含むもの、砂粒がごく僅かで赤色土粒を多く含むもの等に分かれる。焼成は全体にあまいものが多い中で、ＳＫ－８の44と包含層出土の236は色調は褐色系であるが、焼成は良好で堅く須恵器の生焼け的な感じを受け、他のものと大きく異なっている。これに次ぐものとしてはＰ－160の159は色調が淡白褐色であるが、堅いものとなっている。このように、胎土、焼成、色調に違いが存在するのは、時期差と共に土器供給地の系統の違いや、器種により胎土を使い分けしているということなどが考えられる。このIV期の時期は漆町遺跡金屋ヤシキダ地区４号井戸・金屋サンバンワリ地区100号井戸出土品[22]に近く、12世紀中葉頃で田島編年の２段階VIII_2期[23]に該当するものであろう。なお、陶磁器類は第１表に点数を示したが、その中で白磁玉縁碗の点数がやや多い。

註(1)　宮下幸夫　1987年　「15　フドンド（不動堂）遺跡」　『北陸の古代寺院』　桂書房
(2)　宮下幸夫　1987年　「17　十九堂山遺跡」　『北陸の古代寺院』　桂書房
(3)　戸澗幹夫　1986年　「III　西芳寺遺跡の遺構と遺物」　『軽海遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター
(4)　藤田邦雄　1986年　「IV　軽海遺跡の遺構と遺物」　『軽海遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター
(5)　宮下幸夫　1987年　「18　軽海廃寺」　『北陸の古代寺院』　桂書房
(6)　小村　茂・室山　孝　1973年　『軽海中世墓址群』　小松市教育委員会
(7)　北野博司　1986年　「第３章　遺構と遺物」　『佐々木ノテウラ遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター
(8)　昭和59・60年度石川県立埋蔵文化財センター調査、昭和59年度米沢調査担当、昭和60年度垣内担当。
(9)　望月精司　1987年　「漆町遺跡」　『北陸の古代寺院』　桂書房
(10)　望月精司　1987年　「戸津古窯跡群・二ッ梨古窯跡群」　『北陸の古代寺院』　桂書房
(11)　望月精司　1987年　「古府遺跡」　『北陸の古代寺院』　桂書房
(12)　註(2)宮下と註10望月と同文
(13)　註(6)宮下と同文
(14)　望月精司氏からの教示。
(15)　望月精司　1986年　「平安時代中期における戸津古窯跡群」（第５回須恵器研究会レジュメ）および望月精司氏からの教示による。
(16)　吉岡康暢　1983年「第２章　奈良平安時代の土器編年」　『東大寺領横江庄遺跡』　松任市教育委員会・石川考古学研究会
　このIV$_2$期の年代観は、吉岡氏は同書で９世紀後半から10世紀前半頃にかけての比較的長い時期幅をみている。田島明人氏は小松市漆町遺跡報告書で（田島明人　1986年　「第２章　９世紀後半から13世紀にかけての土師器の変遷」『漆町遺跡Ｉ』　石川県立埋蔵文化センター）、灰釉陶器との共伴関係から、その時期を９世紀後半から10世紀初頭頃と吉岡編年の年代観よりも時期幅を狭めて古くみている。また、望月精司氏は小松市戸津古窯跡群の調査からその時期を９世紀後半頃と考えておられる。田島氏と望月氏の年代観には近いものがある。
(17)　昭和58年度石川県立埋蔵文化財センター調査、米沢調査担当。
(18)　田島明人　1984年　「石川県の11・12世紀土器について」（五県会議情報交換資料）
(19)　註(20)田島と同文
(20)　昭和59年度米沢担当
(21)　その量はかなり少ないものである。

(22) 田島明人　1986年　「第２章　９世紀後半から13世紀にかけての土師器の変遷」　『漆町遺跡Ⅰ』　石川県立埋蔵文化財センター

(23) 註(22)田島と同文

参考文献

国府村史編纂委員会　1956年　『国府村史』　国府村役場

吉岡康暢　1976年　「平安前期の地方政治と国分寺（上）―加賀国分寺をめぐる問題―」　『金沢大学日本海域研究所報告　第８号』　金沢大学日本海域研究所

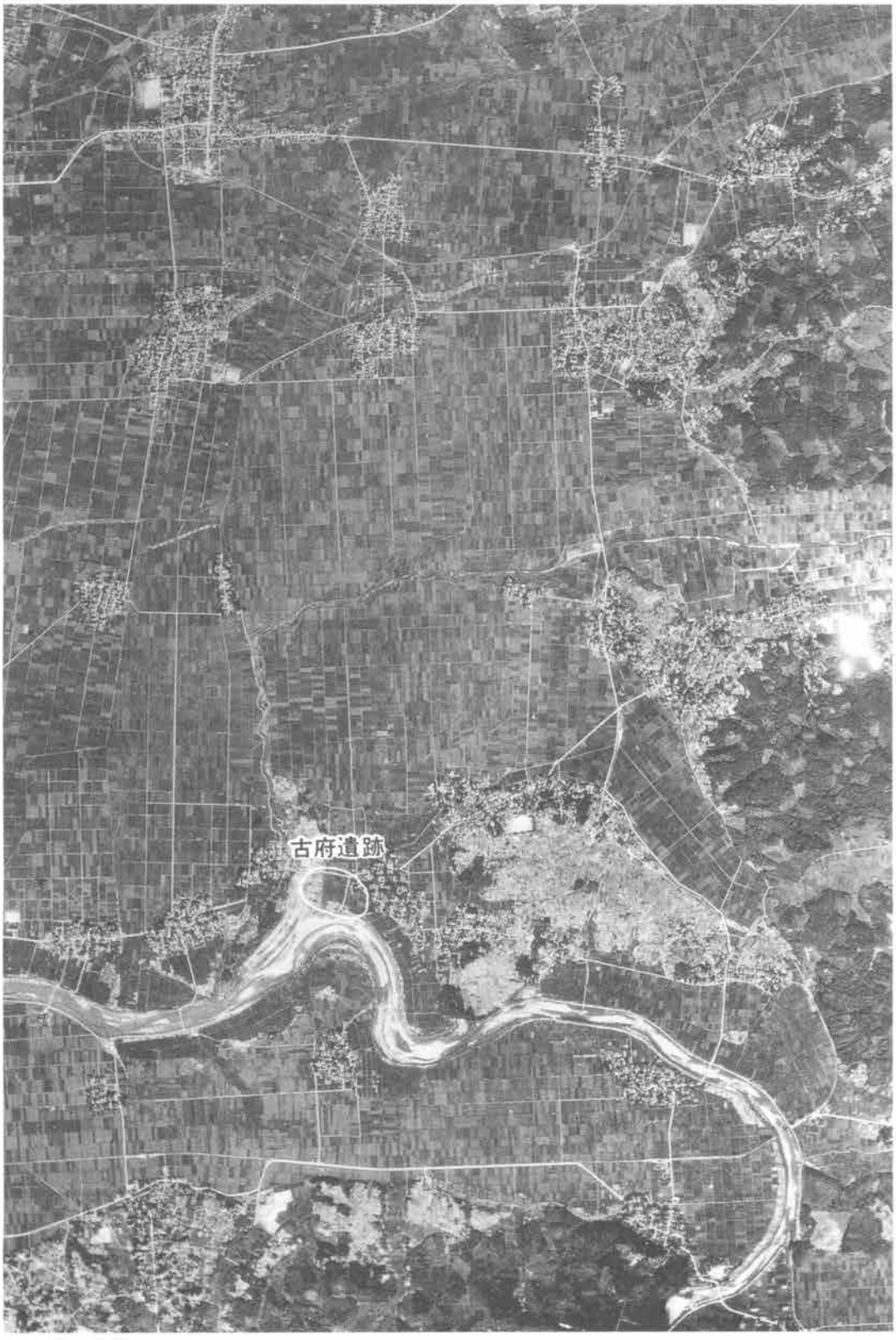
横田賢次郎・森田　勉　1978年　「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－形式分類と編年を中心にして－」　『九州歴史資料館研究論集４』　九州歴史資料館

横田賢次郎・森田　勉他　1978年　『大宰府史跡　昭和52年度発掘調査概報』　九州歴史資料館

田島明人他　1979年　『加賀市田尻シンペイダン遺跡発掘調査報告書』　石川県教育委員会

樫田　誠・望月精司　1985年　『戸津―第４・５次発掘調査概要報告書―』　小松市教育委員会

滝上秀明・木立雅朗他　1985年　『辰口町湯屋古窯跡』　石川県辰口町教育委員会



遺跡周辺の航空写真（昭和22年撮影）

図版2

1・2区調査以前の状況（西より）

1・2区完掘状況（東より）

4号トレンチ遠景（北より）

3号トレンチ遠景（西より）

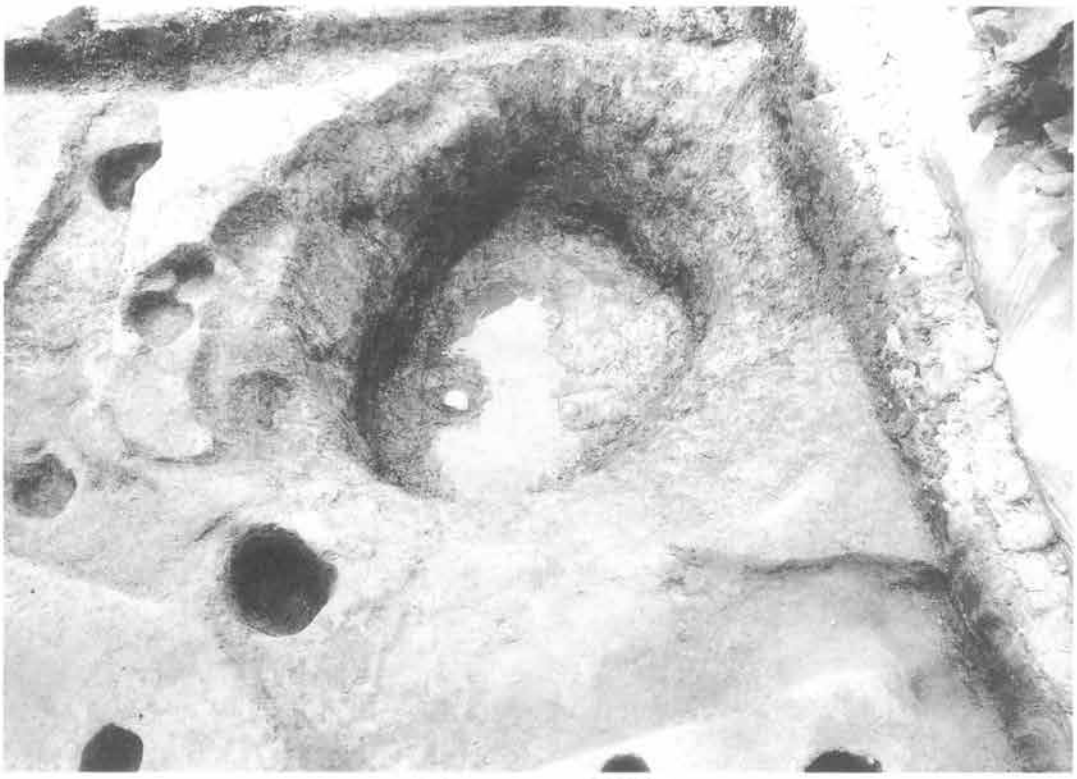
図版4

3号トレンチ完掘状況（南より）

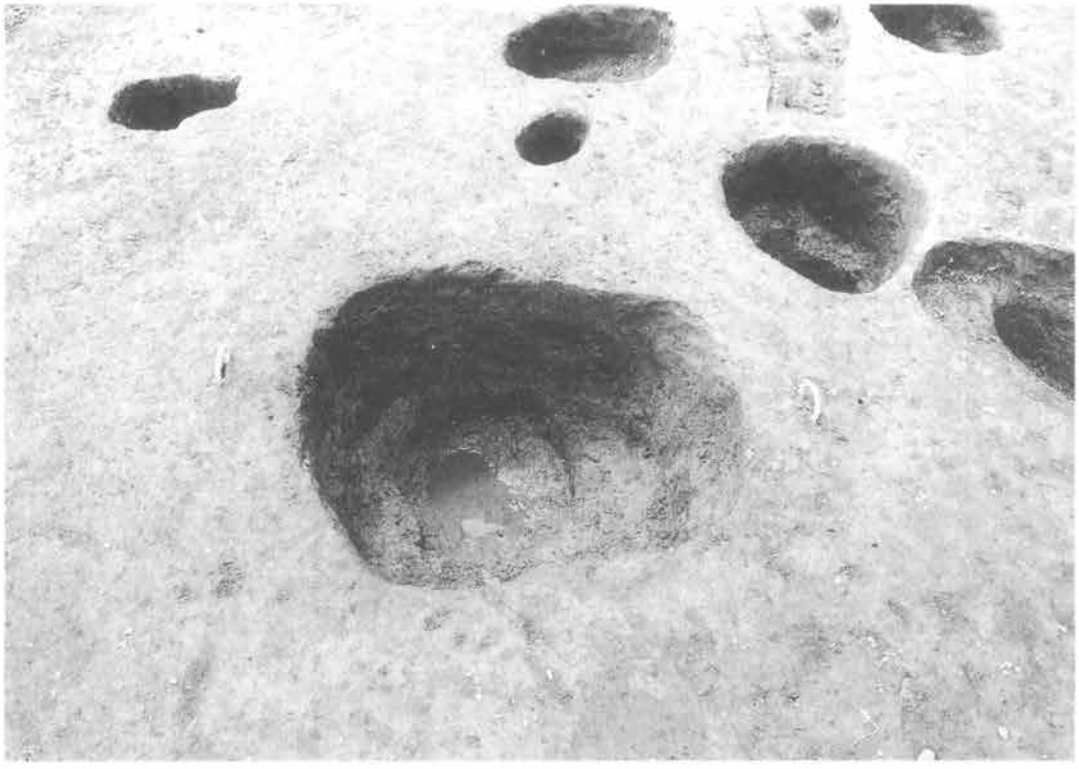
3号トレンチ完掘状況（北より）

4号トレンチ完掘状況（西より）

4号トレンチ完掘状況（東より）



1区SE－1　完掘状況

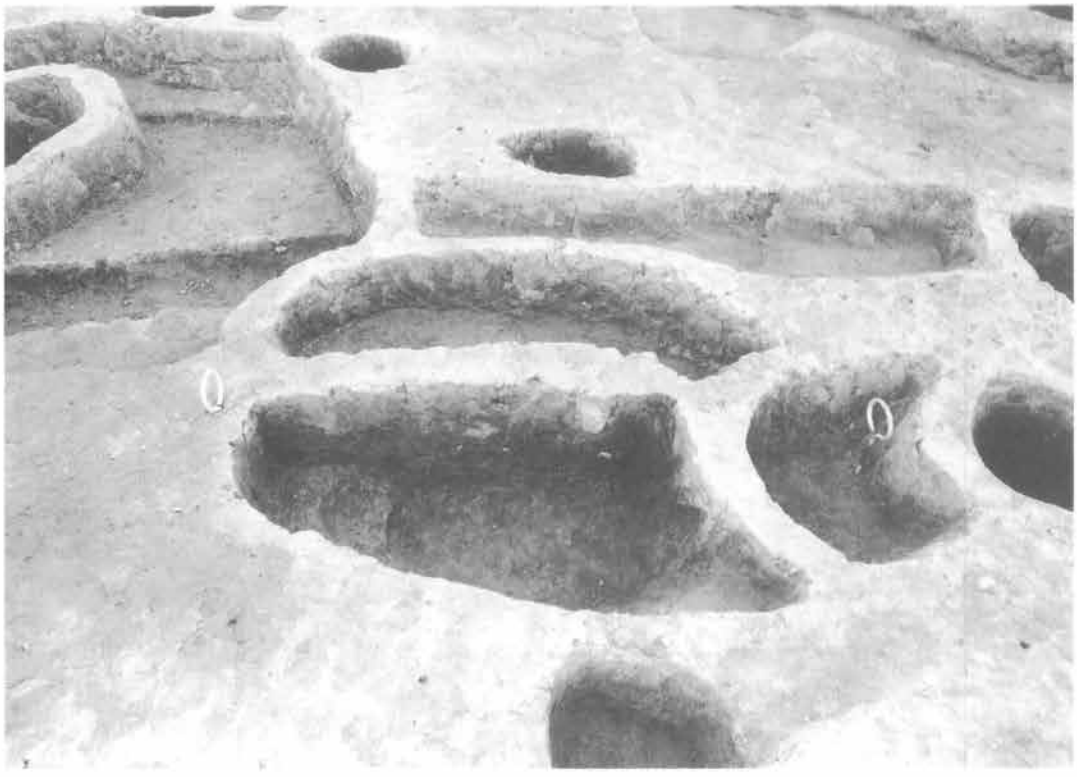


1区SK－1　完掘状況

図版6

2区SE－2完掘状況

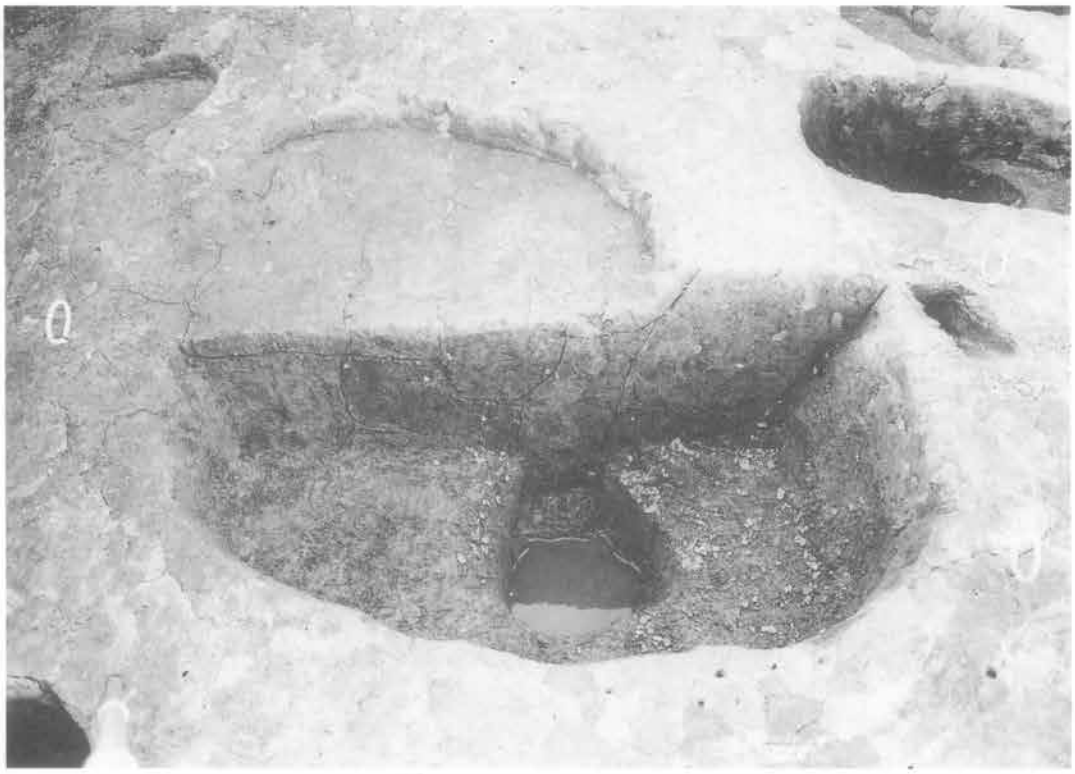
2区SK－2



2区SK－3

2区SK－5

図版8



2区SK－6・7土層堆積状況

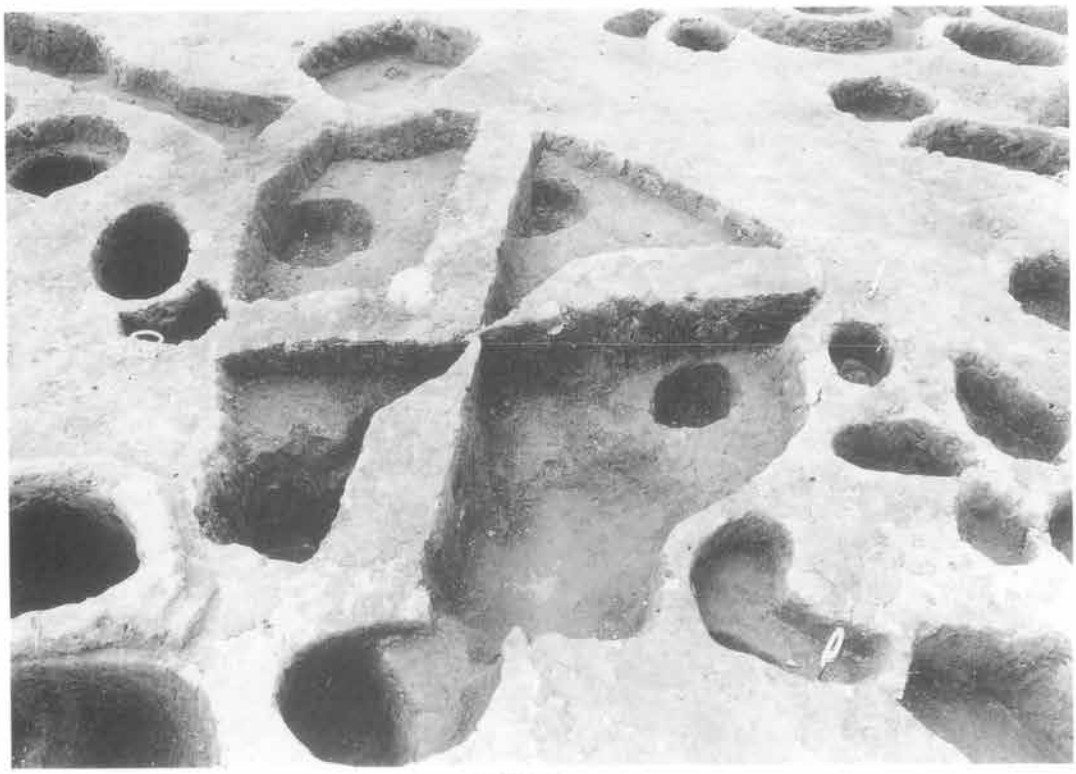
2区SK－8軒平瓦出土状況

2区SK－8　完掘状況

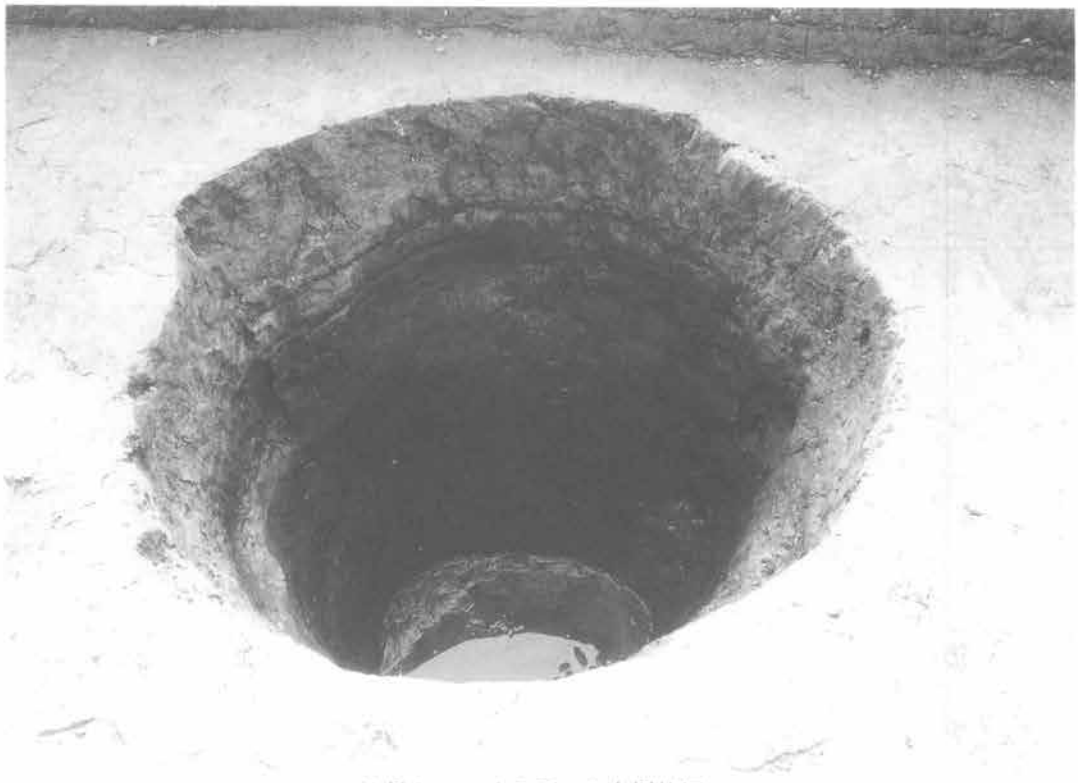
2区SK－9完掘状況

図版10

2区SX－1



2区SX－2



3号トレンチＳＥ－３完掘状況

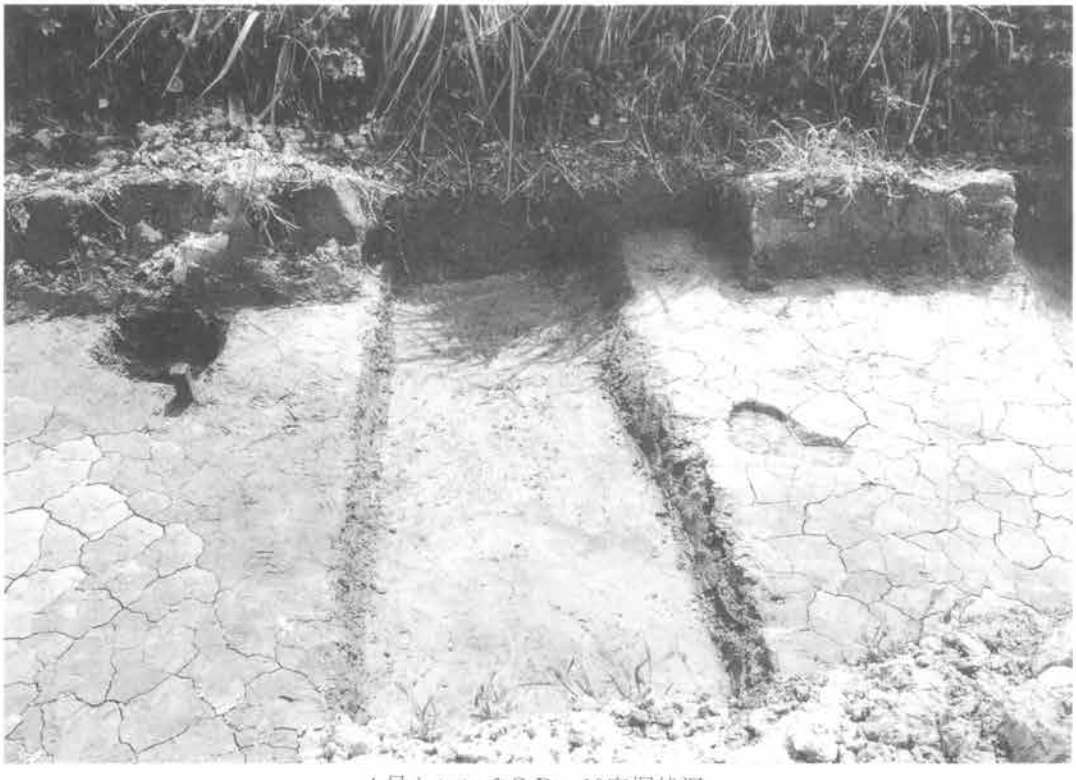
3号トレンチＳＥ－４完掘状況

図版12

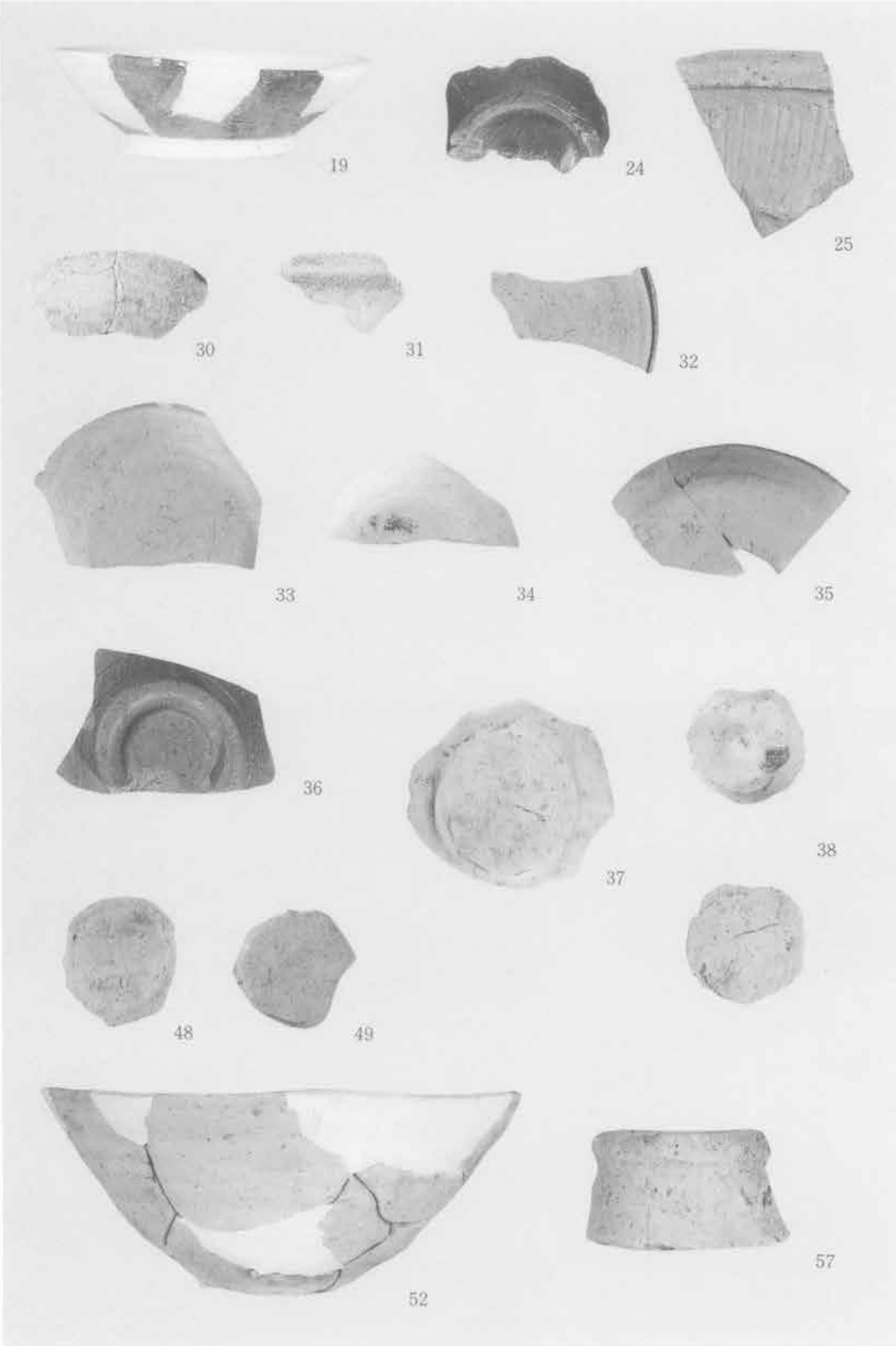
4号トレンチＳＫ－10土層堆積状況

4号トレンチＳＫ－11完掘状況

4号トレンチＳＤ－９



4号トレンチＳＤ－10完掘状況



古府遺跡出土遺物 (1)

50

61

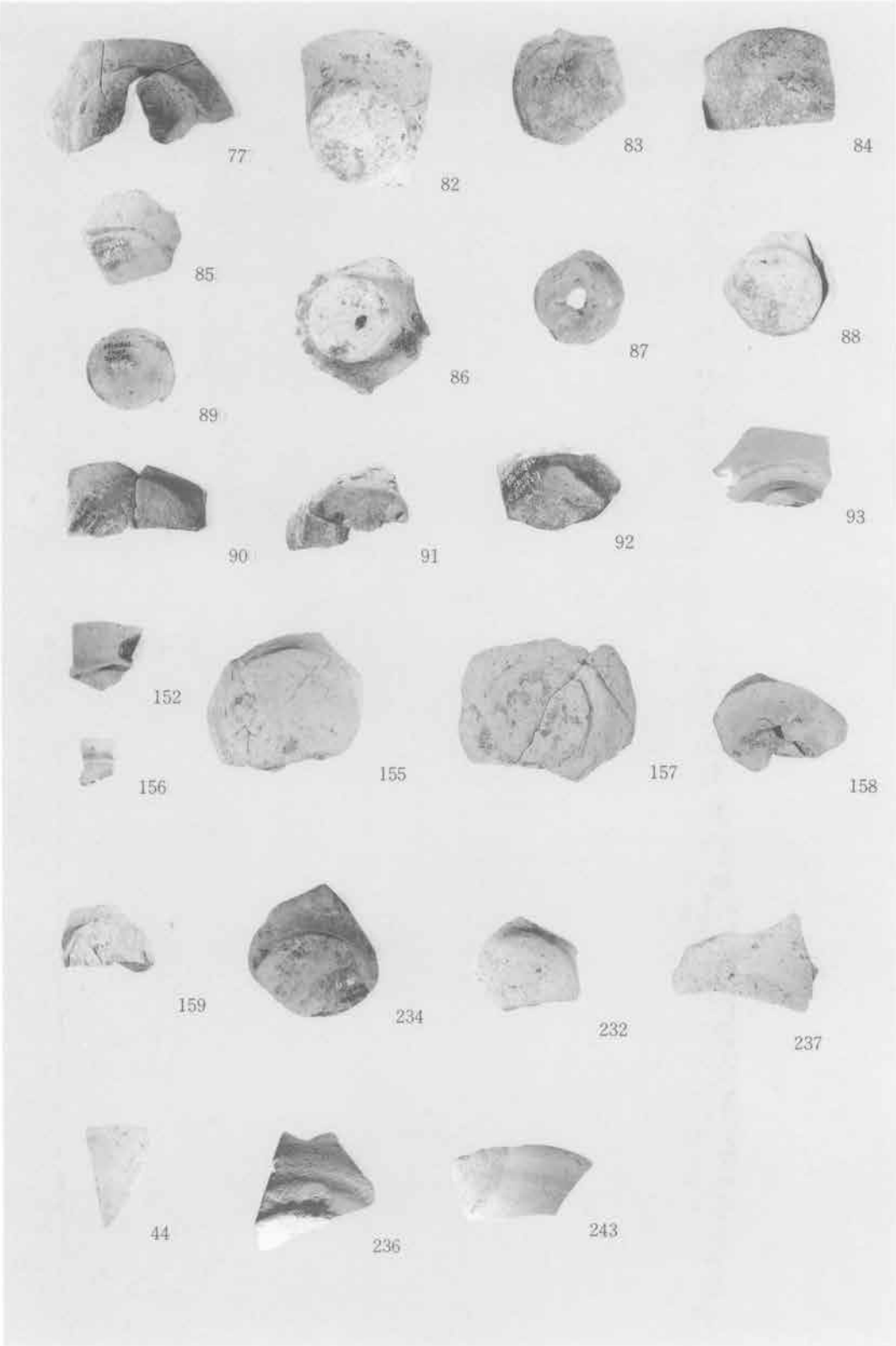
62

63

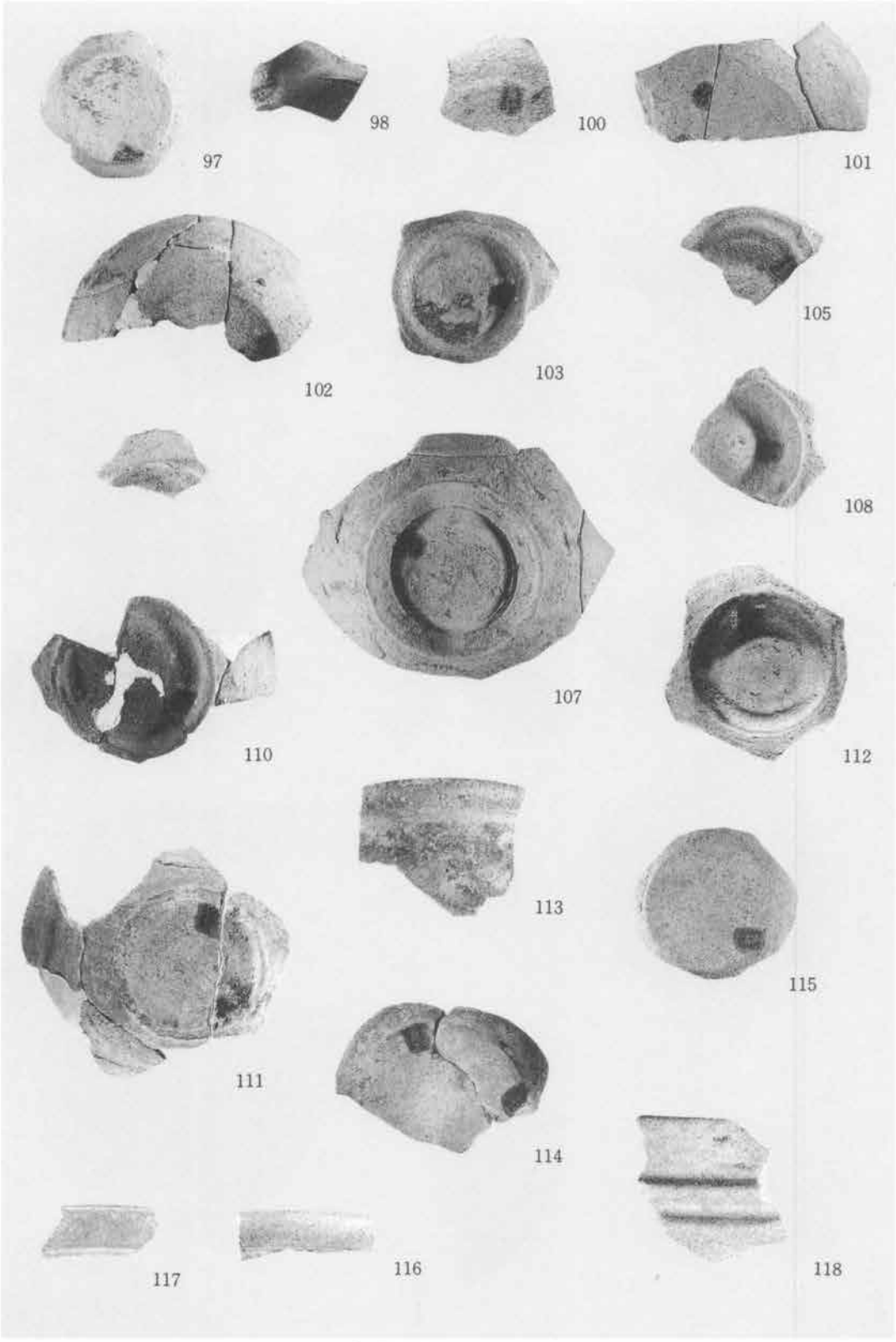
64

古府遺跡出土遺物 (2)

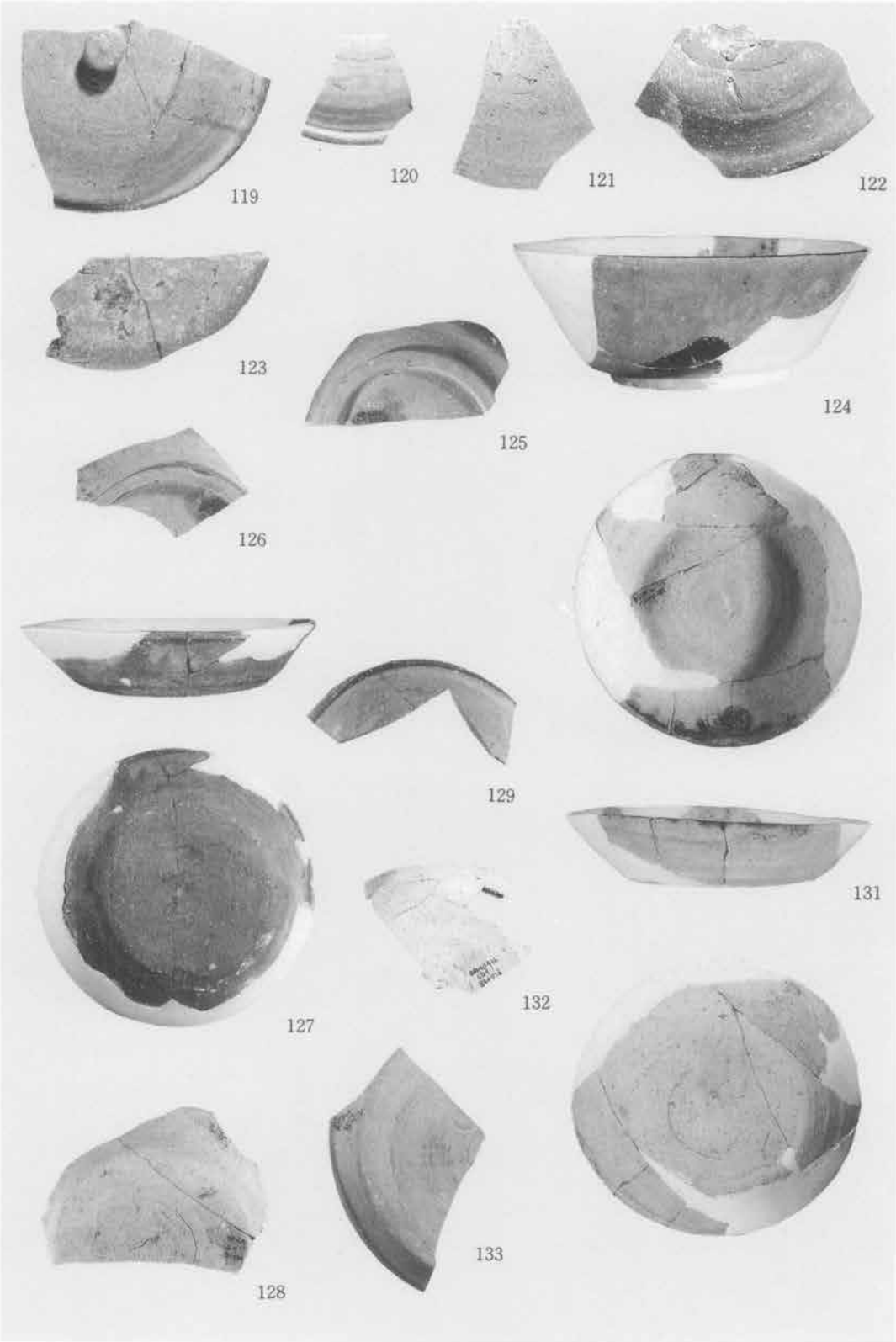
図版16



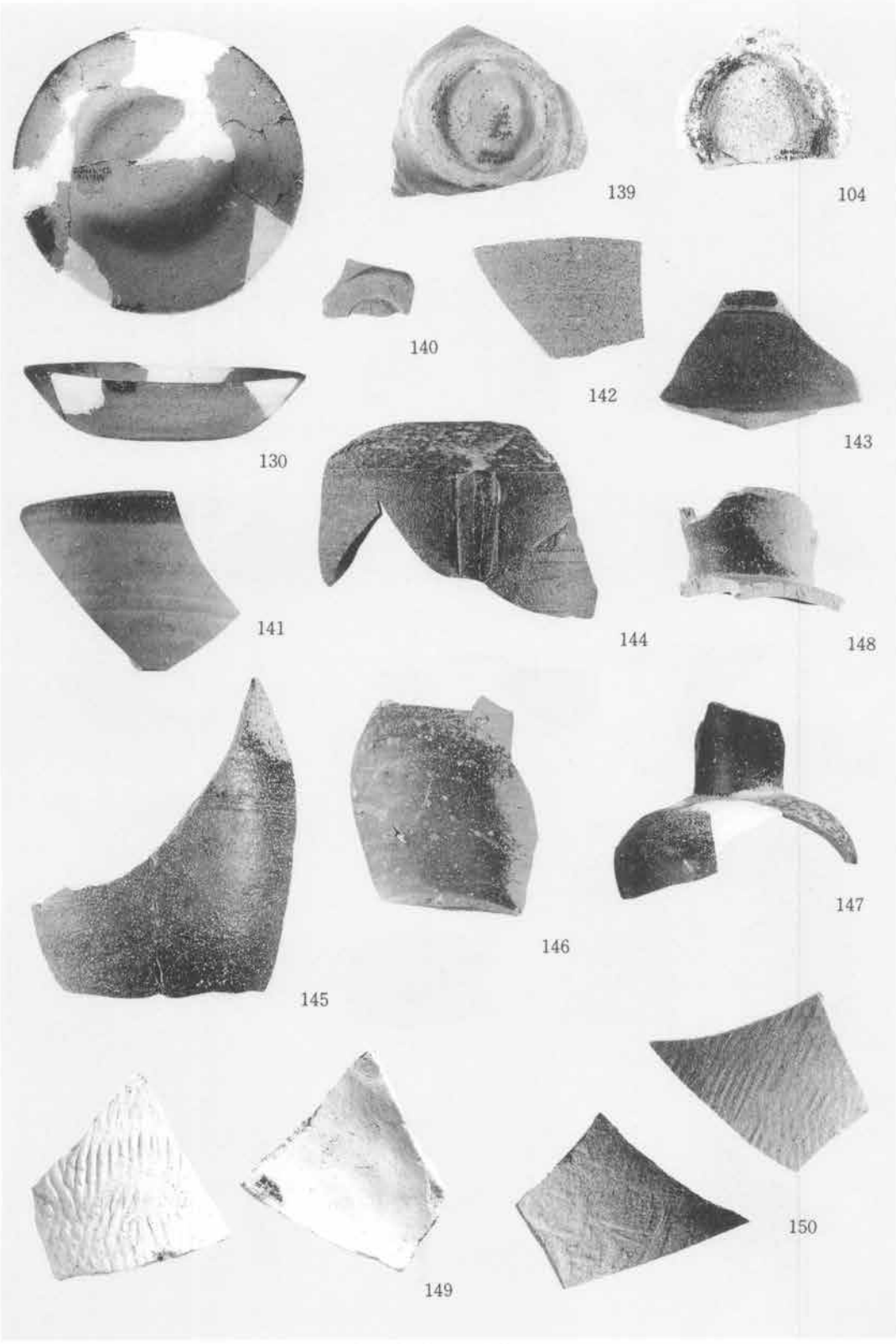
古府遺跡出土遺物 (3)


97
98
100
101
102
103
105
108
107
110
112
113
115
111
114
117
116
118

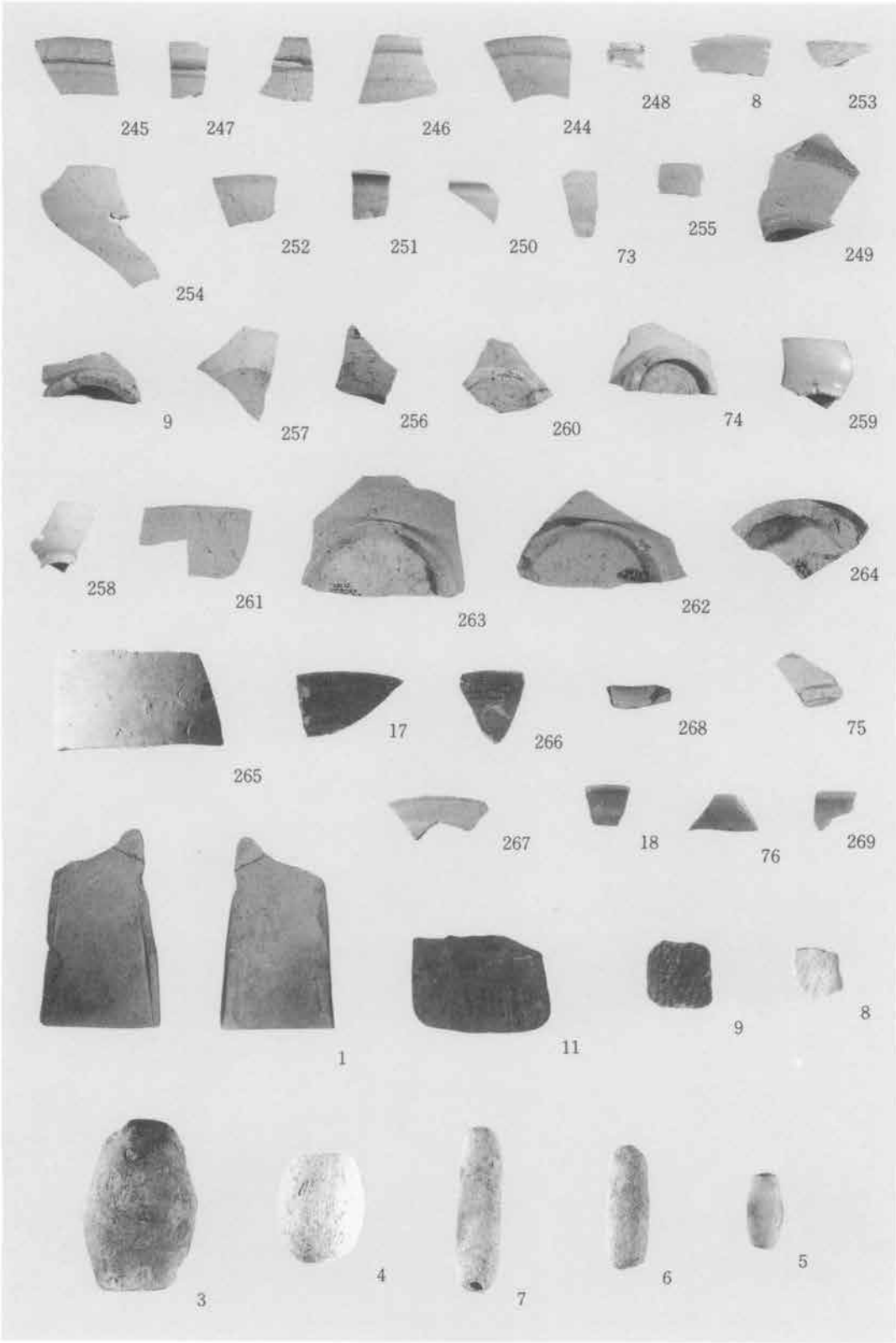
古府遺跡出土遺物 (4)



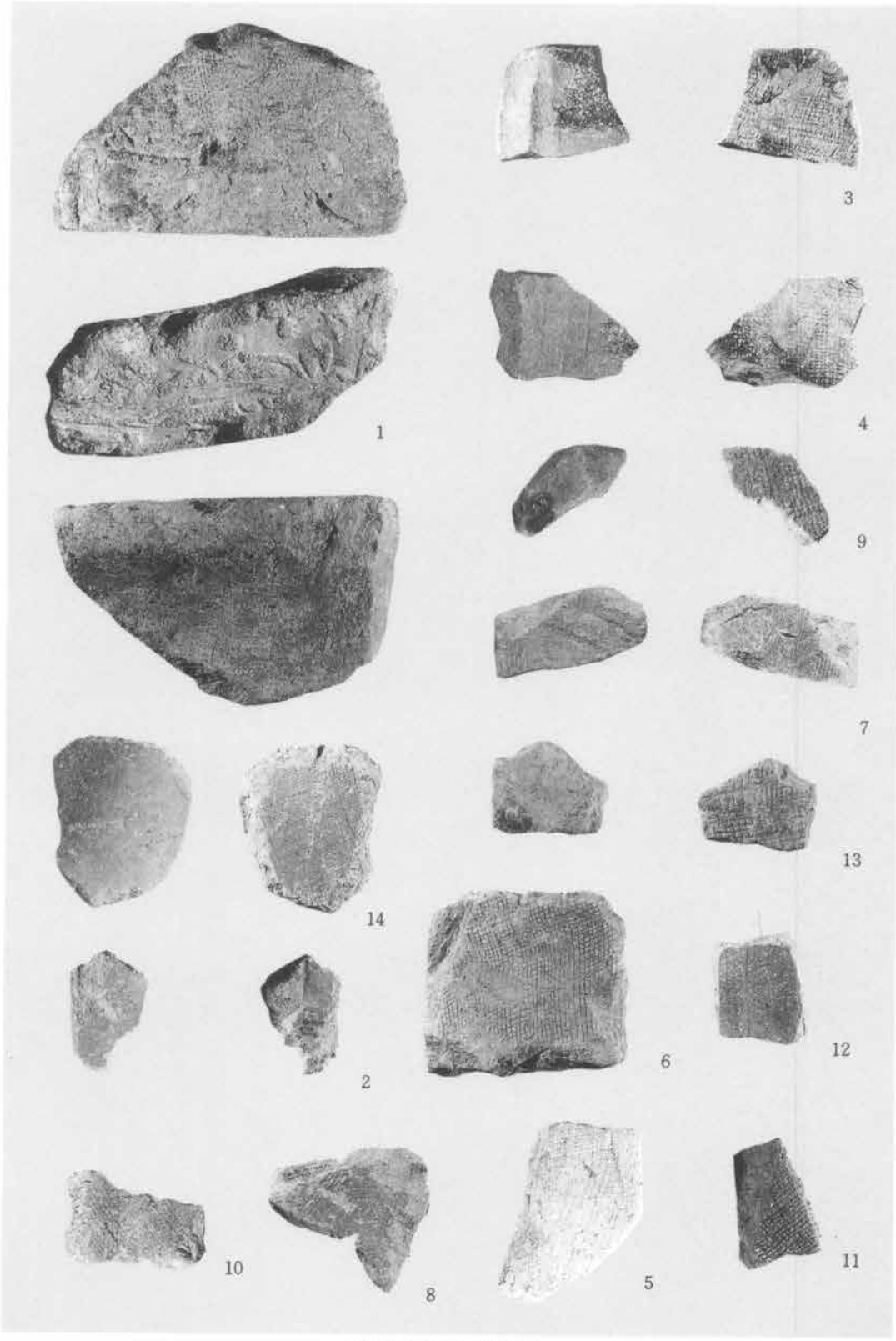
古府遺跡出土遺物 (5)



古府遺跡出土遺物 (6)


245
247
246
244
248
8
253
254
252
251
250
73
255
249
9
257
256
260
74
259
258
261
263
262
264
265
17
266
268
75
267
18
76
269
1
11
9
8
3
4
7
6
5

古府遺跡出土遺物 (7)



古府遺跡出土遺物 (8)

小松市古府遺跡

昭和62年3月20日 印刷
昭和62年3月31日 発行

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地
〒921 電話 (0762) 43－7692番(代)

印 刷 中川大正印刷株式会社

©石川県立埋蔵文化財センター 1987
本書は石川考古学研究会が石川県立埋蔵文化財センターの許可を得て増刷したものである。